の與へたるものにして、其の意義の一部分は、彼自身なり。されど若し、基督は英雄にして又た英雄以上に出でずとせば、縱しあらゆる英雄中の最大なるものなるにしても、基督論は勞力の徒費に過ぎず。我等は耶蘇の宗教的價値が、結局たゞ相對的ならば、其の價値の含蓄を發揮せんと力むるの要なきなり。

現代の一著述家はいへり。『新しき對象の爲めに新しき觀念を創造すべく、又恐らく新しき思想法を創造すべきはずなりとの思想は余の深く厭ふ所なり』（ベルグソンの『創造的造化』）。彼はこゝに哲學のことを云へども、此の種の智的惰性の現はるゝは、獨り哲學に限らずして、耶蘇の解釋上にも、著しく現れたる所なり。必要以上に事を增すべからずといへるは善き法則なれど、似て非なる單純に陷り、我等の舊き概念にて出來上りたる枠に、事實を嵌むることの不可能を見せしめず、又た新しき現實を昔ながらの範疇に盛ることの不可能なるを隱さんとするの憂あり。是れ畢竟既に知られたる舊概念中のものは、事實に適合せねばならず、との縱まゝなる假定より來る。要するに心を驚すべき新しきものはあり得ずと假定するなり。耶蘇の身に適用すれば、此の誤れる公理は、下の如き意義を有することゝなる。實際人類を點檢して、人の人たる所以は何なるか、又た何をなし得るかてふ概念を定め、耶蘇の經驗と行爲とにしても、斯く描れたる實驗の輪廓を越えざるべしと主張す。即ち偉大なることの普通の範疇は、英雄なれば、彼も亦た英雄たり得んも、是以上たることを得ずとなり。斯くして眞理に至る道を失はずんば幸なり。自然を理解せんと欲すれば、何人も其の通常なる所を見ると等しく、又た創始的なる所を見るを辭せざるべし。之と同じく、我等若し我等の救の爲めの神の最高意志を知んと欲せば、謙りて彼の語る最高の聲―あらゆる聲に勝りて我等の存在の奥底を搜る聲に傾聽せざるべからず。我等は世界にあり得べきことに關して知る所比較的に少し。而して時に苦痛多かるべき知識的經驗は、我等の科學と哲學とをば、豫期せざりし現實の程度に合す必要を示す。故に耶蘇の神的にして絕對的なる意義は、全く前例なき事實なりとも、人心の成立よりして受くべからざるものとして、無下に之を斥くべきものにあらず。彼の孤立にして、而も一切を決定する品性とても、之をあり得べきことゝして見ざるべからず。今まで用ひしことなき新觀念を用ひて、彼を記述するの必要を公平に認めざるべからず。云はゞ彼自ら英雄たり天才たることに興味を有せざりしに、單に一個の英雄又た天才たるを彼に强ふべきにあらず。彼は今も昔の如く、强いて彼を國王となさんとする人々を避けて隱れんとはするなり。

現代の神學が、基督論を棄る爲めに用ひたる第一の方法は此處にあり。夫れは我等が人間的と稱ふる現實の境にのみ耶蘇をおき、首尾一貫の論旨を以て、基督論が神の教義として、神學の一部分なることを否定す。さはれ此の方法は、新約聖書によりて鼓吹せられたる信仰に對しては、吾等の所說中に基督を包含せずして、神に關する基督教の思想を云々することを得ずといふ、單一なる考察によりて、排斥せらるべきものなり。基督は神が我等に對して意味することを全からしめんために必須の要

素なり。基督教の贖罪の經驗の結果として、神的てふ言葉に現れたる意義の富は、父と子とに關係せずして現す能はず。此の事實あるが爲めに、基督論は至要となる。

近世の基督論的思索を贅物なりと見る第二の見地は、カルケドン信條の定義を文字のまゝに遵守することなり。即ち此の定義を以て理論上完全なるものとなし、萬代までも之に則るべきものなりと觀る。いかさま誠實なる人ならば、此の領域に於て、教父等が多年なしたる努力に對して冷淡たらざるべし。彼等が屆せずして成肉身の爲に立てたる證明の價値、若くは誤に落ちんとする誘惑ありしに係はらず、我等の主の人格の完全と統一とを信條的文書に於て斷定したる決心は、我等之を過算する能はず、ニカヤは一朝にして占め得たる立場なるが、カルケドンに至りては、たゞ定義するのみならずして理を說かんとする傾向を示せり。固より微かに仄めかすに過ぎざれども、兎に角特殊なる解釋の形を示せるものにして、之を携へて福音書の研究に入ることは眞實の益を受けずして却りて明に失ふ所あり。共觀福音書に歸る時、我等は書翰の光を携へざるべからずと主張するは可なり、何となれば是は單に、基督に關する使徒の證明は、自己に關する基督の證明の結果たると共に、その延長たるを意味すればなり。さはれ例へば、マコ傳を讀む時、心の奥にカルケドン信條を蓄へ、其の權威ある條項に照して、讀む所を解釋すべしと主張するは全く別事なり。是は學術的の教義史を無視することとなるなり。

我等は獨立の研究をなすに臨んで、單純に或は文字通りに傳說を受くることを防止すべき、或道理を考へ置くが可なり。道理とは唯に、ロゴス觀念が、傳說の上に及ぼしたる感化は莫大にして而も必ずしも常に健全なりしにあらずといふことにあらず。又た是は唯に、我等の主の人格の祕義に到る道一にして止らざるが、此の可能性の中より、傳說は其の一を選びて、歷史を愛する時代に夥しき困難を供へたりと云ふ事にもあらず。是等は些々たる問題にして云ふに足らず。現代思想より觀れば、傳說其の儘の基督論に存する主なる缺點は、所謂二性の教理と稱せらるゝものをば、偶然にあらで、主義の上より主張したるに在りき。二性の教理とは、如何なるものなるかは、ウエストミンスタ信仰告白の供給する形によりて見るを便利なりとす、曰く、『神性と人性との、全くして且つ別なる性質は、一の人格に於て分ち難く相合し、化せず、溶けず、混ぜず』。此の中の大切なる一語、『別なる』といへる意味は、同じ章の後の部分に出で來る斷言より窺ふを得べし。曰く、『基督は仲保の事業をなすに當り、兩性を以て働き、各性は固有の業をなすなり』(第八の二)。神人的人格を說ける此の見解は、レオの書翰中にある、『互に』の一語に現れたるものにして、傳說は之に據りて安んぜりと雖も、今日は福音的なる神學者の多數に滿足を與ふる能はず。此點に於ては、我等は宗教改革後の時代に、いや增し複雜になり來り、耶蘇の動的生活の現實には似つかぬ抽象的觀念となり終りたる、性の交換の

スコラ的の精微と技巧とを喚び起すを要せず。又た『性』なる語は、其の目的に相應しきまでに、充分倫理的ならず、故に或點に於て特に神格の名稱に用ふるに適せずといふにもあらず。何となれば、茲に妥協の道もあるべければなり。專門的にして窮屈なる意義は之を避けて、我等は人の『性』とは、人間本來の成立ちに屬する總てのもの、心靈的、肉體的、天賦の總計なりといひ得べく、又た之に反して、神の『性』は、神の存在の部分をなせる總てに等し。若し此の二點を相合するならば、我等は神人なる耶蘇基督は、自ら兩者の活ける統一なりといふを得べし。是等の反對論は、勝ち難きものに非ざるべきが、尙ほ二つの不幸なる困難は殘れり。

先づ二性の教理は、其の傳說的の形を以てすれば、耶蘇の一生に信じ難き徹底的なる二元論を有す。耶蘇より來るあらゆる印象には、完全なる一致を感ずるに係らず、此の說によれば、此の一致せる全體は、區別の龜裂によりて二分さるるなり。彼は最早一人にあらずして、己に對して相別る。既に說きし如く、此の種類の二元說にして、若しも措辭上の一形式以上のものなりとせば、夫は神が肉に於て自己を現はすことにより、人類を贖ふてふ考を無効に歸せしむものと觀られたり。斯くて成肉身の眞理は、神の方と人の方とより交々損ぜらる。基督には、有りしことも、爲せし事も、一切單純にして結合せるに、此の說によれば、是等は全く消滅す。何となれば、神は人間の生活をなしつゝあるにあらで、却りて人の經驗と狀態とより自己を控へつゝありて、他を救はんための降下は更になく、基督は神として此の事を行ひ、人として此のことを受けたりといふなり。詮ずる所、神性は無感覺なるが故に、斯くあるの外なきなり。此は耶蘇の非倫理的なる祕義と、又た一種兩面的なりとの深き印象を人に與へて、失望に至らしむるなり。福音書の讀者は、絕えず己の本能的直覺に對して用心せざるべからず。福音書著者の描きたる耶蘇の自意識は、之を神的と呼び得べく、又た人的と呼び得べし。全眞理を現さんとせば、二つながらともにありといはざるべからず。要するに是れ一つの意識にして、常に靈的一體として動けり。之を別つ說は、たゞ明瞭なる思想に害あるのみならず、宗教的の眞理と力とを害す。其の結果として、基督に於ける神人兩性の結合せる道は、外面的にして他より引き離して一を考へ、又た抽象的に分解すべしといふことゝなる。教會に傳れる基督論が、神と基督と根抵に於て一なることに殊に意を致し、且つ此の一なることは、結局神祕なりと主張する所は、疑もなく効績の存する所なり。他の一面に於て、此の眞理を解釋するに當り、全く新約聖書の事實と觸れざるやうに此の祕義を示すは、容易ならざる過失なり。要するに二性の教理は、眞面目に之を解するならば、一つの活ける全體の代りに、無力なる半個者たる二つの抽象を與ふことゝなる。そは一つの具體的生活の二側面に過ぎざることを實體化したるものなり。此の兩側面は、何れが何れより離れても、全體の事實が全く異なるものとなるほど明白に現實なれども、さればとて、彼等のみにて一個の職分を備へたる實體にして、之を此の如きものとして論理的に評價し、或は互に調和せしめ、或は

心靈的ならざる方法に於て結合し得る如きものにはあらず。

第二に二つの性が、一つの人格に於て、『相合して離るべからず』といへる其の人格に關しても、一個の困難あり。前とは頗る見地を異にすれど、今一度『性』なる語に就て、不利なる報告をなさゞるべからず。神と人とに、多くの屬性と特性とが合して、複雜なる全體をなすものありて、統一せる自我より離れて實在せる『性』といはれ得るものあり、との假定を基礎として、昔の教義は成立つなり。されど人間生活の樣々の要素、即ち智的、道德的、感情的、社會的の要素が、眞の實在或は現實を有するは、個人的經驗の内に在ると云ふことより勝りて確實なることあらず。淡泊にいへば、樣々の局部を集めて一となし、意識的生活の光と親密とを以て之に充たしむる精神をば、人格より抽出し去れば、我等が漠然『人性』と呼ぶ所のものは有らず成るべし。是は精々の所假說的なる原料品に過ぎざるものとなり、之を採りて自意識を加ふれば、眞實なる人間の經驗に缺き難き要素となるべくも、別けて立つ時、人間性といひ得ざることは、水素のみを水の性質といひ難きが如し。我等は活ける統一をなせる一要素をば、其の内に於ても、又た外に於ても、同事物なりと考ふる誤謬に落つべきにあらず。然るに傳說的の思想によれば、人間の性は、よし一時的なりとも、人格を離れても現實なるものと考へらる。專門的用語を用ふれば、人性は實體を備へず、人格を作る所のものは、先在せるロゴスの自我にして、簡單に人間性と呼ばるゝ、複雜なる全體を彼自身の全體と合せしめ、彼の眞正の性質を之に授く。教會の教師の中には、人格的ならざる人性の確實ならざることを鋭く感じたる爲めに、基督の人性は、個別的に即ち夫自身の權能に於て、人格的なりと主張して、此の平均を正さんと勉めたる者もあり。斯くして一つの基督に、二つの人格を附する結果となるを避け難し。而して二重の人格といふに至りては、我等が理解し難きものあるのみならず、不可能なるを知り得る所のものなり。今は神が働き、次には人が働くといふ如き存在者は、信仰にも、理論にも、好しからざるものなり。神格と人格とは、全く種類を異にし、又た相別れて、眞の一致は考へ難く、神格に達せんとせば、人格の外に出でざるべからず、其の反對を云ふも然りといふ意味を含む。

されば二性の論は、一方には二重人格といふシラ（Scylla）の難あり、他方には非人格的の人性といふキャリブディス（Charybdis）の難ありて、兩難何れかを冒さざるべからず。若し新約聖書が勿論本能的になせる如く、耶蘇の人性を眞面目に見るならば、二重自我の觀念に破船せざるべからず。之に反して、若し人格の一なるを主張するならば、避け難き結果として、人性の圓滿を缺き、共觀福音書の耶蘇と一に見ること困難なる人物を示さざるを得ず。傳說にとりては、人格の統一は常に問題にして、最後まで祕義なり。新約聖書に取りては、是は第一の實事（リアリティ）なり。傳說に取りては、是は錯雜せる推理の過程を經て、試驗的に推定せる假說的の斷案なり。新約聖書に取りては、是は直接にして且つ獨創的なる印象にて與へらるるなり。傳說にとりては、此の問題は、二個の抽象を結合するまでのこと

にて、之を解說するは、唯兩者を對照するまでのことなり。新約聖書より宗教をとる人にとりては、代々の基督者をして、此の具體的、歷史的人格なる耶蘇基督を神と告白したる基礎を研究するにあり。若し常に新に反覆さるる再解釋の事業をば、カルケドンの決定的眞理を貶するものなり、と非難する人あらば、其の答として二つのことを注意せん。第一に、人間の知力が、其の機關の精巧、又は微妙に於て、第五世紀以來何等の進步をなさずと云ひ、若くは此の進步は必ずしも基督敎思想の進步に貢獻せずと云ふが如きことを信ずるは難し。第二に、近代の著者は實際孰も、其の正統たるや否やは別として、古代敎會の範疇の上に、多少現代的なる解釋を置けり。苟くも宗敎會議の定文句を繰り返すに滿足せざる以上は、此の如くあるべき筈なり。歷史を書くにしても、歷史的に眞理の解釋を受くるにしても、之を記述せんには、或る祕密の繫りによりて、現在の實驗と關係し、之によりて見地を新にし、新しく且つ價値ある眞理の要素を注入する所なかるべからず。現在に於て、深く感じたる感興あればこそ、過去を活す力を與ふるなれ。

且つ敎父の思想には、耶蘇の人性を重んずる所缺げたるが爲めに平衡を害せられたるを正す必要あり。現代の讀者は、古代の書には多く假現說の習氣を帶ぶるを意識せざる能はず。キリルの如きは、蓋し最も善き典型なるが、基督の人性は、たゞ類似したるものに過ぎずとせられたり。此の偏見は、益中々世の思想を壓し、遂に敎會の解釋者の思想に於ては、耶蘇が誘惑せられ得べく、弱く、あらゆる健かなる人間の感情を有したることを見るべき、新約聖書の文字の意味を抹殺したるに同じ。智慧も齡も生長せることを明瞭に記せるに係らず、之を無視し或は過りたる方向に向けられたり。ロゴスとの結合は、人たる彼の經驗を不自然にしたるかと見えたり。宗敎改革以來、之が矯正運動始り、(該運動は、人間的の事實を出發點としたる意味に於て、人間中心の運動なりき)、之によりて、近世の耶蘇に對する宗敎的評價に加ふること如何に多かりしか、是れ我等の說明せんと試みたる所なりき。敎會は耶蘇の實生涯とメシヤ的意識との意味より新しき印象を受け取りたり。しかのみならず、傳說的の基督論に於て、往々見る如く、人となりて肉體の生活を營み、地上の經驗の制限を受くるに當り、神がなせる犧牲の莫大なることに關して、是が爲め調子を低くすることは不可能なり。上に記したる、一部分反倫理的なる傾向は、自然に聖典に就ても、又た之が人の心靈に働く方法に就ても、十分道德的ならざる見解を伴へり。改革時代の神學者が、決然として神の唯一子にして我等の贖主たる歷史上の基督に歸りし時、彼等は又たパプテスマと聖晩餐とに關する原始使徒の觀念を復活せしめ、之を魔術的なる恩寵或は半物質的なる感化祝福を與ふるにあらで、救拯の力全體を備へたる耶蘇基督を與ふるものとせしは、注意すべきことなり。基督に就きて新しき見解を得る每に、歷史的事實の觀念は益々活潑にせられたりと知るべし。

故に基督に於ける信仰は、特殊なる基督論的公式を固守することゝ混ずべきにあらず、又た傳說に

よりて固定したる抽象的形式に附與せられたる二性論は、我等の主に對する信仰的評價より離すことを得べきものなりと吾等は斷言するなり。果して此の如くならば、彼に對する信仰の前提及び含蓄を新に解釋せんとする努力は、單に知識の恕すべき運用なるのみならず、教會の福音的使命に對する義務なり。げに主の靈のある所には、自由あり。ケエレルのいへる如く、『傳說的教義の眞髓をば、異端を排斥することに存すとなす人、或は其のスコラ的形式に存すとする人は、神學と信仰とを混ずる誤に陷るものなり。之に反して、此はたゞ歷史的形式（形而上學的傳說と別なる）にして、之なくんば活ける神を信じて其の證明を天下後世に傳ふること能はずとする人は、我等は別に新しき教義を要すと論ずる人々と手を携ふることを得るなり』（『應用したる教義』一三七頁）。

單に傳說の言葉のまゝを守ることは、現代の學者に何の益する所あらざるが故に、問題外なりとするも、舊き教義の細目を好まざると、基督論全體を棄るとは同一事に非ず。我等は人々に向ふて、思考する勿れと訴ふること能はず。彼等は基督者となるの時、其の知力をその背後に棄て來りしにあらず。されば初代に於ける如く今も、建設的原理は、徐々に働きつゝありて、彼等を用ふることによりて、我等は神が基督に在りて、我等に近づきたることに就て、一層深き理解に達することを期待し得べし。基督によりて活かされ、又た鼓吹されたる人は、其の人格と事業とに關して、新しき思想を提出して止まざるべし。『理智より出たる困難は、理智的に處理せられざるべからず』とは、何人も能く思ふ所なるべし。何時かは我等の解釋の如きも、亦た等しく廢れて不充分なるものとなるべしと云ふも、是は基督論の再解釋への異論にはあらず。又た考ふべきは、熱心なる人の大部分には、例へ實際不完全に之を理解し居れるにしても、或る教義を根本に置くことゝ、問題の教義を全く棄ることゝの間には、到底中庸の道のあらざることなり。彼等が人生と思想とに關して、明瞭に解し能はざる基督は、彼等に取りて、實在せる基督にあらず。又た是等の大なる波瀾を惹起したる責任は、我等のみにあるかの如くに語るは無用の事なり。基督に關する樣々なる現代的理論は、既に世界の前に揭げられたり。其の中には我等が拒絕する外なき種類のものもあらん。而も充分に之を處理せんとせば、現代の基督教的思想に訴へ得る原理に照すの外なかるべし。此の原理とは、互に矛盾する所なく、積極的建設的の叙述に地位を占むべきものなり。基督に關する理論は、何れも後世に至り、之を批評し又た改造する者の起ることは、必ずしも人を惱ますものにあらざるのみか、反りて其の題目の偉大なることを深く證明するものならずんばあらず。基督論的理論は、眞に大なる教會堂の如し。『禮拜の爲めに美しく、奉仕の爲めに偉大にて、世界の喧噪の避け所として崇高に、而も永久に未成品なり。』如何なる思想を以てし、又た如何なる言葉を以てするも、世界の無限なる救主は、復製さるべくもあらず。

且つ此の如く、新に基督を解釋する事業は、我等の宗教的奉仕の活ける部分なることは否定し難か

るべし。彼は心情（ハート）を以て愛せらるべきのみならず、又た智能（マインド）を以て愛せられざるべからず。苟くも思想ある人ならば、耶蘇基督を崇め、彼に於て祝福と永遠の生命とを發見しながら、彼の人格に就て、一貫したる見解に達せんと欲する强き願を意識せざることは不可能なり。我等が既に彼に就て知る所のものは、我等を信仰と禮拜とに導けり。果して然らば、一層深き知識に達し得べしとせば、夫が彼の御名に關する我等の告白に一段深き知識を加ふるにあらずや。今日は物質の性質を研究するに當り、時と力とを費して吝まず、自然の征服に一歩を進むる毎に、之を誇り、熱心なる感謝を以て之を迎ふる時代なるに、基督教の思想家が、基督の人格に對して、明瞭にして且つ眞實なる判斷に達する努力に缺くる所あるは耻づべきことにあらずや。何故我等は、『無智にして且つ不可知なり』との悲しき告白を以て、苟くも是等の問題より遠ざからんとするか。此の如き言葉は動もすれば、人の心意が基督の威力に壓せられて、彼の前に默從し易きことを證するものと解せらるれど、實は福音の眞髓なる、イマヌエル即ち神我等とゝもにありてふことが、眞に能く我等に印象せざりしことを暗示するなり。今日教理を論ずる多くの學者は、系統的思想の價値に關して疑を懷き、或は我と我が心を恐るゝ狀あり。リツチル神學は、信仰の爲め貢献する所多かりしとするも、聊か神學に於ける理性の活用を輕んじたる所あり。我等の最も要する所は、智慮あり教養ある勇氣なり。我等の要する所は、深みに漕ぎ出づる勇氣ある精神なり。信仰と理性とに立脚し、之によりて基督論の大なる現實をば、眞實に且つ積極的に運用し得て、時代の知識に應じ得る原則と方法とを立て得らるべし。今や此の問題を新に點檢すべき時期は熟せり。辨證家は処部の人の心を得るに急にして、それが爲めに、いひ難く尊き賜物を代へて眞理の最小限に滿足せんとする弊なきにあらざるが、我等は單に辨證家の見地よりすべきにあらで、一層切實に基督論の本領の見地より新に討究せらるゝを要す。即ち全く基督に順ひたる人にとりて、基督は誰にてあるか、出來得るならば、其の全體を纏めざるべからず。而して貧弱なる信仰の平均を標準とすることなく、若し基督が仲保者にてあり、天父に對する辯護者にてあり、全世界の罪の贖となる人ならば、彼は果して何人にてあるべきか、頑固に正す所なかるべからず。我等は基督教の告白と兩立し得べき、低き形の信仰のみならず、其の血を以て我等を贖ひたる、耶蘇の信じ難き不思議の幾分を我等の心に捉へざるべからず。近頃一人の著者は、福音の重大なる要素を論じて、『神が新に彼等に啓示したる想像し難きほどの偉大を會得する爲めに、人間の能力の擴張を要求する』ことを主張したるが、實に此の擴張、無限、盡きず終らざる廣大等を感ずるは、我等が理論的叙述に收めざるべからざる要素なり。基督論の研究者は、彼が敬虔の領域に於て、超越的對照を捉へんとして、常に新なる努力の經驗を有すべき如く、理論の領域に於ても同じ經驗をなすべきことは確實なり。信仰と教理と二つの天地に於て、基督に關する新しき觀念をば作りては、又た充分ならずとして、之を解き又た改め、一層深く廣く且つ高きものに讓ることは常に起る所なり。

尙ほ殘れる一事あり。抑々我等は形而上學的見解に達することを志すべきか、將た思想の大海に乘り出すを要する如き難問を提出することなく、倫理的なる基督を知るに滿足すべきか。即ち超越的問題は不適當なりとして、又は詮する所附屬の問題なりとして、初より之を蔑視すべきか。耶蘇に關する解釋は、純理的となるを避けずして、之を考へ拔くべきか、將た恭しき不可知論的態度を持して、斯る高遠なる領分に立ち入ることを避け、接觸し得る經驗の範圍內に留りて安全を計るべきか、我等の職務は孰にあるか。志望薄弱なる第二の方針を辯護する人、今や益々多を加ふ。彼等も彼等だけに、積極的の興味に導かるゝことは疑を容れず。贖罪は主として、良心と感情とによりて認識し得べき賜物なることを主張し、耶蘇の自意識こそ、神の心を其のまゝの鏡なりと考ふ。是等の深き福音的見解は、思ふに廣き同情を受くべく又た受くるに價ひす。信仰は必要なれども、基督論は贅澤なりてふ主張は、公言せざるまでも、隱約の間に存し、且つ今日の人が、不思議にも系統的思想を好ざる趣味に合する所あり。又た純理を信用せざる人の爲め、第一に立てたる理屈は、怠惰なる人も、之を歡迎し得べし。且又或場合には、所謂基督の道德的見解に重を置くといふ裏面に、彼の眞實の超越性に關する消極的結論を隱すこともあり得るなり。

此の主張の大體には、多く言ふべからざるものあるは固よりなり。フォルサイス博士も、敎義を道德化することが、總ての現代基督敎思想の眞髓なることを示したり(『耶蘇基督の人格と位地』第八講第九講)。例へば、神の全能てふ概念の如きも、單に本體論的觀念の主調よりして、人格と人格との間の如き倫理的關係に移さゞるべからず。神の全能は、空所にて運用せらるゝにあらで、道德的條件の下に道德的宇宙に行はるべきものにて、人の救の爲めに、神は何をなし得るかてふ問題に、直接の關係を有するなり。斯く神の屬性を倫理化することにより、成肉身に關する最も重大なる諸問題、別けても確知されたる歷史的事實よりも、初代敎會にて用ひられたる、有形的にして機械的なる思想の形式より來れる問題の厄を免かれ得て餘りあらん。此の如く倫理的範疇を用ふることは、優に然るべき道理あり。良心と何等關係なき觀念は、我々の用ふるに適せざるものなればなり。充分個人的にして心靈的なる用語を用ひて、基督論を再述することは、長く且つ勞力多き事業なるべきも、避け難き事業にして、之を正しき道に進むるならば、永久に有効なる結果を得ることを望み得べし。

同時に、良心の形而上學たりとて、矢張り形而上學たるに相違なきは明かなり。純理論よりも更に靈活なる興味によりて導かるゝとはいひながら、依然として現實なるものゝ解釋なり。贖はれたる人に關する道德的の確實は、之を辿り行けば、遂に宇宙の最高にして最後なる事實に接觸せずんば止ず。不可知的の絕對にしても、本體の確實なる又は結局的なる境域にしても、贖はれたる者が、之を理解することを禁ぜらるゝ如き破目に落さるゝ筈なく、又斯の如く道德的に條件づけられたる信仰も、亦

哲學の控訴院の判決に服すべきものにあらず。基督が其の究極の宇宙的意義に於て知られ、神と人とに對する關係に於て知らるゝことは、良心の媒介に由るてふ眞理は、我等の是非共認識し置くべき事なれども、又た忘るべからざることは、斯く倫理的に知られたる基督は所詮は哲學者の關係する現實界に屬し、たゞ相對的現象として彼を觀る見地は正しからざることなり。實に道德觀念は、眞の存在者の本性に我等を導く最上の案内にして、道德的能力の示す所を信ぜざるならば、如何にして我等の心を信ずべきぞ。基督に關する倫理的見解と形而上學的見解との間には、最後の衝突なるものあらず。倫理的なるものは、之を結局眞實なるものと見る時に、そはやがて形而上學的なり。而もその形而上學的とは、たゞ道德的知覺に合し得べき意味に於て云ふべきのみ。道德的價値ある現象は、我等の智能(マインド)に現れ來る現實なり。現實は隱れたる仁核の如くに、價値の背後又は內部に祕めらるるものにあらず。現實は價値を活ける一屬性となせる意志、即ち自覺的の活動なり。されば若し我等が、基督教信仰に鼓吹せられて、耶蘇基督は意志(其の偉業に現はれたる一の『意志』)に於て神と一なることを斷言するならば、我等はそれ以上に進み難き一點に達したるなり。何とならば、斯くいふ時に、我等は、倫理的なる最高の用語を以て、人として人に屬すべき意味とは、概して異なりたる意味に於て、基督が本體論的に神と一なることを斷言したればなり。睿智ある意志は、人格の有機的中心なり。耶蘇の意志は、存在の世界に於ける彼の絕對的位置を定む。之が彼の人格の眞の評價なりとせば、其の評價は、又た形而上學的評價たるなり。

されば此の範圍に於ても、又た他の範圍に於ても、事物を究極する所まで徹底的に考ふべき義務を避くることは不可能なり。若し我等が基督の靈的卓越を意識するならば、即ち宗教史に於ける彼の無比なる地位と、各人の心靈に對する彼の無比なる意義とを意識するならば、此の印象によりて保證せらるゝは、彼の人格の如何なる觀念にてあるかを問はざるを得ず。一度是等の觀念に到達するならば、人間の心の達し得べき、最も眞實なる又た最も適當なる觀念として地位を占め來る。基督教の經驗が、何等かの價あるものとせば、此處に其の價を見ざるべからず。此の經驗は、現實と接觸せるものにて、我等の心が耶蘇に於て覺得する實在は、現實的の實在なり。故に彼の人格に關する正しき教理は、計數器の如き觀念を取り扱ふにあらず。即ちそは事實に換へ得ざる譬喩的の用語を用ふるにあらで、耶蘇の自證と教會歷史が供給する證明とによりて必要とせられたる觀念を取り扱ふなり。是等眞實の觀念を包むに、昔の教會會議の神學の形式を以てする必要なし。昔の用語、範疇、智的形式は、或點に於て、我等の用ひ得る如きものにあらず。されればとて救主に關する最後の思想は、昔も今も同一意義を有す。舊き時代の貨幣は、磨滅し又た汚損することはあり得べく、其の銘刻は、幾分讀み難くなることもあらん。されど昔の貨幣の鑄られたる金屬は、今も我等の所有する所なり。現代基督論の任務は、新に銘記を打ち出して、新時代の使用に適すべく之を發行するにありと信ずるなり。

此の章に關する參考書

ドルネル『基督教教理體系』（一八九〇年）
Dorner, System of Christian Doctrine.
カフタン『教義學』（一九〇四年）
Kaftan, Zur Dogmatik.
ガアヴィー『耶蘇の內的生活の研究』（一九〇七年）
Garvie, Studies in the Inner Life of Jesus.
ケヤアド『基督教の根本思想』（一八九九年）
Caird, Fundamental Ideas of Christianity.
シムプソン『基督の事實』（一九〇〇年）
Simpson, Fact of Christ.
ケヘレル『基督教教理學』（一九〇五年）
Kähler, Wissenschaft der christlichen Lehre
フォルサイス『耶蘇基督の人格ゝ地位』（一九〇九年）
Forsyth, Person and Place of Jesus Christ.
フランク『基督教眞理體系』（一八九四年）
Frank, System der christlichen Wahrheit.

第二章　基督論と歷史的基督

若し現代人の心に妥當なる基督論ありとせば、其の參照する所と、其の出發點とは、歷史上の耶蘇基督に求めざるべからずといふことは、現代の神學者の間に略々一致する所なり。是は實に新しき宗教改革の福音にてありき。西方のキャトリック教會を支配したる觀念は、基督教は教會なり、教會は又た基督なり、世界に於ける神の永久の成肉身なりてふことなりき。教會の公式的公理は、記錄されたる事實によりて基督教を規定することを企てざりき。基督は聖者の群中に隱されたり。彼あるによりて天父を知り得らるゝ其の子とは關係少き神の觀念は行れたり。然るに宗教改革者は主張して曰く、神は基督に於て我等に體現す。基督に於てのみ救主として現はさる、說教者の義務は、人をして基督に於て、『神の事業と我等に向ふ天父の心』とを見せしむるにありて、『異教徒の如く、多く神に就て語るべきに非ず』。啓蒙時代の後に、シュライエルマッヘル出でゝ、此の聲を揚げぬ。リッチル主義は、缺點あるに拘はらず、教會の思想を基督の實際的人格に接近せしむることにより、評價し難き貢獻をなしたり。其の感化は常套を脫して直ちに事物の眞相を見んと欲する傾向の增し加はると一致せり。

基督教が固く歷史的事實と結合し、又た殊に基督の事實と結合せるは、そが罪人の爲めの宗教なれ

ばなり。此は贖罪の宗教なり。神は彼の子によりて、我等を彼と和らがしめ、活き且つ死し又た蘇りたる耶蘇によりて、彼の恩寵の意志を證明したり。基督教が、人間の理智的、審美的の需要に對して如何なる滿足を與ふるとも、夫は先づ以て、罪の救拯の用を果したるに由るなり。されど救の必要は、唯一片の觀念によりて滿足せらるべきにあらず。唯の觀念にあらで、事實こそ缺くべからざるものにして、我々の現存せるが如き現實界、即ち歴史の原野に於て存在せる事實を要するなり。自然は測り難きほど偉大なる力を示し、又た測り難きほど廣き知慧を現し得るも、『罪の赦』(フォーギヴネッス)に關してはいふ所あらず。是は超越的の一語にして、日月星辰も之を語る能はず、地も海も亦た然り。『永遠者』の無限なる愛が、我等の手の達する所に置れ、人格的にして又た奪ひ難き所有として之を確知し得るには、歴史に於て、ひとり歴史に於てのみあり得る所なり。又た我等が斯く神に出逢ひ得るは、漠然たる世界の行程の途上にあらず、何となれば、一般の歴史は、疑しき聲に滿され、傾向の流れ、交叉し混淆して相戰へばなり。されば最も高尚にして、又た最もよく人を服する意味に於ける神の父性は、たゞ耶蘇に於てのみ知らる。彼は實にあらゆる事件に現在し、間斷なく過去と未來とを支配するなり。されど現實のたゞ一つの部分に於て、彼の活動を包める面紗(ヴェール)は透明になり、我等は彼の心のまゝを見得るなり。生命の血は、全體に循環すれども、別けて表面に近く指を觸れて、その脈搏を感じ得る部分あり。たゞ耶蘇の事實に於てのみ、人によりて造られず、神によりて與へられたる宗教の基礎は存するなり。此の救主を離れては、基督教は少しも人を贖はず、たゞ力なき抽象たるに過ぎざるなり。

されど此の確信を突き詰むれば、今日は殆んど確に一の反論を挑撥するならん。反論とは、歴史の上に信仰の基礎を置くことは、誤の中にても最も近眼なるものなりとのことなり。信仰の要する基督は、我等と神との關係によりて、絶對の價値を有する基督なり。されど絶對的なるものが、時間に制限せられたる事件の連續の中に現れ得るか。如何にして絶對なるものが、時と場所とに於て現れ得るか、宗教は其の聖なりと崇むるものをば、移り行く變化の流より引き上げて、永久不動の天地に置かずんば止ざる傾向を示したるにあらずや。

此の反對論は、二種の見地より提出せられ、二種の論法によりて支へ得らるべし。先づ哲學的側面よりいへば、結局希臘人の事物の見方より發源す。希臘人の見方とは、有形的自然の研究より出立し、人間を以て出立點とせず(人間は歴史的の物にして、『日と歳とまた時代との產』なりと見て、人事の連續をば、たゞ創生(ゲネシス)の領分に屬するものとして之を輕んじ、此の變化と無量の變種との範圍に屬するものは、決して眞の形而上學的興味を滿足し得ざるものと考ふ。されば希臘に於ては、一人として進歩とは何を意味するか、人間の歴史は、全體として何を意味するかの問題を提出したる人あらず。又た、『人間は自己を表現せんが爲めに、歴史を有すべく定められたる』(カルネギー、シムプソンの『プリンシパル、レーニイ傳』一卷二〇四頁)

や否かを問ふものなかりき。從ふて又、我等が世界の意味を搜るに當り、吾等の求むるものは、たゞ事實と事件と歷史的處理との中に與へらるる故に、たゞ原理や、眞理や、法理などに止まるべきにあらざるや否やと問ふものなかりき。近世に於て、此の反對論は、レッシングの有名なる言葉に於て、最も有力に表現せられたり。曰く、『偶然なる歷史的眞理は、決して理性の必然的眞理の證明を與ふる能はず』。此の見解によれば、時間上の出來事によりて。絕對の眞(ツエリティ)は傳達さるゝこと能はず、兩者の間には廣き溝渠あり。是れ蓋し基督敎を攻擊する、最も有力なる打擊なりと稱へられたり。スピノザの議論も亦た相似たる徑路を取れるものにして、カントは、理想が歷史的耶蘇に於て形を備ふるに至りしことを承認すれども、基督が此の理想を實現したるは完全なりしかの問題は、割合に重大ならずと斷言するを躊躇せざりき。蓋し信仰と歷史とは、各々別個の天地を占有して交錯することなし。フイヒテは、歷史的基督に對する信仰を要求するは、基督敎に戻れりとまで公言するに至れり。若し人にして眞に神と連れるものならば、此の如き合一に到る道を絕えず回顧するが人たるものゝ義務にあらで、其の事の中に活くるこそ義務たるなれ。然らざるものは、眞正の靈的てふことを犯すものなり。神は良心に於て、又た事物の大體の進行に於て啓示せらる。我等が地上に於て知る所又た知るを要する所は之にて足れり。

先づ明にレッシングに答ふべきことは、歷史なるものは、斯かる偶然にあらざることなり。兎に角神と神の政治とを確信する基督者の精神にとりては、單に偶然なるものは意味を有せず。不思議なることには、歷史はたゞ生物と事件と關係との錯綜なりてふ乾燥なる偏見の上に超越せしめ、歷史を以て國民の爲めにも、又た個人の爲めにも、人生の工作場たることを示したるは、レッシングにてありき。彼は人類の敎育に就て、多くの意味深き言葉を殘せるが、畢竟するに、人類の敎育は、歷史的の媒介を經たるものにて、有限的にして且つ貧弱なる起源より進み、時至らば過ぎ去りし人の實驗によりて明白にせられ、且つ富されたる遺產に到達するなり。且つ基督敎の使命は、如何なる場合にも、理性の必至的眞理より成りしにあらず。例へば、神は眞に人類を愛するが故に、來りて之を祝福し且つ救ふなりといふことは、必然なる理性の眞理にはあらず、即ち普通の知能を持てる、すべての壯年者の心に、自證的の明瞭を以て上る眞理にあらず。我等は良心と心情とに訴へ來る明白なる現象の記錄を有せざるべからず。昔の物語にあるアンチウスが、彼の母なる地を離れて無力なりし如く、信仰も其母なる事實の土地に立脚するにあらずんば、そは內的意識より感傷的に作り出されて、大なる現實によりて、正されず、制せられず、皷吹もされずに了るに相違なからん。又た福音書は歷史に含れたるものなるが故に、時間の連續に屬する他の事物と同じく、たゞ相對的なりといふものあらば、要するに歷史的と究極的と二者其の一を擇ぶべしといはゞ、其の答は是なり、そは純粹の假定にして、若し眞の現象と衝突すれば變更せざるべからず。又た此の如き形而上學は、形而上學としても惡しき

ものなりと云ふも可ならん。今日少からざる哲學者が考へ始し如く、生命は新規なるものを產み出す永遠の創造にして、一定不變の相互關係を有する、永存的同一事象の舞臺にあらざるのみか、豫知すべからざる事象の斷えず新に生じ來る舞臺なりとせば、此の如き假定をなすは、惡しき形而上學なり。果して然らば、機械說（メカニズム）を以て、盡く現實を解釋し得べしとする、誤れる假定は倒れて、たゞ殘れる問題は、歷史の或一點に現出したる新奇なるものが、果して絕對十全の贖償者なるや否やてふことなり。又た明なることは、人の宗敎的生命なるものは、抽象的觀念の如何に豐富にして、多方面なるにせよ、其の感化によりて上進するものにあらで、偉大なる人格の力を待つこと是なり。大なる運動は、何れも常に一個の人物より始まる。觀念と精神とが、一人の人物に於て融合し、思想が精神の中に體現し、その精神は又た思想に捧げられ、之が爲めに動くが故に、力ある運動は生ずるなり。此の如くにして具體的なる歷史は、疑ひもなく一段又た一段と進み來り、斷えず新軌軸を出して活動したり。若し機械的心理學の公理が、パウロの如き、ルウテルの如き、さては又ウエスレイの如き人の前に出づれば、夫は屏息して、是等の偉人に現れたる、創始的にして搜り難き要素を處理する力なきことを告白するとせば、まして耶蘇の比類なき生活と匹敵することを如何で望み得べき。斯て遂に歷史的相對の抽象的觀念は、耶蘇の面前に出れば、寂滅し去ることを發見せん。斯る公理は、さながら昔のサムソンが、彼を縛る繩を振り切りし如く、贖罪の經驗によりて寸斷されん。パレスチナに於て、基督に從ひ、彼を主と呼び初めし人々、又爾來何時の世にも、彼の力に感動し、彼の靈の更新力に觸れし人々は、耶蘇に於て、我等が宇宙の最高なる道德的實在に觸れたりと思はざる人なからん。

さりながら、信仰と歷史とを結び付くることに對して、歷史的側面より提出せらるゝ反對は、新約聖書の批評が、眞實の耶蘇に到達することを不可能となし了りしにあらずや、と問ふの形式を取り來るなり。或は彼の個人的存在は、一個の神話なりと論じたる人もあり。やゝ之よりも公平なる人は、之を一笑に附し去るならんも、兎に角基督敎を充分に確實ならざる過去の記錄によりて立てりとする立場を以て、誰か滿足なりと見るを得べきぞ。此の如くんば、單純なる信者の信仰は、學究に左右せられて、斷えず不安の狀態に居り、學究の壓制は、法皇の壓制と同じく堪へ難きものとなるにあらずや。又た之を飜して云へば、我等が精密に耶蘇を知ることは、宗敎的に我等の運命を定むることゝ成るにあらずや。要するに、耶蘇は第一世紀に屬する人なり。假りに彼の弟子が、誤りなく彼の任命を後世に傳達し得たりと假定するも、彼果して其の時代と土地との產みし子、即ち時代と土地との被造物たらざるを保するか。彼の敎訓は、其の先進者なる豫言者の採りし方法に則り、彼の信仰は、主として舊約聖書より取られ、彼の宇宙觀は、當時行れたるもの其の儘なり。果して然らば、神に關する彼の思想は、何等害せらるゝ所なくして濟み得るか。

我等は之に答ふるに當り、先づ以下のことを認むるを要す。即ち歷史家が、單に歷史家として觀る

時に、過去の事物の中、個人的宗教の基礎となるほどに確實なる事は一としてあらざることなり。歴史的研究が、救主基督を我等に與へ得ざるは、科學が活ける神を我等に與へ得ざると同樣なり。基督果して世界の救主にして、又た此の如きものとして知られ得るとするも、其の知らるゝは、事實上學者的研究の道によるにあらざるべし。約言すれば、世には歴史だけにては、之を取り扱ふに當らざる事物あり。曾てジエームス教授のいへる如く、『或眞理の種類が眞實存在せるに係らず、余を妨げて之を認めざらしめんとする思考の法則は、不合理なる法則たるべし』(『信せんとする意志』)。

されど是れたゞ初歩の論點に過ぎず。人は單に歴史家たらんと欲しても、斯くあり得ざること、是れ實に重要なる一事なり。良心なき人、無條件にして誤らざる義務の觀念なき人はあらず。されば吾等が神の方法なりと知れる方法を以て、我等を遇する基督の前に、何人にても、偶然出ることなしと保證され難し。何人にても、其の道德的廢頽を責め、然も神の救拯の愛を與ふる人格の前に出でゝ、復た免るゝ道なきことを實驗するは、何れの時にてもあり得ることなり。果して斯かる實驗あらば、其の人は、歴史の與ふることも奪ふことも能きざる確實を以て、此の耶蘇に接するは即ち神に接するなりとふことを知るならん。福音書に描れたる耶蘇の姿は、それ自ら正確なりとの證明を帶ぶ。斯くいへばとて、此の『人』實在せざりしならば、此の如く叙述せらるゝ筈なし、と意識的に論ずる譯にはあらず、寧ろ彼の印象我等を歴して、之に服せしむると云ふなり。彼は道德的理性の覺知し得る、最後にして又た最高なる事實として見らる。

基督教の信仰の基礎及び內容は、終に變遷多き歴史的批評の結果以上に立てることは明なり。たゞに然るのみならず、基督の力を信ずる確信の中心的意義は、結局研究の進歩によりて影響せられず、あらゆる研究は、新約聖書より材料を得るものにして、使徒の筆を以て耶蘇を描きし文章は、その大綱に於て、誤りなきを假定せざるを得ず。眞實の標準は一に此處に存せるが故に、若し耶蘇にして知らるべくば、福音書と書翰とに於て知らるべく、他の資料の存するものあらず。且つ新約聖書の各部分に描れたる基督は、根本的に同一基督なりといふも、過言にあらず。例へばマコ傳の基督觀と、ヨハネ傳の夫れとの間に密接なる類似點あり。パウロの基督は、四福音書の基督と同じく、十字架に懸り、死して復活したる基督なり。彼に對する信仰の態度は、徹頭徹尾同一なり。デニイ博士の『耶蘇と福音』の如き書の出でし後、此の點は定れりと觀るも可なり。故に學術的研究は、神學に迫りて、聖書に證明を求むる方法を改めしむることあり得べく又た實に是あり。されど夫は、新約聖書の各部分に於て、悔改の信仰の對照として掲げたる救主に觸るゝ能はず。學究的の聖書解釋と單純なる聖書誦讀との結果は齊しく、復活の至高力を以て、原始的なる信者の意識に滿る、耶蘇基督を一層透明に會得することなり。斯く云へばとて、基督教を檢覈する全事業は、過去數百年傳來の信仰に確められたる、個々の信者の經驗に委ねて安全なりといふ意味にあらず(デールが『活ける基督と四福音書』)。唯基督に關

する眞理は、信ずる心を離れて觀らるゝこと能はずと云ふのみ。何となれば、信仰する心にても、天啓の歴史と接觸して活かされたる時、初めて信じ得べければなり。更生せる人の靈魂が、歴史的基督より獨立して、現實に有り得ざることは、小兒が兩親を離れて現實にあり得ざる（知るべからずとまで云はずとも）が如し。救はるゝてふ經驗と、神が我等を救ふべくなせし事を知る知識とは、一體をなして分ち難きが故に、事實に於て合せるものを苟且にも分離することは、知識上の益とならず。信仰が信仰の材料を製造すること、若くは信仰のよりて生ずる所のものを會得するよりも以上のことをなすと云ふ事は思惟し難きことなり。

併し以上略述したる立場は、一見之に似て、實は異なれる見解と混ずべきにあらず。別けても、ハルレ大學の尊敬すべき教授、ケエレルは、結局下の如き意味の議論を提出したり。即ち歸する所、我等は使徒等が、耶蘇の爲めに立てたる證明に滿足せざるべからずして、其の證明の背後にまで立ち入りて、學術的に耶蘇のありしまゝを作り出さんとするは徒爾なりと云ふなり。彼また指示して曰く、使徒の記錄は、事件の起りし順序を立てゝ記るせしものにあらざるが、また耶蘇の精神的發達の道行を逐ひしにあらざることも勿論の事なり。斯る事情あるが故に、耶蘇の傳記を著さんとするものは、無垢なる生活には當て嵌らざる、心理學的類推に基きたる想像を用ひて、乏しき輪廓を補はざるを得ず。兎に角福音書の記者は、年代記作者にあらずして、說教者なるが故に、彼等の記錄より、『歴史的耶蘇』を引き出さんとする努力は無効ならざるを得ず。何となれば、斯くせんとするも、不正當なる教義的の考慮に誤らるればなり。教會が存立するに至りしは、基督に關する使徒の說教によれり。故に教會の生命の育つべき土壤と教會の使命の眞實を批準すべき最後の法廷とは、依然として使徒の說教にあらざるべからず（『所謂歴史上の耶蘇と歴史的聖書的の基督』）。

我等は喜んで此の議論の大部分に同意せんとするものなれど、福音は單に他人の信じたる信仰によりて立ち得るかてふ問題に解決を與へず。ルウデルの反復說ける如く、信仰と神とは相繫がるものなりとせば、神が我等に己を知らしむるにあらずんば、現實に神たるを信ずる能はず。新約聖書の著者に對して「さへも、我等はサマリア人の如く、『我等は汝のいひしことによりて信ずるにあらず、我等親ら聽きて、此は實に世の救主なりと知りたればなり』（ヨハネ傳四〇四十二）といひ得べし。使徒等が採り得べかりし信仰の基礎は、我等にも解放せらる。たゞ彼等に與へたる印象は、其自身印象の原因を示す索引の如きものなり。耶蘇は自己の何人なるかを啓示するに、彼の云ひし言葉によるのみならず、即ち主として之のみによらず、彼の人格が他人に及ぼして消し難く彼等の心に印象する所のものによれり。且つ此の如くにして覺り得たる耶蘇の面影は、之によりて、福音書の記事其のものを左右するを得べし。福音書に描れたる耶蘇の姿に恭しくも親しむ結果は、次第に耶蘇の人格の觀念を有せしめ、光輝燦爛、純正にして整和せる姿は、我等を解放して、區々たる細目に依賴するを要せざるも

のとなす。是等の資料より、我等の上に照り輝ける基督は、正眞にして又た確實なる事實なるが故に、自己を構成せる要素を檢覈し、且つ之を檢證す。心を平にして、福音書を讀む人は、此の如くにして知り得たる基督の中に、神に對する渴望を喚起し、また斯く喚起されたる渴望を滿足せしむる贖主あることを見出し初むるなり。斯くて使徒の信仰は、我等にとりては、實際の耶蘇を映し、而して又た我等自ら彼を知るに至らしめ得る鏡なり。

されば歴史上の基督は、信仰と信仰によりて皷吹されたる基督論との標準なり。然れど『歴史上の基督』てふ一句の內容は何ぞや、幾何のことを包擁するや。今日此の問題に對する答の中、ヘルマンの與へたるものに增して勢力あるものあらず。彼の指摘する所によれば、單に雜多なる事實が群がりたりとて、救拯に至る神の啓示といふに足らで、此はたゞ心を亂るのみなり。別に信仰と直接關係を有する一定の中心ありて、此の周圍に集り、之によりて統一をなさゞるべからず。此の一定の中心は、『耶蘇の內的生命』なり。外の何事を疑ふにせよ、此のことだけは、兎も角も眞實にして爭ふべからず。ヘルマンはいへり、『福音書が、我等に與へて威力ある現實となす一事は、正さしく耶蘇自身の內的生命なり……我等が此の物語の面紗を透して現れ來る內的生命の印象によりて、耶蘇の人格を見る時は、我等は福音書記者の信ずべきことに對して疑問を如何することなかるべし』。耶蘇の面影は、我等をしておのづから首を垂れしむ。是れ實に、ヘルマンの附言せる如く、『活ける者が活ける者に與ふる自由の啓示なり』と云ふべきなり（『神との交通』英譯七四、七五頁）。されど此處に至つて、ヘルマンが、明に重を置く一個の差別の點は生じ來る。之は信仰の基礎と、信仰により生み出されたる確信との間に立てたる差別なり。既に說きし如く、信仰の基礎或は根抵は、耶蘇の內的生命なり。是れ實に一個の道德的極所にして、批評も其の背後に立ち入ること能はず。また是あるが爲め、耶蘇は贖ふ神の人格的表現として、我等に接觸し來るなり。さはれ分析し難き此の基礎條件と別に、信仰を造り出さずして、信仰によりて造らるゝ信仰若くは思想あり。此の信仰は、耶蘇に對する根本の信賴的感應の中に含れたりと、基督者が遲かれ早かれ感ずべき眞理を現すべき信仰なり。此の如き信仰は、彼の神的起源、其の復活、其の至上にして普遍なる力を是認するものなり。此の對照は、正當なりや。殊に我等は『歴史上の耶蘇』をば、ヘルマンが、耶蘇の『內的生命』といへるものに局限するを許さるべきか。

ヘルマンが、我等の基督觀に現はれたる正當の發達は、我等の初發の信仰的見解に添へられたる、一片の附加物たるべからずといへるだけは、疑もなく正し。福音的基督論の眞の要素は、すべて初より含蓄せられざるべからず。而して後より發展したる時に手懸りを得べき要點、故に又た一層充實せる叙述を要する點は、『耶蘇は主なり』との、初の告白の中に、潛在的ながらも與へらるるなり。復活を信ずる信仰の如きは、其の一問題なり。復活したる主に適ふやう、之を捕へ或は認識せんとせば、人は何等かの道によりて、耶蘇より印象を受けざるべからず。復活を信ずる我等の信仰は、共觀福音

書の記事より出でたりと雖も、我等が耶蘇の偉大を感ずる感覺あるが爲めに、强烈と熱情とを得來るなり。我等は福音書に描れたる力と榮光とを信ずればこそ、彼の勝利を證する使徒の證言に自由なる同意を表するなれ。他の人に用ふれば、空想と思はるゝことも、耶蘇に附する時には然かあらざるものとなるなり。されど此の種類の原理は、如何に健全なりとも、ヘルマンの立場と同じからず（ヘーリングとライシレーZTK 129—133）。實際基督の復活を信ずる信仰と、仲保者として耶蘇を解釋する爲めに神學が用ふる種々なる教理的斷定と一樣なりといふにあらず。何とならば、復活てふことは、解釋せらるべき啓示の一部分なり。即ち我等の救の爲めに、神の愛の表現したる全體の基礎に於ける、主要なる一要素なり。神の人を救ふ力は、基督の全事實と彼の經驗とによりて啓示せられ、且つ有効なるものとせられたるが故に、我等の信仰は、此の事實と此の經驗との上に立てり。されど死は耶蘇の經驗の終結をなせしに非ず、復活も亦た其の中に包含せらる。此の事を無視せんとすれば、無理なる抽象の手段によらざるべからず。さればイーストルの晨の經驗を取り去るならば、我等が反應すべき神の啓示の性質は變ぜざるを得ず。何とならば、耶蘇の全生活の性質及び價値も亦た變ずればなり。『今神の右にある基督は、曾て死せり、否死より復活せり』といへる、パウロの用ひたる漸層句（クライマックス）法より重大なる或ものを除去することゝなる。啓示を減ぜよ、然らば啓示に反應する信仰も、亦減ぜざるを得ず。死より甦り、活ける者として弟子に現れたり、と我等が知れる基督と、復活せるや否や、我等が確知せざる基督とは、明に異なるものありて、其の喚起する宗教的感興も全く異ならざるを得ず。故に若し我等の神觀が、充分基督教的たらんには、又若し我等が、彼の愛を信ずると等しく、全能を信ぜんと欲せば、信仰を造り出す基礎の中に、復活てふことが入り來ることを主張せざるべからず。是れ耶蘇の揭げ示さるゝ、福音の一部分なり。いひ換ふれば、『歷史上の基督』は、たゞナザレの大工にてあり、人道の英雄にてあり、古の宗教的天才にてあるのみならず、彼は復活して天父の榮光に入りし主たるなり。(二)

之を要するに、歷史的と呼ばるべき基督は、使徒等の證明を經て、我等に傳達せられたる基督なるが、而も此の證明によりながらも、獨立して彼を觀、且つ知り得るやうに傳達せられたり。而して彼に關する我等の斷言に於ても、十字架に附きし時以後に及ぶことを得ざらしめる分界線を引く能はず。基督の我等に啓示せらるゝ範圍は、ペッレヘムとカルバリイとの間に局限さるべきにあらず。死より復活せる所にも亦た、彼の啓示を見るなり。故に第四福音書が、耶蘇の地上の傳道の全體の中に、榮光に上げられたる事の完成せる意味を帶びしむるは、眞實にして抑へ難き信仰の本能に依れるものなり。斯く云ふは、歷史的耶蘇と、信仰が見て以て、神の最後の顯現となし、充實せる顯現となす所の彼とは、同一なりとの意味なり。我等は福音書を讀んで、此の人は、復活すべく豫め定められたりと感ぜざるを得ず。而して新約聖書の著者の記錄せる事は、紛雜にして不適切なる神話を以て、

具體的史實を紛飾せるものにあらで、深き靈的の透視力を用ひ、其の偉大なる終結の光に照して、耶蘇の全生涯を解釋せるものにてありき。主なる基督は、ナザレの耶蘇と人格的に同一なりとして、之を拜せざりし基督教は、未だ曾て世界に是あらざりき。故に彼の復活を否定し、價値なき物語の塚より眞實の耶蘇を發掘せんと欲する批評は、材料の缺乏せるが爲めに、遂に主觀的、想像的性質の作爲に歸し終るなり。是等の作爲は、到底適確に妥當なる結果に達し難き徑路を逐へるものなり。何とならば、此の如き議論の基く所は、一部分自然主義的なる假定にして、歸する所、第一に、信仰上の基督の如き、超越的人格の存立し得ざることを主張し、第二に、よし彼にして存立するとも、後世に於て信じ得るだけに、確實に其の現實性を知ることは思ひも寄らぬことなりと論ずるに至る。

されど若し地上に現れたる耶蘇と、昇天せる主とは一にして、孰も『歴史上の基督』といふべきものゝ側面に外ならずして、復活は信仰を喚起する歴史的啓示の一部分なりとせば、此の事は更に進んで、歴史上の基督は亦た今も何時までも經驗に宿れる主と一なりとの意味を含む。フォーレストのいひし如く、『復活は基督教の信仰に於て、重大なる過渡の要點をなせり。之によりて、史中の一人物として現れたる此の人が、其の實史的制限を超越し、永へに存する主、我等の心靈の生命なりと認めらる』（『歴史及び經驗の基督』一五八頁）。あらゆる時代に於て、彼の感化は繼續して人を神と和合せしめたり。我等が彼を評價するに當り、彼の人格が人心に觸れ生活を變ずる結果を商量せざるべからず。何とならば人類の中に是等の事をなし得る力が、元來彼の人格の中に存したればなり。新約聖書に描れたる基督と、我等の實驗する彼の贖罪の力と、二者の間に活ける交渉あり、脉絡あることは、實に福音の最後の證據なり。今もありし昔の如く、彼は人の罪を悟らしめて、又た且つ赦免の保證を與へ、義を以て審判しながら、尚ほ其の靈魂を立ち歸らしむ。是れ一に無比にして、神を分ち難く一體なる人格のあるが爲めなり。若し聖書に描れたる基督が、一の刻印なりとせば、基督者の意識に印せる其の痕は、一々之と符合す。孰も實際の耶蘇を啓示す。彼が其の昔弟子の心に己を印せし如く、彼は今日我等の心に自己を印象し、孰の場合に於ても、一個の眞實なる原因より一對の結果は流れ出るなり。『世の終まで』活動する超越的基督は、パレスチナに生れたる耶蘇に外ならざることを保證す。何とならば、彼が常に新しく人に附與する經驗は、最初の弟子の一群が經たる經驗と同一なればなり。

故に基督論は、何れの點に於ても、歴史的基督に就て我等の知れる所により、活かされ又た支配せらるゝを要することは、最も重大なる原則なり。されど此の原則は、他の善き原則と同じく、狹隘なる或は立法的なる精神を以て適用すべきにあらず。斯く斷えず事實に參照し、耶蘇の自意識と彼が最初の基督者に與へたる印象とに歸るにあらずんば、我等は茫漠として行衛を知らざる、神祕思想の海に乘り出ることゝなる。斯くいへばとて、耶蘇に關する教理的叙述は、一々彼の唇より發したる言葉により、又た判然たる使徒の言明によりて批準せらるゝを要すといふにあらず。たゞ必要なるは、我等が全

體として基督觀を構成する時、全體として新約聖書中の耶蘇の姿が、其儘之に反映せらるゝことなり。原始的證明に含れたる歴史上の基督の姿を直接我等の心に映じ、且つ徹底的に心を浸すものたらしめよ。然る上我等の内に起り來る思想に、自由なる組織的表現を與へしめよ。何時の時代を問はず、神學者が耶蘇基督に就て適當に語りたる時は、實際此の如きものにして、是れ明に福音書の本來の自由と調和する仕方なり。さはれ、此は教會を移り易き個人的感情の左右するに委ねる如く思はれ、眩の正否を測定すべき、或不變の法則を得んとする叫起るならば、答へていはん、不變なる正統主義を律法的に保證する道なしと。我等は神に感謝す、基督教には、此の如き方法にて保證せられ得るものあらず。我等の手の達し得べき所に、更に善き保證あり。我等は教會を導きて、あらゆる眞理を悟らしむる聖靈を約束せられたり。我等は神の言葉を有す、此は永久に活き且つ宿り、聖靈人の心にありて永久之が爲めに證明す。是等は、現實なる保證——巖窟に云はゞ、唯一にして充實せる保證にして、基督者の思想が、其の資料を基礎として自由に開拓するならば、過去の大信仰と一致せる結論に達すべきことを保證す。其の始め、基督の周圍に集りたる人々が印象されたる如く、基督によりて印象を受けたる誠實の思想家ある所に眞理あらん。

註（一）ヤヨナサン・エドワルヅの有力なる一語を參照すべし。「尊き神の福音は、或人の思ふ如く、證據をたづゝ歩く者に非ず。其自身の中に最も高尚にして、最も適切なる證據を有す」（全集第五卷一七八頁）。

（二）ニイマルルが、現代の急進的神學のためにいふ所は、意味深長なり、曰く、「我等は昇天したる基督を數ふる在來の教理と同じく役目をなす或物を要す」（『ヒルダンフライ』三四頁）。之に代るべきもの、果して發見されしか。

水章に關する參考書

フォーレスト『歴史及び經驗の基督』（一九〇三年）
Forrest, The Christ of History and Experience.

ヘルマン『神との交通』（一九〇六年）
Herrmann, Cmmunion with God.

キルン『信仰と歴史』（一九〇〇年）
Kirn, Glaube und Geschichte.

サンデイ『古今の基督論』（一九一〇年）
Sanday, Christologies Ancient and Modern.

ケヒラー『所謂歴史上の基督と歴史的聖書的基督』（一八九六年）
Kähler, Der sogenannte historische Jesus und der geschichtliche biblische Christus

ヴォベルミン『宗教學に於ける歴史と史學』（一九一一年）
Wobbermin, Geschichte und Historie in der Religionswissenschaft

ゴルドン『今日の基督』（一八九五年）
Gordon, The Christ of Today.

リッチル『義待と和合』（一九〇〇年）
Ritschl, Justification and Reconciliation.

シムプソン『基督の事實』（一九〇〇年）
Simpson, Fact of Christ.（譯者日千鍵武雄氏の日本譯あり）

第三章　基督の人格と其事業との關係

基督の人格は、其の贖罪の事業を經由して、初めて解釋せらるべきものとして示すに至りたるは、最善なる近世基督論の一特徴なりとす。彼が何をなし、又た何をなしつゝあるかを知ることにより て、彼は誰なるかを示され得べしてふことは、一般に人の感ずる所となれり。蓋し性と職分とは、相關せるものにして、哲學者がいふ如く、作は作者を評價する標準なり。前章に於て、シュライエルマッヘルが、此の歸納的方法の開拓者たることを見しが、其の實、更に溯りてルウテルに到るべきものなり。彼の言葉は、頗る力あり、曰く、『基督は兩性を有するが故に、基督と呼ばるゝにあらず。此の如きことは、我にとりて何の意味かある。彼が光榮あり且つ人を慰むる此の名を保つ所以は、彼が負擔したる職分と事業との爲めなり』(エルランゲン版の『全集』十二卷二四四頁)。彼と同型の精神といふべきアタナシウスは、久しき前此の立論法を用ひたり。彼は其の著『成肉身論』のうちに、一個の研究者のことを語り、其の人は、『基督の事業を經て見たる彼の力は、人間の力と比較し難きものとなして、人間の中彼一人、言葉なる神たることを知るに至れり』(ピンドレイ『譯書』四五頁(英))。事業より人格に溯るべしといふ、此の原理を適用する形式は、我等が今直ちに點檢せんとする所なるが、今は救主を研究するに當り、先天的ならずして、信者として我等が、直接或は實驗的なる知識を有する贖罪の道によりて、救主を研究することは、如何に必要にして且つ人を服するに足るかを注意すれば足る。根本資料より稍々遠き歸納や假說に移り、事實より解釋的理論に移るは、あらゆる健全なる研究の方法なり。我等の研究は、此の如き思想の樣式に限られたりと云ふにあらず。之に反して、一の假說に到着すれば、我等は進んで新しき方法を以て之を點檢し、演繹の方法に何の益をなすかを尋ねざるべからず。斯くて我等は、基督の人格が、彼の事業より光を得る如く、また其の人格が事業に光を投ずることを發見せん。

人格と事業との相互關係は、基督論の本流が大なる歷史的時期を劃して進むことによりて說明せらる(ヘーリンゲ前揭の書三七四頁)。基督の救の感化の觀念と彼の本質の觀念との間に、常に親密なる關係ありき。先づ希臘人の贖罪觀を見よ。人は第一に、根本的腐敗、之を約言すれば、『死』といふべきものより救はるゝを要することは、東方に於て感ぜられたり。罪は我等を捕へて、敗頽の奴隷とせり。されば死は大なる禍害にして、神との交通を失ふことの如きは、深く之を感ぜざりしにあらざるも、茲には尙ほ第二の重要なる地位を占むるに過ぎざりき。アタナシウスは、罪に就て、見事に代表的なる言葉を以て、『若したゞ罪を犯すといふに止り、之より生ずる腐敗なかりせば、悔改にて足りしならん』(成肉身論第七章)と云ひぬ。されど彼は進んで、腐敗あるが故に、神人となりて之を癒すを必要とせりと論じたり。此の如くにして、基督論の輪廓は定りたり。救拯は、死と敗頽とより自由にせらるゝことなり。從て救主は、不死なる神性と死すべき人性と相合せる超越不可解の祕義にして、人類全體は、之によ

りて、神格に屬する、苦しみ得ず又た腐り得ざる力に充たされ、神との物理的若くは半物理的結合と考へたるらしき者にせられたり。基督に於て、人生と永久のロゴスと活ける混合をなせることにより、全體としての人間が、彼に於て神化せらるるなり。疑もなく人性の光耀は、『成肉者』の復活と昇天とに於て初めて充分に發揚せりと雖も、其の原理は、『言』が肉體となりし第一の瞬間より眞實なりき。成肉身てふことも、信仰の對象たりしに相違なけれども、此の信仰も亦た、人が彼に潜みたる神性に神祕なる參與をなす方面より考へられ、而して此の參與する意味が、特に傳へらるゝは聖禮典により、其の働くや、道德的なるを要せざる道に於てす。此の如くにして、基督の贖罪てふことは、唯一時的の力を有する範疇を以て言現されたり。即ち贖罪の事は、半ば以上具體的なる言語を以て之を示し、救拯てふことは、時々、肉體的に同化し得らるる、一種の物質（サブスタンス）らしき觀を呈したり。基督は定義し難き神の本性と人性と相結合したる不可解の祕義にして、其の祕義は、我等が倫理的、人格的實在として知る所のもの以上に超ゆるといふよりも、寧ろ以下に落つる所あり。希臘人の見解此の如し。

固より之は、希臘人の基督論の全眞理を盡せるものにあらざれども、兎に角眞理の正眞にして力ある部分なり。基督の事業に關する觀念と、基督自身に關する觀念とは、相伴ふて消長すといふ公理は、此處にもその實例を示すと知るべし。若し彼が我等に對して爲す所のものが、我等の本然的人性に半ば有形的なる變化を起すにありとすれば、即ち第一に、吾等が分有せる現實的普遍性なる、人性の本質に於て、斯る變化を起すにありとすれば、我等が彼の人格を定義するに當りて、自然に靈てふ言葉を用ひずして、本體てふ言葉を用ふることゝなる。されど宗教的、心理的、哲學的なる樣々の道理によりて、此の如き考は、現代人の心に觸れず。たゞ我等は、彼等を鼓吹したる根本的確信に於ては、當時の偉大なる思想家と一致せり。我等又た信ず、基督の致動的勢力は、人類の有機的生活に動き、且つ彼は自ら贖ひの力として、人類の中心に下ることにより、人類を更生せしむる爲めに、愛の力を以て人類の中に入りたりしことを。

眼を轉じて西方の基督論を見よ。アウグスチヌスが、神の前に其の靈をさらけ出せし時、彼が熱心に求むる所は、主に正義にして、即ち罪の責罰を免るゝことにてありき。救はるゝてふことは、義しくせらるゝことにして、救の樣式は、窃に超自然的恩寵を與へ、功德ある業をなし得る力を與ふることに存す。人をして一層高き恩寵を受くるに價ひするものとならしめんが爲めに與へらる愛として、恩寵は注ぎ入れらるゝなり。斯て基督に關する思想も亦、之によりて決定せらるゝなり。東方に於ては、彼を以て測り難き祕義なる神人と見しが、茲に彼は、其の神的人性に在りて、人類の無限の罪惡の爲めに充分の贖をなすと視られたり。西方の人の思想によれば、宗教は大體律法に屬するものにして、基督は律法的の人なり。其の受難と從順とにより、赦罪を購たる以來、彼は恩寵の制度と稱せられたる教會の中に、永久働きつゝあり。就中彼は『ミサ』及び懺悔の禮典によりて、神的生命の力を

分ちつゝあり。生命の源たる彼は、依然として信仰の對象たれども、其の信仰も亦新約聖書的の意義を失ひて、教會の教義と宗教的誡律を受くることゝなれり。されば若し希臘人の思想に於て、基督の人格を解釋するに、有形的觀念が主として用ひられたりとせば、西方にて用ひられたる言語は、寧ろ法律的用語なりき。而してラテンの神學が、宗教の深き動機に動されずして、その獨特の形式を取り來れる後に、動もすれば、歴史上の基督の活ける人格は消失して、非人間的なる案山子の、枯木的にして機械的なる業績の中に化了せんとせり。

此處にも亦た、基督が何をなせしかてふ觀念と、彼が何人にてあるかてふ觀念とは、相關的にてありき。基督の事業は、法律的仲保者の事業にして、彼の人格の性質も、之によりて定められたり。神と人との二元的結合を以て、足れりとなされたり。アンセルムスは、淡白に之を述べて曰く、『基督に於て、性相別れて、而も人格の一なることは、此の目的の爲めに有効なりき。即ち人類の回復の爲めに、是非になされざるべからざることを人性はなし遂げ得ずして、神性之をなし得ることあり、又た神性に相應しからぬことある時は、人性之を果し得ん』(カル・デウス・ホモ』二卷一八頁)。

最後に、宗教改革者は、基督教の救の觀念に本來の宗教的調子を還附せり。東方に於ては、範疇が有形的類似に捕はれ、西方に於ては、法廷的となりしとせば、ルウテルとカルヴインと出でゝ、贖罪てふことは、又もや單に個人的のものとなり、神と靈魂との間の、史的媒介によれる一關係となれり。

彼等の見る所によれば、神は聖なる愛にして、救拯とは彼と交通することなりき。此は罪の赦に據りて立ち、無限の對象に自己を獻ぐる信仰によりて獲得せらるゝなり。基督は、此の職分を果すに適したる形式によりて考へられたり。彼は神を啓示する者なり。彼は人の保證にして又た代表者なり。永遠なる神の眞理と愛とは、彼によりて我等に觸れ來り、彼に於て、我等は天父に導かる。而して此の關係の兩側面、即ち神は我等の爲めに基督の中にあり、我等は神の爲めに基督の中にありてふことは、常に相制し相和せり。斯くて進む中、大問題は螺線的形樣を以て一段高く再現し來れり、即ち彼の事業の此の新觀念の光に照されながら、彼の、本來の性質に就て何と考ふべきか。罪ある人の爲めに、永遠の贖罪的恩寵を體現するとせば、基督は誰ぞや。あらゆる有益なる討論に根本的必要にして、歴史も亦之を助くる一の原理あり。其の原理は、基督が成し遂げたることに關する我等の思想は、我等が基督に就て知り得る所を定め且つ限ると云ふ事なり。救拯のある如くに、救主のあるは、必然の事なり。

此の大體の眞理は、樣々相聯關したる道をとりて發達したり。我等は耶蘇の人格と地位とに關して、我等の思想を明瞭にせんとする時、四個の觀念を摘出し、之を用ひて歸納的の案内となし得べし。其の觀念は、(第一)倫理的卓越、(第二)贖罪、(第三)基督との契合、(第四)啓示なり。是等

の中心事項を考察する時、我等は基督の事業は、自ら我等の思想を導きて、彼の地位に關する特殊の見解に到らしむ。彼の事業は、畢竟彼の人格の活躍したるものなり。(二)

(一) 基督は人生の最高なる道德的權威なり。彼は品性及び行爲の新しき理想を鼓吹し、之を現實にするには、彼の助に依らざるべからず。我等は今、此の感化の傳達せらるゝ徑路如何を說かんとするにあらず。たゞ此の事實其のもの、此の事實が、耶蘇の心と照應する所以、又た基督論の爲めに含蓄する所を明にせんとす。

基督の心に就ていへば、彼は通常の人間が、その同輩に向て求め得るよりも、更に絕對的なる個人的服從を求めたることは明なり。此の服從は、人間生活の全原野を蓋ふものにてありき。人を勸めて彼自身に信賴せしむることは、主要なる一の目的にてありき。彼自身に忠なるべきことを主張するや、舊約聖書に現れたる神の嫉にも似たるものありき。『若し人我に來り其の父母、妻子、兄弟、姉妹又た己が生命をも憎む者にあらざれば、我が弟子となるを得ず』(ルカ十四、二十六) といへる一語に加ふる所あるを得ず。ユダヤ敎の祖先以來の法典に對して、彼の態度は、主權者の有する自由の態度にてありき。立法者固有の權利によりて、彼は過去を削除し、自己の王國の爲めに新しき法を制定せり。斯る高等なる法則を宣布する時にも、彼は更に神的批準に訴ふる所なし。自ら意識する所によれば、彼は天父の代表者にして、常に其の目的の全般に參與し、萬事を委ねられたる子として、天父の心を宣揚するを得たり。大なる生命の問題に關する彼の宣言は、究極的の調子を以て言ひ表はされたり。個人の品性にもあれ、義務の皮相的衝突にもあれ、沒我の召命にもあれ、或は赦罪の方途にもあれ、眞理は彼の眼前に明瞭に開展せり。彼が批評し、宣告し、赦し、稱讃し、命令するや、決然斷ずる所ありて、是以上に訴ふべき所なきが如し。彼が理知的問題を解決したることは記されざれども、歩一歩更に大なる問題を處理したり。彼は無比なる任務を果すべく召され、又たそれが爲め無比なる力を備へたりとの意識を以て、故意に此の地位を占めたることは、世界の最後の審判者たりとの高大なる標榜によりて證せらるゝを得べし。彼はまゞふ方なく、此の斷言をなせしが、新約聖書の書翰により、其の決して忘却せられざりしことを見るを得べし。原理よりいへば、是は決して新しきものに非ず。罪を赦すの權ありと認むる以上、イエスは、人の運命を判決し得ることを以て自ら任じたり。されど少くとも、道德的審判の普遍なることゝ時間を超越せることは、此處に斷定せられたり。故に耶蘇自身の考によれば、彼が人類を支配する權威を有する所以は、永遠に確實なりとの意味に於て、絕對的なるものなるが、加之其の權威の確實なるは、深く人格の奧底に入り、我等の身に有りし總ての事の上に下さるべき、愛と聖との最後の判決を表象するが故なり。

他の一面を見れば、此の驚くべき標榜、即ち僭取强奪されたるにあらで、單に豫想せられたる此の標榜は、あらゆる基督敎信者の認め來りたる所なり。何時の世にもあれ、耶蘇を主と呼ぶ人々は、彼

が生活及び行爲の上に、協同的ならざる支配を行ふことを喜びたり。是は善惡の意識の如くに、結局的の事とも見られ得べく、我等之を說明し得るとも、亦た說明し得ざるとも、兎に角彼が道德的範圍に於ては、最高のものなることを知らされたり。之を詳言すれば、彼の敎訓が强さと明るさとに於て、卓絕せるのみならず、又た彼自身の生活が、此の敎訓の完全なる例解にてあるのみならず、彼は良心の王位に坐りて、我等に干涉する權利を有し、また彼にのみ從ふことにより、我等が道德上の戰に勝利を受け得べき者として、我等の前に立つと知られたり。耶蘇が果して支配する權利を有するや、否や、是は屢々點檢せられたる所にして、其の制限を見出さんと求められたることあり、また定義に用ひたる言葉も能く批判せられたることもあれど、基督者にとりては、堂々威嚴を有する基督の道德的卓越は、人の經驗の長さ、廣さ、深さ、高さを包擁せるものにして、之に服從するは、利害得失の問題にあらずして、生死の問題なり。デールのいひし如く、『我等の主と親しくなり行くことの結果として、良心は自己を確知するよりも更に多く、彼を確知するものとなり、義務の法則の中に見出す恐るべき義務をば、基督の意志の中に見出すなり。彼の道德的意志は、それが基督の意志なる故に、我等が何時如何なる場合に、其の然ることを覺知するとも、そは常に最高の意志なり（デール『基督敎々理』一一〇頁）。

基督の權威は、之に從ふに自由あるとともに、又た人を威壓するものなることは、解釋を要する事實なり。我等は彼の權威に制限ありと考へ得ざるのみならず、その制限あらざることは、漸次に明になり來るなり。彼の意志は、義務の最高の形式を代表すてふ法則の除外例を求むるも無益なり。エー・シー・ブラッドレイ氏の言に曰く、『我等は一の事物をば、比較的、計量的、有限的に偉大なりと考ふる時、其の事物を崇高なりと考ふる能はず。其の事物は、物理的にあれ、生命的にあれ、或は心靈的にあれ、我等は「此は甚だ偉大なれども、如何ばかり偉大なるかを知る」といひ、或は又た「此は甚だ偉大なり、されど他にも之と等しく、或は之にも增して偉大なるものあり」といふ瞬間に、崇高てふことは止む』（『詩に關するオックスフルド講演』六〇頁）。此の測られざる偉大、此の崇高は、我等の主たる耶蘇に屬せり。支配する彼の力は、我等の理解を超越す。而して斯る感情は、そが即時の衝動に抵抗することによりて堅めらるるに至るものなり。何人も初めて耶蘇の權威に接する時、彼は一種の狐疑躊躇を意識す。彼が受け、捕へ或は對し能はざる或物に襲れつゝあるかの如く、妨げられ、挫かれ、眩惑せられ、甚だしきは拒絕せられ、脅かさるゝ如き感を懷かざるにあらず。されど一朝己の人格が襲れつゝありと感ぜざるやうになるや、彼は或は急速に、或は徐々に、而も彌增す强さを以て、自己より移し出されて、眞の善の範圍に入れられたりとの感覺を生じて、著るしく敬畏と謙抑との色彩を帶びたりといふのみにては言ひ足らぬ、崇敬的服從の態度をとるに至る。斯くても我は耶蘇に誤られたりと呟き、或は絕對的意味に於て善なるものを奪はれたりと、かつて人は未だ曾てあらざりき。

且つ我等は、基督より道徳的の原動力と鼓吹力とを受くるなり。是なくば、彼の教は、たゞ我等を失望に導くのみならん。服從すべしといふ召命とともに、服從し得る力も亦た與へらる。人性の道德的資力は、基督の中にあり。此は遍く實驗されたる眞理にして、一二の人が、我は此の如き實驗を有せずといふとも、何等の力なきことなり。人々は基督の意志を我ものとし、我意志を彼のものとなさんが爲め、自己以外に脫出し、彼とともに死して、又彼とともに活くるに至るなり。彼に在りて神の子たる關係に參與し、自己と戰ひ、惡と戰ふ時、彼の同情及び交通によりて支へらる。彼等は基督の戰と勝利とに參與す、眞實に之に參與するなり。

既にいへる如く、此は說明と綜合とを促す明瞭なる事實なり。我等は神の無限なる如く無限なる道德的權威を有する一人に面接す。然も是れ全く人間的なる人格なり。是に於てか、基督を論ずるに當り、人間的超越以上の者を媒介する。此の完全なる人格をを看過するものは穩當なりといふを得ず。現代人の心は、多くの場合先づ此の手懸りより、基督の神格に到達す。彼が完全に父の意志を果したり、從ふて又た人の上に權威を有すとの斷言（屢々いはざるが故に苟もせざるを見るべし）は、自ら義とする骨頂なるか、或は神の子が自己を啓示する言葉なるか、兩者の中何れか其の一なり。此の如く論ずるは、耶蘇の事業によりて人格を解釋することなり。

（二）基督の成し遂げたる贖罪の事業は、是亦彼の人格の決定的一指針なり。此の本義に就て、デニイ博士は、其の著『基督の死』に於て、簡單なる說明を與へ（三一七頁以下參照）、贖罪の教理は、本來基督論の福音的基礎たるべきことを論ぜり。曰く、『出來得べきだけ簡單にいへば、基督は我等の爲めに此の事業をなし得る人格なり。彼に就て知り得ることの中には、最も深く最も決定的なる事柄なり。之に就て起る問題に答ふるに當り、我等は實驗に於ける基礎より出發しつゝあり。基督は神人の和合者として我等に對せる意味あり。彼は我等の爲めに神の意志を遂行しつゝありて、我等は唯之を仰ぎ見るばかりなり。我等の彼に於て見る所は、我等の罪に關する神の慈愛にして、地上に於ける彼の現在と其の事業とは、神の賜物にして、又神の訪問なり。彼は人が神に捧げたる者にあらずして、神が人に賜ひたる者なり。神は彼に於て又彼とともに、自己を我等に與ふ。我等は、神的生活といふ、總てのものを彼に負へり。然るに又た、此の神の訪問は、如何にしてなされ、神的生命は、如何にして與へらるゝかといへば、眞に人間的なる生活と事業とによれり。此の世界に於ける耶蘇の現在と事業、罪を負ふ事業さへも、吾等をして、人らしき事と神らしき事とを互に相反對せしめて考へしめず。即ち兩者相一致せざることを暗示することなし。而も二つながらともにありて、その共にある事實が、一面に於ては、耶蘇と神との關係如何、他の一面に於ては、人との關係如何てふ疑問を提出せしむ……福音に於ける基督の地位を確立し、基督論即ち彼の人格の教理なからざるべからざらしむるものは、贖罪の教理なり……贖罪は又常に我等に語りて曰く、『此の人の如何に偉大なることを思へ！贖罪てふこ

とが、福音宣傳に於ての要素となり、又た新約聖書に於ける如く、讃美せしむる最高の感興として、教會内に樹立する限り、基督者は高尚にして恭しき思想の對照をば、主の人格の中に見出すならん』。

デニィ博士の説く所、有力にして此の上に加ふべきものあらざれど、聊か其の含意に就て語るも亦た益なきにあらざるべし。耶蘇の十字架に現れたる、代償的の愛は、是れ即ち神の愛なることは、基督者が直覺的に知る所なり。『彼の悲によりて我等に平安を與へ、彼の死によりて我等に生命を與ふる』ものは神なり。彼の心に取りても、我等の心に取りても、恐るべき壯重を以て、我等の傍に立ち、我等の罪を己が肩に負ふものは神なり。若し然らずば、即ちカルバリィ山上に於て、我等の目を引き上ぐる苦難は、神的の苦難にして、之によりて我等が、永遠者の祝福さへも惱ます悲痛を窺ひ得べしと考ふるにあらざれば、宗教にとりて何等の意味も有せざるならん。人と神との關係は、影響を受くる所なし。之に反して、我等が死に又活くる耶蘇に對する時、我等は彼に於て注ぎ出されたる神的の犧牲を意識する故に、我等は彼の人格に就ては、斯く〳〵の見解を有せずして止む能はずといふことゝなるなり。『己の子を惜まずして、我等すべての爲めに之を附しゝもの』てふ言葉の哀感と崇高とは、人の心を動かし、又た服從せしむるものあり。人間の言語は、狹く且つ貧弱なりと雖も、我等之を用ひて信仰の確實を示さゞるを得ず。其の信仰とは、基督我等の爲めに苦しみし時、神も苦しみたりてふことなり、即ち我等の爲めに、父は其の顏を子に隱し、其の手を引き、子を賴りなき境地に置き、敵のなすまゝに之を委ねたることなり。十字架に於て我等の受くる印象は、『我等の惱みと愛ある交通を保てる』神其自身を耶蘇に於て見るにあらざれば解し難し。

又た耶蘇の生と死とに於て、罪の宣告を下したることを見るを得べきが、是即ち神自身の下したる宣告なり。神の命を受けたる豫言者、若くは他の靈感に充されたる使節によらずして、神によれり。我等は耶蘇と對する時、之に就て、活ける感を有す。惡の共に宿り得ざる聖善は、彼の目より我等に臨む。我等の主の動作ほど、罪を暴露し、暴露することによりて、之を責め、之が究極を示し、之に宣告を下したること、他にあらず。彼が罪ある者と交渉し、又た罪の結果と交渉する間、此の人は、神と一なり。十字架に於て見る者を恐れしめし所のものは、罪と一善人と相接したる點にあらずして、罪と永遠者と會合せる點なり。基督は眞の人として、道德的惡の恐しさと禍とを感じたるとゝもに、神と一體となりて、罪責を感じ、之を審判せり。斯く罪を審判し、斯く宣告せしに係らず、其の罪人の爲めに死するとせば、彼は罪を贖ふ人にして、初めて罪を赦し得べしてふ道德的眞理を示すものなり。然らば耶蘇が、其の人格的表現たる此の審判は、神の審判にして、同時にそは完全なる人格の媒介によりて宣告せらる。即ち自ら誘惑と戰ひ、神の力によりて之に勝ち得たる人の唇より宣告せらる。

且つ又た贖罪が、基督論に關する大問題を起す所以は、基督の從順が、罪ある我等の爲めに何の益する所あるかを問はしむるにあり。ひとりの人の苦しみが、如何にして他の人を益し、また他の人を

救の中に包擁し得るか、是れ常に人を惱ます問題にてありき。モオパリイの言を藉りていへば、『贖ふ者の事業或は忍耐或は善良は、如何ばかりなりとも、人々の人格の外にあるものなるに、之が切迫せる必要の點に觸るべしとは、如何にして考へ得らるべきか（『贖罪と人格』七四頁）。遺憾なく此の問題を取り扱はんとせば、我等は第三項に要領を掲げたる議論を取り越すことゝなる。されど少くとも、此處にいふべきことは、若し耶蘇基督が、單に一個の人間にして、我等が同胞と別なる如くに別なるものとせしば、此處に掲げたる難問は、論理に於ても、道德に於ても、等しく解決し難きものとならん。然れど使徒パウロ及び使徒ヨハネと共に、我等が基督を一個孤立したる人格と見ざれば、彼が人類の代表者とてなせし犧牲の行爲は、全く別なることゝなり、彼が萬人の爲めに嘗めし死は、萬人の死が有すると同じ意義を有することゝなる。基督と人との一致は、一致なるが故に兩側面を有す。彼が己を我等と一にすることは、彼にも我等にも結果する所を含むなり。即ち代表的中心的人格（矢張り正眞に個人的なる）としては、人類と相連なるなり。而して此の普遍的關係は、彼の救贖力の活ける條件を構成するなり。罪を贖ひ得る力の活ける條件、此の關係によりて作らるゝなり。然らずして先づ基督より基督者を引き離し、互に通じ難き人格として之を差別し、然る後基督のなせしことゝあることゝにより、我等と神との關係が一變したりてふ如き其の合一に歸らしむるは困難なりと見ることは、確に多くの贖罪論中の誤れる行き方なりと知るべし。然れども基督敎神學なるものは、其の性質上、信仰あるものゝ經驗を內より解釋するものなりとせば、我等の意識せる基督との一致は、我等の立脚地なり。一時たりとも、之を閑却するは、不當として排斥せざるべからず。我等は此處に之を證明するにあらず、又た之より離れて贖罪論を構成するにもあらず。寧ろ之を假定し、而して其の最深の含意を闡明せんとするものなり。現在の目的よりすれば、適切に推論すべきことは是なり、即ち基督が人を己に集め、彼等の名に於て、又た彼等の爲めに、罪を非とする神の義に反應する、此の絕對的の資格は、我等綿密に之を考ふれば、唯人主義的に彼の實在を觀ることを全く不適當ならしむる或物なり、との推論なり。

然のみならず、我等が基督の眞の神性を認むる時、贖罪論から生み出したる、最も重大なる道德的困難の一を排し得べし。此の困難とは、『怒れる天父、犧牲となれる子、罪なき者の不當なる刑罰、罪咎ある者の不當なる恩賞』てふ、有るべからざる思想に對して、人の感ずる困難なり。或形の贖罪論に對しては、此の非難の正當なることは疑ふべくもあらず。されど父と子との間に、一種の反對ありと考へしむるが如き謬論は、基督の神性を主張する者よりも、之を否定する基督觀に屬する方自然なることは明なり。若し基督が單に卓絕せる一個の善人にてありしならば、贖ひの愛は神より出でずして人より出で、彼の犧牲の切實と熱情とにより、さらでは和らぎ難き神を宥めて、慈悲を施さしめしと考ふる議論にも一理あらん。されど基督に於て神自身來りて我々を祝福したることを確信する

以上、此の如き反對はあり得ざることなり。要せられたる賢を備へしものは、神自身にして、又た己の命を以て之をなしたりとせば、彼の和らぎ難きことならで、無意味なることゝなるなり。

(三)第三に主の人格に光明を投ずるものは、基督者の有する實驗、即ち基督との活ける契合の經驗なり。此の神祕的契合は、いふまでもなく、昔の學者等が、常に基督の『本質』と信者の『本質』との間に存する契合と稱せしものとは同じからず。今日の人の、斯る見解を退くるは當然なり。されど彼等に一致すると共に、尙ほ忘るべからざることは、此の本質といへるは、單に昔の思想家が考へ得べき最高の實在てふことを肯定せんと勉めたる時に用ひたる範疇にして、實に神自身に就て有せる彼等の最高觀念にてありき。神が最後の又た普遍的本質なりといふことほど、神に就て高尙なる又た適當なる言現し方はあらざりき。されば彼等が、神との本質的契合てふことを說いて憚からざりしも、驚くべきことにあらず。彼等の考によれば、斯る契合は、想像せらるべき最も現實なるものにして、あらゆる意識的倫理的關係を超越せる祕密と、言ひ現し難き意義とを含めり。我等も亦た基督と我等との關係は、事實上甲の人と乙の人との間に成立する關係よりも、一層深く又た密にして、之を『神祕的』といふも不可ならずと考ふる點よりいへば、昔の思想家に同情することを得れども、『本質』てふ範疇は、之を採ることなく、人格なる思想によりて、新に事實を解釋せざるべからず。現實に程度ありとは、現代哲學にて認めらるゝ原理なるが、之に基きて、人格的契合は、所謂本質の契合よりも、無限に勝りて現實なりと考へらるべき筈なり。

果して然らば、基督との契合は、使徒等が救拯と稱せしことの全體を表す、簡單なる名なりといふも過言にあらず。使徒パウロ及び使徒ヨハネの考ふる所によれば、基督と一つになることは、救はるゝことにして、救はるゝことは、基督と一なることなりき。其の例解多々あり。例へば使徒パウロが、『主に合ふものは一の靈となるなり』(コリント前六〇十七)といへる一句は、初めて之を讀まば、我等をして驚き且つ惑はしむるものあれども、他の所に、人と其の妻とは、一の肉なりと記されあるを見れば、使徒の意味は、之よりも更に現實にして、又た高尙なる範圍に於て、密接なる靈的一致が、人と贖主との間に成立するとの謂なり。而して是は、外面的の特異性にあらずして、古典的の基督教的經驗なりしことは忘るべきにあらず。此の契合は、夫婦間の契合が有し得ざるほどの繼續を有し、又た他の有し能はざる結果を有するものたり。又た他の特異なる譬喩は、ガラテヤ書四〇十九に用ひらる。此處にては、胎內に嬰兒の身體の成る如く、基督が心の中に胚胎せられて、其の狀成るをいへり(『古今の基督論』サンディ頁一二二)。『基督に於て』てふ句は、彼が屢々用ふる所にして、其の反面なる『汝の裏なる基督』てふ句も亦た然り。ガラテヤ書二〇二十は、最も有名なる句なり。曰く、『我キリストと偕に十字架に針られたり、もはや我生るに非ず、キリスト我に在りて生るなり』。斯く云へる者は、彼の舊き自我は失はれ、彼がパウロなりといふ外すべて變じたる如く感じたり。他の者の人格は、彼に輸入せられ

て、彼がありしすべてはあらずなり、殘りしものは、自己の名よりも、寧ろ基督の名を以て呼ばるべき權利を有したり。疑もなく、此の句は、白熱の勢を以て書かれたるものにして、使徒とても、之を問ひ質されなば、まさか基督とパウロとが區別し難きほど、全く一に成れりといふ意味にあらざりしことは、自ら認むるならん。たゞ言語には、盛り切れざる重き意味が載せられて、一般的以上になり得ざる言語を以ては、到底全く類ひなき事實を言ひ現すに足らざることを示せり。使徒パウロの肯定する所は、少なくとも之を否定する所よりも遙に眞理に近し、彼の語る所は、眞に靈的の契合なり。靈と靈とが、相互に攝取し滲透することをいへるなり。其の間の結合は、非常に有力なるものにして、同じ屬性を兩者に附するを妨げず。我等と基督との結合の密なるや、我等は彼の死とともに死し、彼と共に彼の墓に葬られ、彼の復活とともに我等も蘇り、彼に在りて新生命に入ると、いひ得るほどなり。また贖罪の問題に關して、使徒パウロの最も大なる言葉が、此の關係を說く時に發せられたることは、注意深き讀者の見逃がさゞる所なるべし。ロウマ書八〇一は、典型的なり。曰く、『是故に耶蘇基督にあるものは、罪せらるゝことなし』。更に力あるは、コリント後書五〇十四なり。曰く、『我儕思ふに一人衆の人に代りて死にたれば、衆の人既に死にたるなり』。實に基督の死が、我等の死にてあり、又た我等の死となる意味あるなり。『首』に加へられたる死の制限は、自ら其の肢體に効力を及ぼす、是れ架空的法律的に役目を移す意味にあらず、人格的合體の結果然るなり。通常の言葉を以ていへば、信者は基督自身に『持分』を有するが故に、基督の死にも『持分』を有す。而して信仰によりて基督の人格に活き、舊き事物は去り、舊き自我を包括し、舊き自我を中心とせる一切の事物は新になるなり。(六)

使徒ヨハネは、基督敎の偉大なる實事に就て最後の言葉を語る人なるが、基督との契合は、贖罪の祕義なることを反復斷言する所、前者よりも更に切なる所あり。アーネスト・スコット敎授はいへり、『高等なる生命が、斷え間なく基督より信者に流れ來る神秘的契合の敎理は、第四福音書の中心的にして特有なる思想を有す』(『第四福音書』二八九頁)。スコット敎授は、之より進んで、ヨハネの觀念には、全く非倫理的にして實體論的なる要素の加はるものありと論じたり。彼の意見によれば、初代基督敎思想の道德的、宗敎的範疇は、形而上學的範疇によりて位置を奪はれ、兎も角も第二位に落され、詰る所人が神的生命に與り得る所以は、基督に存したる半物質的眞髓が、信者の性に注入せられて、其の組織變化するに至るに在りといふが、使徒ヨハネの思想なり。然れども、此の如き見解をば、福音著者が、終始信仰に重を置くことゝ調和することは、全然不可能なりといはずとも、甚だ困難といはざるべからず。第四福音書に於ても、又たヨハネ第一書に於ても、基督との契合は、倫理的、心靈的經驗の基礎たり、本源たる如く、又た其の經驗の知らるべき結果なり。常に生命の言葉を聞いて、親しく之を會得するに關係あり。曰く、『爾曹初より聞ける者を爾曹の裏に居らしむべし、若し始より聞ける

者、なんぢらの衷に居らば、爾曹は子と父とに居らん』（ヨハネ第壹書二〇二十四）。福音書に於ても、『信仰』とは個人的に知り、又た自己を托するの意味にして、此の信仰によりて、基督に宿れる生命は、彼を信ずるものに附與せらる。されど使徒ヨハネの象徴的用語を文字通り又は實體論的意義に解するの誤なることを證する最後の證據は、今日に至るまで有力なる宗教的著者が、自由に之を用ひ、實體論的見解を厭ふ人も之を用ふるを辭せざることなり。

此の豫備的異論を辨じたる上は、更に進んで、使徒ヨハネが基督との契合を現す爲めに借り用ひたる表象を注意せんとす。此は人の能く知れる所なり。基督は葡萄樹にして、信者は之に連れる活ける枝なり。彼は生命のパンにして、人之を食ふことにより、永遠に活くることを得べし。使徒パウロに於て然る如く、神祕的契合は、彼此孰の方面よりも代る〳〵觀ずることを得べく、『汝等我に居り』と云ひ、『我汝等に居る』と云ふが如く、孰によりてもいふことを得べし。基督者の生命は、基督に根ざし、彼を以て生命の要素又た傳達者となすてふこと、是れ即ち第一の語の意味なりと思はる。基督自身、彼を信ずる者に現在して、彼等の内の内なる存在の活ける中心となり、又た活かす原理となるてふこと、是れ即ち第二の語の意義なるべし。總て斯かる文章に於て、基督論と救拯論との區別は消え去つて、たゞ假の區別に過ぎざるものとなることを感ず。基督が人に及ぼす感化を實驗したる時、必ず彼の性に關する或一定の見解に達せしむること、是れ力說せらるべき點にして、使徒ヨハネに於ても、我等に於ても、異なる所あらず。彼は斯くして我等の内的生命にてあり得る人格として定義せらるべきものなるが、他の一面に於ては、斯る普遍的人格なればこそ、我等に對して内的種類の關係を有し得べきなれ。人格と領有とは、互に相因果す、人間に對して、此の無比なる關係を維持し、彼等に自己を附與して、人をして彼を内に有し、自己の心靈と同じく彼と交通し得せしむること、是ぞ特に神的なりとしてのみ解釋し得べき、能力又は行爲にてあるなれ。[七] 加之此の如き基督との交通は、新約聖書に記さるゝ所にして、總ての信者が、純然且つ内部的に神と結べる交通に外ならずと感ずる所なり。子を有するは、即ち父を有する所以なり。基督との契合は、神との契合の初歩にあらず、又た一個の準備にして、眞の目的に達したる後は無視し得べきものにもあらず。其自ら既に神との契合なり。他の語を以て示さば、一は他の方法にして、之を罪人に示す形式なり。此の複雜にして、然も明瞭なる事實、即ち基督は無數の心靈に宿り、彼等も亦た彼に宿り、斯くて彼等は神と一なりと感ずる事實は、耶蘇基督の高き人格に關する眞の議論に到る道を指さすなり。此の議論は、使徒の證明全體の中に含蓄せられたり、と吾等が感ずる所なり。

贖ふ者と贖はれたる者との間に實驗的に確めらるゝ生命の聯絡は、新約聖書に取りては、一語を加ふるの餘地なきまでに、高調すべきことなり。是はあらゆる點に於て、根本的にして、罪の赦も、罪人の潔めも、之によりて解釋せらる。今日多くの人が、尙ほ信者と基督との關係を適當に記述する爲め

に、『道德的』よりも『神祕的』なる名を喜ぶ所以は、半は彼等が基督に連なる人格的契合は、他の人との關係に於て實驗したるものに超越するが爲めにして、半は『道德的』てふ言葉にては、此の一致が、彼により始められ、彼の力によりて維持せらるてふ、根本の心理を現し得ず、或は充分に現し得ざるが爲めならん。

勿論我等が哲學的に神祕的契合の如き事實を解釋せんとせば、之に先だちて、人格てふ觀念を訂正せざるべからずと雖も、兎に角此の種類の解釋を要することは明にして、又た此處に到りつゝあることは明なり。往年ストラウスは、『人格とはあらゆる他のものに對して、自己を鎖し、之を排除する、其の自我なり』（『基督教の教義』一卷、五〇四頁）。といひしが、今日の見地は之と相去ること遠し。ストラウスの意見の如きは、人格の鐵石（アダマチン、セオリ）說といふべきものにして、人格の世界は、宛も箱の中に入れたる許多の彈き玉（ビリヤード）の如く、各其の隣と沒交渉なりと見るものなり。此は果して全體の眞理なるか、責めては眞理の最善の部分にてあるか、我等が依つて以て、宗教的交通を類推すべき人間の愛の聖き歡喜を味ひたる人は、靈は透し難き孤立なりと見ることの當らざるを感ずるならん。否我等は、或程度まで自己より脫れ出で、愛と思想と意志とによりて、他の人の生命に混ずることあり得べし。『我等が人格たる所以は、自ら孤立する力あるが爲めにあらず、此の孤立を超越して、自己を他人に結び、他人を自己に結ぶ力あるによれり』（ロフトハウス『倫理と贖罪』一一七頁）。此の事實をば我等の問題に關係せしめて考ふれば、我等が基督と信者との間の生命の結合、心靈的一致に就て語る時、既に人間の社會的生活に含まれたる原理をば、此處に推し及ぼしたるに過ぎざることは明ならん。ロッツェが痛切に論じたる如く、我等に於て、人格は不完全にして、完全なる人格はたゞ神に存すとせば、我等がたゞ一部分有する、此の自己を附與する力は、神に於て完全に充實し、故に又た、我等の接し得べき神たる基督にも存すと結論し得べし。然らば神祕的契合てふ一語に約言せらるゝ、基督者の經驗は、其の中に神にして且つ人なる救主を含蓄（九）せり。』

（四）基督が天父に關して、完全なる啓示を人に與へたる一點に至りては、之が說明の勞をとることを要せず。權威により、贖罪により、生命を與ふることによりて贖ふは、是即ち啓示なり（譯者曰く、此の三つのものは既に說き來りし所なり）。耶蘇の言は、神の聲なり。耶蘇の涙は、神の憐なり。耶蘇の怒は、神の審判なり。總ての信者は、彼等の生涯の最も神聖なる時に際して、神と基督とは相合して、道德上には區別し難くなることをば、崇め歌ふ讃美を以て告白す。人を避けて神の顏を見上ぐる時、我等の前に現るゝは、基督の顏なり。基督の意志を行ふと、神の意志を行ふとは一なり。我等が『神』てふ語の內容如何を自問して、如何にして確實にせられしかと尋ぬる時、我等は議論を加へずして、基督の特質を神に移したることを發見して、多少の驚なきを得ず。其の特質とは聖にして且つ力ある愛なり。吾等が實際に耶蘇を思ふは、此の本質的の特質を無限にまで高めての事なり。實に故マ

ルチナウ博士は、ユニテリアンの徒は父なる神を拜すと思ひながら、同時に子に崇拜を捧げつゝありたりといふに至れり（三位一體論々爭よりの一活路）。事實に關しては、何等の爭あるべきに非ず。基督は神の啓示者なり。彼の啓示よりも完全なることは、考へられ得べからず。彼に於ては、神的性質は、人に屬する條件を以て現はさる。是が我等の眼前に立てられ、之れに就て說明を聞かされずして、たゞ之を見よと命ぜらる。然らば彼の事業の側面の中、最も包括的にして及ぶ所廣き此の側面は、彼の人格に如何なる光明を注ぐか。啓示者たる基督を經驗することが、基督論の解決を含むといひ得るか。

之に對する答を簡單にいへば、自ら啓示する者にてある人にして、初めて完全に啓示し得べし。若し彼が、彼によりて現さるゝものと同一と云ふに足らざるものならば、其の表現は、それだけ宗教的には不充分なり。若し彼が、受造物的若くは天使的の形式にて、神の模寫なりとせば、即ち或は人以上なるべきも、半ば神なるか、或はアリウス說に說ける如きものならんには、我等のために彼が、充實せる神格を有し得べくもあらず。茲に基督者が、其の心に見る所如何を思へ。彼は基督を神の側に置きて、前者より後者に論及することなく、却りて神は直接人格的に基督に現在し、此の如くにして彼に照應するとを發見す。基督が世界に實在する結果として、人は全く新しき道に於て、神を得、神を有す。此の如くして神を有するとは、神的現實によりて媒介せられたりと考へずば、解し難きことなり。且つ神以下のものならんには、彼以外に行くべく人に指示し、其の弟子が偶像崇拜的の愛を自已に寄することを拒み、福音と自身とをば、餘りに深く結び付けざるやう警戒を與ふべく、良心あらば、是以外の事をなし得ざらん。然るに耶蘇は、決して此の如き事をなさざりき。彼は寧しろ自己の人格を構成したる超越的生活を營み、神的自我を以て人に對し、彼の存在の事實をば、一個の啓示として人の心に徵せしめたり。彼は忠實にして又た變ぜざる贖主として、天父を我々の達し得る所に近づけたるが、彼が斯くなし得たるは、彼が傳へたる其の者と同一なるが故なりと知るべし。

故に此處にも復た、耶蘇の實際の事業又感化は、おのづから人の心を彼の人格に關する或解釋の方向に導くなり。

結論としていふべきことは、基督の事業が其の人格を輝かしむるものなりとせば、其の反對の命題も亦有効なりと知らるべく（エッザヒル『神の子の啓示』一四一—四七頁）、即ち其の事業は、其の人格によりて光輝を發するなり。我等が之を主張する時、新約聖書と接觸を斷ちたるにあらず、依然其の豐富にして多樣なる一面を我等の心に受け容れつゝあるなり。例へば使徒パウロに取りても、基督に關する根本的眞理は、彼がなせしことにあらで、彼がありしことなりき。基督の行爲は、其の實在を示せり。『基督が人の爲めになせし所のものを說明するものは、彼が神にとりて如何なるものにてありしかとふことなり。使徒パウロの見る所によれば、基督と神との關係は、基督の犧牲に最高の價値を與へ、恥づべき十字架

をば、人類に對する神の愛の榮光ある啓示に變ぜり』（『ヘスチングス聖書辭典』第三卷七二二頁フインドレエ執筆）。第四福音書も亦同じ徑路を辿りたり。即ち本來の性に於て、基督は神の子なりてふ、確信せる原理の光に照して、基督の行爲と歴史とを理解せんと求めたり。同時に共觀福音書の著者は、寧ろ歴史的事實より、其の事實の示す人格に向ひて進みたり。されど兩者何れも、正當なる方法を取りしことは爭ひ難し。我等の說きし如く、事業が性質を知るの根據なりとせば、性質が事業の成立する根據たることも等しく眞理なり。故にたゞ基督の生涯の記錄されたる事實のみを取るべし、基督論あるを許さず、と主張する實證主義は、實は事實が本來有する充實性と其の意義とをも了解せざるものなり。音樂に於ても、一音の意義は、之に先立つ文脈に關する如く、事の性質は前後の關係によりて定まるものとすれば、基督敎に於ても、苦しみし彼は、恩寵によりて、神の永久の生命より來りしなりと理解すると否とは、我等が十字架の意義を認識するに當り、重大なる相違を生ぜしむ。且つ又た、贖罪の敎理にも若干の困難あることは、先に神祕的契合のことを研究したる際に示したる所なるが、是亦た、マクラウド・キャンベルの語を借りていはゞ、『成肉身の光明の裡に』、此の問題を取り容るゝことによりて之を說き得べし。

贖罪と成肉身とを競爭者の地位に置き、一の損は他の益なりと見るは、方法と解釋と、共に誤れるものなり。或人々は謂へらく、贖罪論のみが神學の基礎となるべきものにして、成肉身は、不可思議的或は第二義的なりとの故を以て、敎理の研究の範圍外に排斥せらるべしと。又た他の人々は、成肉身のみを眞に眼中に置くべきものとし、純然たる思辨的問題の論議の用をなすが爲めに、斯く之を尊重す。然れども此の對照は誤れり。樹の幹と果實との間に何等の競爭ある筈なし。何となれば兩者相依り相結びて立てばなり。其の如く、成肉身と贖罪とは、又基督の人格と事業とは、互に相依りて單一なる一個の經驗を構成すればこそ、具體的にして知り得べき現實を作りたるなれ。生命てふことより見れば、二者の間に間隙もなければ龜裂もなし。耶蘇基督に於ては、在るといふことゝ爲すといふことゝは、世に絶して一なり。外面より彼が在りしことゝ、爲せしことゝを研究する我等に取りて、是は眞實なることなるが、彼自身の思想に於ても然かありしならん。蓋し耶蘇は、彼に授けられたる事業を十字架上に於て成就したるにより、充分に自己の性を理解して、そが前にも後にも永遠なる所以を完全に觀じ得しならん。

我等は基督論の研究の闕に横れる、豫備的問題の論議を終りたり。先づ基督論の必要なる所以を問題となし、たゞ文字通に傳說を受け容るゝことにより、或は事實あるのみ、解釋は必要なし、と主張する實證主義によりて、敎會の永久の要求を充たす能はざることを明にしたり。次に我等は、我等の基督論的構成と、新約聖書に含まれたる耶蘇の描寫と相應ずる所以を明にせんと勉めたり。最後に基督の人格に關する我等の見解は、常に彼の救拯の事業に關する、我等の觀念によりて決定せらるべき

ことを示せり。

之より以下の議論は、二つの部分を含めり。第一の部分に於ては、我等は救はれたる實驗によりて、基督を捕ふる時、彼に關する信仰の直接表白する所を檢せんとす。第二の部分に於ては、是等の素朴なる宗教的實事（サーテンナーズ）に潜めりと思はるゝ超越的豫想、若くは含蓄を論ぜんとす。是等は信仰に含める、一層遠き原理にして、教理に於ける眞實の要素を構成すれども、此は又た含有せりといふまでにて、信仰により直接意識せるものゝ實際的成分にはあらず。此の區別を立る便利は、斯くて我等は、基督に對する人格的、直覺的見解に就ては、信者の異論なき所を眞實に認識し、議論の岐るゝ一層込み入りたる問題を此處までで取り越して、分外に煩はさるゝことなきを得るなり。さりとて、既に論じたる如く、哲學は神學に沒交渉なりとの理由を以て、是等の込み入りたる超越的問題を不問に附すべきかといふに、決して然らず。チムスのいへる如く、『教會が其の信仰を傳播し得る力は、福音の大眞理を人の心情にも理性にも明にし得る力によること多し』（『基督教の贖罪觀念』第四頁）。宗教的意識よりおのづから發する眞理の感興が、哲學者或は神學者の法令によりて禁壓せらるべしと思ひ、或は又、人をして基督と其の豫先狀態、其の人格の成立、信者に對して有する現在の關係等に就て、疑問を發せざらしめ得ると思ふは、孰も無益なり。是等の問題が一度提出されたる以上、神學は最善の力を盡して、之を解釋せざるべからず。或は解釋し難しとすれば、何故然るかを證明して滿足を與へざるべからず。是又た等しく重大なり。

註（一）　希臘人の救拯觀に於ける智識（眞に靈的なる一要素なる）の位地は、看過すべきにあらず。

（二）　斯くいふものゝ、或點より見れば、西方の神學者は、基督の眞の人性の感を維持するに與りて力ありき。彼等が贖罪の教理を捕ふること、より深かりしが爲めに、其の救主は、眞の倫理的主體として、大なる責任を負ひ得る救主なりき。斯くて傳說的基督論に於ては、彼の人性は非人格的となりたるにせよ、救拯的事業の教理の中には、却りて實に人格の充分なることを想定せり。

（三）　初代の宗教的藝術は、イエスを描くに、必ず活動者（アクチンジ）として描きたり、是は健全に直覺的なりき。

（四）　此事に關する思辯的にして、而も深刻に印象的なる一陳述につきては、ネッツルシップの『哲學的遺稿』四〇—四二頁を見るべし。

（五）　『エキスポジトル』一九〇九年二月號に於ける、著者の論文『神學的概念としての神秘的契合』參照。

（六）　ヘブル書の著者が、此の立論法を採れることを痛快に論じたるものは、イー・エー・アボットの『人の子の使命』（八三頁）なり、就て見るべし。

（七）　フエアーベルン博士は、他の方面より能く此の點を說き得たり。曰く、『總ての人に於て、神に似たる性質は、基督に於て、神と人格的契合となれり。而して彼に特有なる人格的契合（unio personalis）は、總ての人に可能なる神秘的契合（unio mystica）の基礎なり。『現代神學に於ける基督の地位』（四七五頁）。

（八）　ブラウニングは、其の作『沙漠に於ける死』を結ぶ有名なる數行に於て、此の點に觸れ、我等の全體の論旨を約言せり。

『思ひ視よかし、此世の終らんとき、ちよろづの魂は、御言葉のごとくに、おのがじゝキリストに結びて一つとならずや。われはパムフイラックスとして、ゲヨンはゲヨンとして、交りたまふ主こそは、げにすべての者の花婿にてあるなれ。こは人間のよくなし得る所ならんや。さはれキリストは宣へり、「われは斯く成さんがために世に活きて死れり」と。さればキリストを崇めて、無限の神と呼べよかし。』

（九）　ジエエムス・ドラモンド校長は、其の好著『基督教々理の研究』（一九〇八年）の中に、明白なるユニテリアンの立場より立論したるが、其の中には、論理的ユニテリアン主義にては、到底容るゝ能はざる基督觀に鼓吹せられたるものあるを感ざるを得ず。或る所には記して、基督教は『心の中にある基督、神に安心の地を見出すべく、信仰と生命とに充ちて、基督に安住せる心なり』（二七五頁）といひ、また『耶蘇は彼を愛する心には、「活かす靈」、內的生命を造り、彌增す氣力を充たしむる者なり』（二九一頁）といひ、また『耶蘇は信仰によりて、日々人の心に宿り、其の靈の印象を留めて休まず』（三〇一頁）といへり。彼の書中には、歷史上の基督と、或人が恣に基督觀念（クライストアイデア）といふものとを區別せんと試みず。

此の章に關する參考書

ケヘレル『基督論の基礎及び標準としての十字架』（一九一一年）
Kähler, Das Kreuz, Grund und Mass der Christologie.
ゴオル『バンプトン講演』（一八九一年）
Gore, Bampton Lectures（譯者曰く神子他身論と名くる日本譯あり）
フロムメル『道德及び宗教の研究』（一九〇七年）
Frommel, Études morales et religieuses.
ヘヤリンク『基督教の信仰』（一九〇六年）
Haering, Der christliche Glaube.
ヴヘント『基督教々理體系』（一九〇七年）
Wendt, System der christlichen Lehre.
デニイ『基督の死』（一九〇二年）
Denney, Death of Christ
ガアヴイー『リツチルの神學』（一八九九年）
Garvie, The Ritschlian Theology
ヂエームズ・ドラモンド『基督教々理の研究』（一九〇八年）
J. Drummond, Studies in Christian Doctrine
ウオーカー『靈と成肉身』（一九〇一年）
Walker, The Spirit and the Incarnation
ケヘルンス『基督教と現代世界』（一九〇六年）
Cairns, Christianity and the Modern World.

第二編　信仰の直接なる表白

第四章　信仰の對象たる基督

我等が基督論を立つるに當り、近代の諷示的一著者が切論したる如く（ヘヤリング前掲の書三七〇頁以下參照）、其の性質單純にして、人の洽く同意すべしと思はるゝ、或る一の眞理若くは原理より出立することは、望ましきことなり。從來神學者は、議論の一致する所よりも、分るゝ所に注意するに傾き、此の習癖になづみて、其の主張を弱めたること少からず。初より歷史的解釋の多端なるを見て、和する所の調子を思はざるが爲め、一種の失望又は反激の感を研究者に與へ、到底透り難きものとして、此の問題を棄て去るに至らしむ。之を思ふが故に、我等は先づ基督者全体の考の一致せる一個の確信を見出して、之を以て、我等の出發點となすを賢しと思ふなり。

耶蘇を宗教的信仰の對象なりとする信念に於て、我等は、その出發點とすべき確信を見出すなり。我等はたゞ耶蘇の如く信ぜよと求められず、彼を信ずべしと求めらる。父として神を信ずる信仰は、子として基督を信ずる信仰と相結合して解き難し。固より、基督を離れて神に對する一個の信仰あり得べきは眞實なれども、斯る場合に於て、常に相關聯する所の『信仰』と『神』とは、二つなが

ら、基督者の社會の中にありて理解せらるゝよりも少き意味を有す。其の信仰は、小兒の如き信賴にまで至らず。其の神は、基督の神及び天父には及ばざるものなり。信者は初より神に關する新しき理解が、耶蘇によりて傳達せられたるを知れり。基督者の何者たるか、其の定義を下さんとする最初の試の一は、『汝等は基督によりて神を信ずるものなり』と云ふ、使徒ペテロの言葉に含まる。耶蘇によりて傳へられたる信念は、重力の理法が、ニユウトンを離れて存し得る如くに、彼自身を離れて立ち得べき單なる抽象的眞理にあらず。我等が自然界の法則に關する知識は、學者の研究と天才とに基くにかゝはらず、學者其の人を全く知らずとも、之を理解し又た用ふるを得べきも、神を信ずる最高、至純なる信仰は、たゞ一の道によりてのみ到達し得べし。そは信仰を以て耶蘇基督の人格に反應することによりて來るなり。我等が耶蘇に於て見るものあるが爲めに、凱歌を奏して神の確實を感悟して疑はざるを得るなり。過去に於ける總ての偉大なる聖者も、亦た今日神と和合して平和を享有し、潑溂たる氣力を以て、神の國の事業に盡瘁しつゝある人でも、孰も皆此の事實を證明例示するなり。使徒ヨハネの兩刃(もろは)の言は、此の實驗を寫せるものに過ぎず。『凡そ子を拒む者は父をもたず、子を受くる者は父をもてり』耶蘇なくとも、人は神に就て多くの事を知ることを得ん。神の智慧、威力、崇高、否な彼の慈愛をも知ることを得べし。されど彼の父たること、則ち其の大なる名には、罪人に對するあらゆる慈愛をも含めることに就ては、何等知るを得ざらん。今こそ、我等は容易に、神の愛に就て語り、明瞭單純にして、自明なることの如く見ゆ。其實我等は福音に慣れたる爲めに見過し易けれども、我等に對する神の心は即ち眞の父の心なることの確信を見出し得るには、獨り耶蘇により、別て彼の十字架によれるなり。故に宗教的信仰の對象のうちに占むる、中心的地位より基督を移すことは、信仰の心的態度を變じ、又た之を貧弱にし、特に基督教的なる性質を破壞するといふことは、極めて正確なる事實なり。此の如くば、究極性、歡喜及び快活の無比なる調子は消失して、之に代る思想と感情とは、全然薄弱、無價値といふにはあらざるべきも、宗教的勢力と道德的感興力とに於ては、基督教に準ずるに過ぎぬものなることは爭ひ難からん。

されば父なる神を信ずる充分なる信賴は、常に耶蘇を信ずる信賴と常に相結合せり。(一) 新約聖書に統一を與へ、あらゆる歷々の說教者を鼓吹し、基督教時代の活ける連鎖を作るものは、耶蘇を信ずる此の信仰なり。されど此の信仰は、耶蘇の人格に關する細密なる理論より何處か獨立せる所あり、少くとも區別せらるゝ所あり。數多き現代の思想家の中、耶蘇を嘆美し、其の社會的方針に贊成することを辭せざれども、其の最高の權威と、仲保者たる地位とを認むることは、斷然之を拒絕し、或は生命と呼ぶ價値あるものは、盡く彼に負へることを拒絕し、斯く拒絕するは、耶蘇自身の明言したる確信と相戾ることを、充分に意識さるる目醒しき事實は、之が教訓を有せずんばあらず。此の點に於て、我等は基督教の眞髓に觸るゝことを證明す。福音が人を招き、己を棄てゝ基督の足下に跪かしむる時、限り

なき決心を求むることは、人が直覺的に覺知する所なり。此は大なる努力をなし、或は自己を緊張せしめてなし得ることにあらず。助なくしては、到底自らなし得ざるものたり。何人も聖靈によらずんば、『耶蘇を主なり』と言ひ得ずと、記されたり。此の如き告白を喚び起すには神の力を要す。我等が耶蘇を仰ぎ、崇敬の信念を以て彼に己を捧げ、且つ自らなすことの意義を現實に知り、『靈魂が神に與へ得るすべてのもの』を嚴かに歡喜して彼に献ずる時、我等は超自然的なる行爲をなしたるなり。それは殊に我等の中に於ける神の業なり。

此の型に屬する信仰に於ては、神と基督を別々に立つるにあらず、又た單に推理によりて之を結合せるにあらず、一の運動の中に併せて之を獲得す。基督を捉ふるは、即ち人格的に彼の中に現在したる神を捉ふる所以にして、他に斯る人格的の形を以て、神が我等に示されしことなく、救主として證明せられ、又た傳達せられしことなし。耶蘇を離れては、神に關する我等の觀念は不完全にして、且つ人を誤るものとなる。彼が天父に就て與ふる啓示は新しきものにして、『たゞ其の與ふる光によりてのみ知るを得べし』。此の故に、耶蘇は啻に神を信ずる此の完全なる信仰の歴史的起源なるのみならず、又その恒久の基礎、或は媒介者たるなり。神を信賴すると基督を信賴するとは、互に活ける關係を有し、孰も他を離れて定義を下し得ず。我等は耶蘇に關係なくして神を信ずる能はず、神より離れて耶蘇を信ずる能はず、又た耶蘇自身の爲めに神より獨立して禮拜せらるべしと信ぜず。我等は子によりて近くせられ、確實にせられたる父なる神を信ず。たゞ此の中間者即ち媒介者あるが爲めに、此の大なる現實は我等のものとなる。故に信仰は決して基督を超越せず、似て非なる神祕主義の唱ふる如く、耶蘇の生涯の記錄を智識の源とすることは疾くに時代後れとなりたりとして、其主義を更に優れりとするが如きことなく、又歴史的事實よりも一層賢くならんと試みず。『我を見しものは、父を見しなり』といへる耶蘇の一語は、經驗に照して誤らざる眞理を語れるものにして、動すべからざるものとす。

此の意味に於ける信仰を解釋したる古典は、即ち新約聖書なり。新約聖書に於ては、耶蘇は宗教の焦點に立てり。彼は徹頭徹尾、信仰、恐懼、敬愛の合したる心、即ち我等が崇拜と稱するものの對象なり。新約聖書を書きし使徒の中、說明或は辨證を要する事實として之を考へし人あらず。何等困窮の痕を見ず。彼等は到る處直按自己の經驗を語り、基督に對する新しき感覺を、其の儘他人に與へんと勉めつゝあり。耶蘇の靈、彼等の靈を支配して信仰を限定し、理想及び熱心を改造し、靈魂の環境を新にし、思想の流を移し、目に見えざる抑制を意志の上に加へ、極めて完全自由なる所の奉仕に服せしむるや明なり。彼等は無制限なる强烈を以て、此の神的感化に反應す。彼等は救拯と稱せられ得る一切のものを得んが爲めに、ひたすら耶蘇に依り賴めり。彼等は熱烈に一神論を保持し、許し難き罪惡なりとして、偶像禮拜を排斥しながら、一面に於て全幅の信仰を耶蘇基督に献ぐるなり。或人は基督を高く崇むるが爲めに、屢々神に關する觀念を弱くせることありと評す。歴史上

或る感傷的思想には、此の識りなきにあらざりしも、新約聖書には適用し難し。此の宗教とは、徹頭徹尾神中心なり。使徒等が宗教に於ける中心的地位を、耶蘇に與へんと欲して止む能はざりし衝動こそ、彼等の爲めに、耶蘇が最高の神以下のものにてあり得ざることの、最後の倫理的證明にてありき。赦罪の源として、新生命の附與者として、神の現在を傳達する媒介とし、手段として、彼は一段高き世界の力を彼等に與へたり。若し神に關する傳承的觀念が、耶蘇の人格の創造的にして、無比なる內容を容るゝ餘地なしとせば、更に之を深くし、且つ廣くせられざるべからず。父を知らしめたる彼は、父の生命より出でざるべからずといふことは、少くとも確實なり。

さらば我等の宗教の原始的文書は、神を信ずる如く、耶蘇を信ずることを、明に基督教的のことなりとして示せり。然のみならず、新約聖書の著者は、此の信仰態度に、殆ど排他的ともいふべき重味を置く、事實の意義を看過すべからず。此の事に就ては、リッチルの書中に妙味ある一節あり。此は他の點より見ても興味あるものなるが、又たまゝ〳〵人の惑ひ易き困難を解釋する所少からず。リッチルの觀察する所によれば、基督は愛せよとの新しき誡を與へたるに係はらず、新約聖書に於ては、基督に對する愛の觀念を擧ぐることを極めて節約せり。リッチルは、此の制限に、相當の道理あるを切言して曰く、『基督に對する愛は基督を信ずる信仰といふよりも、普通の觀念としては稍明確ならず。基督に對する愛と云ふのみにては、我等が基督と同一水平に立つか、或は基督に服從するかを定むる所なし。

然るに、基督を信ずる信仰といへば、彼の神性と、我等を支配する權威あることとの告白を含み、自ら彼と同等たり得べき筈なし』。彼は又た加へて曰く、『宗教改革者をして、基督に於ける信仰の觀念を細論せしめし目的は、明に此處にあり。基督神の地位を占むるとすれば、基督を信ずることは必然に從順の一種なり』（『義待と和合』英譯五九三頁）。宗教的、實驗的、直接なる使徒的の見地は、『基督を信ずる信仰は彼の神たる告白を包含す』といふ言葉、最も善く、之を言ひ現せり。此の調子は、基督教使命の全體を一貫し、隱約ながらも頑强なりき。我等の靈魂は、我等を救ひたる耶蘇の前に出づれば、直覺的に跪かざるを得ず。此の服從の行爲の中に、彼の神性は我等の身に沁みて感ぜらる。此は推論の事柄にあらずして、直覺の事柄なり。此の間に論理的結論の過程を經しにあらず、我等の目開けて仰ぎ見たる基督は、之を神なりと告白せずして、表明する能はず。斯かる經驗は、初代の弟子の軌範的實驗と密に平行せることは、新約聖書が優に證明する所なり。彼等は基督より受けたる感化の中に、恩寵を以て近き來る、神の働を悟りたることを見る。彼等は神の傍に基督を置き、次に神は耶蘇の如くあらざるべからざることを論じ、三段論定によりて、人間的の外見より、神的の實相に移りたるにあらず。事は一層直接にして、且つ死活的、又た個人的なりしなり。耶蘇の力は彼等を壓して來り、彼等を引き上げて、最高なるものとの交通に上らしめ、一切罪の束縛を破りたり。故に彼等は信仰に於ける最高の地位を基督に與へ、神自身現在せりとの保證とし、又た神現在せると等しと、解せずして止む能はざ

りき。萬事は耶蘇が彼等の心に觸れたる、活ける接觸より生じたり。あらゆる教理は、神自ら人間生活に於て罪人に向ひ、彼の心を彼等に開きたり、との告白に外ならざりき。固より彼等は一躍して、此の眞理に達せるにあらず。ケエルンス教授の記せし如く、『弟子にとりて耶蘇は初め恐くはたゞ人にてありしならん。されど彼に關する知識廣くなり、深くなり、又た明になるに從ひて、彼を理解せんとする努力、彼に關する思想の統一に達せんとする努力は、彼に關する結論に達せしめ、此の結論は、恐と、驚と、然かも喜びを以て、彼等の靈を震動せしめたり。彼等は彼に於て一種秘密にして、超越的なるものゝ存するを感じたり。此の或物が、人間の品性の輪廓に於けるや、恰も思想の言語に於けるが如し。耶蘇の背後に又た彼を經て、彼等は神を見出せり、此の異象(ヴィジョン)こそ、彼等の晩年の作に不思議なる感激と光輝とを生ぜしめたる所以のものなり(『現代世界に於ける基督教』一五五頁)。

認識の徐ろに明け初めたるその實驗に於て、最初の弟子等は、確に現代に於ける多くの人の先驅者又た模範にてありき。實に又た現代の研究者の占むる地位は、不思議にも、彼等の地位に似たるものあり。勿論彼等は基督の人格てふ主體に就て、權威ある傳說に對せしにあらず。教理は彼等之を立てざるを得ず。其の主體となるべきものは、偏に靈的印象の力によりて、信仰の堂に入り來らざるを得ず。此の印象は、たゞ徐々として働き得たるなり。而して之によりて造られたる信仰は、一個の神學を包含すれども、其は尙ほ溶解上の神學にして、既に一定の形式となれる教理の中に沈澱したるものにあらず。又今日多くの人にとりても、基督に關する傳說は、實際存在せざるに同じと云ひ得べし。此の傳說が彼等の承諾を要むる爲めに提示されし場合、少くとも彼等の心が之を受け容れ、且つ捕へ得るものとして存在を有せず。尊敬の念と、又た公平の感とを求むる心よりして、彼等が眞實と認むる、確乎たる基礎を有せざる理論に、贊成を辭ましむ。斯くて彼等は、新鮮にして偏見なき心を以て、耶蘇の前に出づ。彼等は『濁らざる眼』を回復したり。彼等は鮮明にして、根本的なる印象を得るなり。教會には兎もあれ、彼等よりいへば兎に角、耶蘇に關する眞理は、盡く基礎より築きあげられざるべからず。然るに耶蘇が是等の人々の心を支配し、尊敬、嘆美、服從を以て彼の前に伏し、遂に謙りたる信賴と、崇拜を捧ぐるに至らしめたる光景を見て　耶蘇に最高の地位を與ふる我等の信仰は、動し難き實在の上に立てることを見出すべく、又た何時までも見出すべきことを益々新しく證明するものなり(三)。

或人は答へて云はん、信仰は多くの成熟の程度を有する故に、基督教意識に於て、耶蘇に與へられたる地位を充分に論ぜんとする時には、此の事を忘るべきにあらずと。此の注意は、我等が甘受する所なり。人が基督に與ふる地位は、基督が其の人を感化して得たる人格的優越性と、その人が罪人として基督に負へりと感ずる義務心の程度によりて、おのづから決せらるゝものなれば、此の境に於ては、明かに樣々なる、細微なる程度は、常に是あらん。或人は耶蘇の前に出でゝ生活が更に高尙に、更に淸らかに、又た更に深くなりたり、との朧なる感情を有するに過ぎざるべく、他の人は彼こそ思想と

行爲との正しき主なりと感ずべく、或人は神の父なることが、基督によりて、一層現實に且つ的確にせられたりと感ずべく、或は又た進んでは、基督を無視したる世界に於ける生活は、堪え難しと感ずるものもあらん。是等も亦た信仰の萠え出る形にして、如何に基督者の心が基督的となるかを知らんと願ふ人は無視すべくもあらず。されど是等は未だ信仰の本色、原型とはいひ難し。是等は全く自己を抛ちて、最善、最高の性質を嚴かに基督に捧げ、彼を活き且つ現在して、人を救ふべき神力を有せるものと、認むる態度とは等しからず。されば教理の成長する沃土として信仰を分解する際には、我等は最も特色あり、其の之を構成せる性質も、內容も、最も善く發揮せられたる形を選ぶべきや明かなり。我等は冷靜なる知識的批評にとり、或は歷史家の想像力ある同情にとり、或は誠實、熱心なる向上的運動にとりて、基督は何人たるかを問ふにあらず、却りて彼を以て神の聖と愛とを體現せるものとして、其の恩寵の深みに身を投ずる完全なる信仰にとりて、基督は何者なるかを問ふべきなり。

耶蘇は信仰の主體又た模範にして、嚴密なる意味に於て、信仰の適當なる對象たるべきものにあらずと、頑然固執するものあるは、畢竟信仰を最高の段階に於て見ずして、其の低級なるものに就て見るの誤りに因由するが如し。此の如き見解は、古來教會に於て、全く其の例を見ざるにはあらざりしも、今や强く又廣く主張せらるゝに至れり。其の人々の說によれば、耶蘇は信仰の何ものたるかを、我等に示せり。彼は自ら、『己を信ぜよ』との要求をなさゞりき。彼は自己より更に高き理想を宣傳する豫言者にてありき。此の以外の思想は、在來の傳說に寬大なるより生ずるものにして、恕すべき所あれども、人を誤るものなり。基督に附するに、絕對的なる宗敎的意義を以てする謬見は、實に近世に始りしものにあらず。新約聖書の時代に於て旣に一步誤りたる道に入れり。アルバアト・レヴィユ曰く、『弟子等は、耶蘇が敎へ、又た實例を示したる純粹の宗敎と、彼の人格を信ずる信仰との間の區別、即ち基督自身維持したる、其の區別を忘れたり。耶蘇が意識に示したる、宗敎的現實にあらずして、耶蘇自身が、宗敎的信仰の對象となるに至れり』。此の如く根本的にして、不幸なる變化を生ぜしめたる責は、主として使徒パウロの負ふべきものなり。『パウロは耶蘇の人格を以て信仰の對象となし、之に絕對にして、獨占的の重要なる地位を與へしが故に、爾來基督敎は、耶蘇基督の信仰として傳はらずして、却りて明に耶蘇基督を信ずる信仰となりて存せり』（『耶蘇基督の神性の敎義の歷史』二九四〇頁）。爾來敎會はパウロの誤謬を不朽ならしめたり。近來に於て、此の廣き見解が次第に自信を得來りたる結果として、或方面に於て、敎會は遲蒔ながら『基督の福音』より、一層純粹にして、原始的なる『耶蘇の宗敎』に歸り、超越的救主として神の子を信ずる信仰より、耶蘇の有せし宗敎的信念に歸るべしと、熱心に說き勸めらる。[四] 是れ果して我等の應呼し得べき訴なるか。

此の如き心的態度は、明に第十八世紀の理想と、多く一致するものたるを示せり。當時行はれたる唯理論は、神との交通をさまで重要なるものと見ず、隨ふて救拯は神が第一步を着くるが故に、現實なり

との重要なる眞理は、否定せられざるも、敬遠主義を執りて、之を閑却し去りたり。最も高き地位に擧げられしは、人の尊嚴にして、人自ら己を引き擧げて神に近き、自ら修養して圓滿完備の域に達し得べき、固有の能力を具へたるものと感ぜられたり。此の如き目論見を鼓吹する爲めに必要なるは、救濟者にあらずして、餘りに高きに過ぎざる模範、又た先進者にてありき。言ふまでもなく、此の種類の宗教的零圍氣に於ては、人てふ思想か、神てふ思想に勝てるが故に、耶蘇を信仰の對象とする問題は、其興味を失ひたり。彼に負へりとの感覺は失はれて、彼はたゞ儕輩中の第一流たるに過ぎざるものとなりき。此は十八世紀の思潮なるが、今や復た、同一假定は、廣く流行するに至れり。諸宗教の比較的研究、或は少なくも其の研究の爲めに必要と思はれたる原理は、基督教意識の中心より一部分耶蘇を移し去るを至當とするものと考へられたり。

此の種の論者は說いて曰く、『歷史は絕對的人格を容るゝ餘地を有せず。されど人若し宗教的意義に耶蘇を信ぜんと欲せば、耶蘇は此の如き絕對的人格にてあらざるべからず。過去の現象は、精々の所、相對的なるに過ぎず。各事實、各過程は、原因、結果の亂れざる連鎖の中に、正確に一定の地位を有す。此の連鎖に於て占むる地位が、其物を今あるものとならしむるなり。此の哲學を懷いて、耶蘇基督に對する時、專斷にあらで、主義の上より、彼の人格の無比を蔑視せんとする、强き誘惑を感ぜざるを得ず。彼を正當なる事件の發展に於て占むる地位に据え、斯くして、彼と他の人の子との間に、越え難き懸隔ありなどといふ感情的の談論を擯斥すべき筈なり。各々の事實は、それ〳〵その境遇の作り出すものにして、相對的なり、又た相對的なる外なし。故に基督に關する事實も亦た相對的にして、宗教的の心に對して、無二にして、缺くべからざる意義を有せず。彼の生活の靈的內容と、使徒の信仰に留めたる印象とは、世界にとりて、究極的に重要なるものにてあるべからず。疑ふまでもなく、其の價値は、萬物のよりて以て存する所の權力の指針（インデックス）として偉大なり。大なる實體の啓示せらるゝ、數限りなき現象中には、卓越したるものにてあり得べし。但た之を絕對と思ひ得るは、不用意の瞬間に於てのみあるを得べし。絕對的事實を容るゝ餘地は、この如き世界の中に存せざるなり。リッチルすらも、使徒の基督觀を以て永久に規範的なるものとせんと努力したる時、既に埒外に逸したりき。現代人の心が主張し、又た要求するものは、使徒の宗教にあらで、使徒の仕へたる師の個人的宗教なり。彼は實に最初の基督者にして、我等は彼の先導したる道に追隨することに於て基督者なり。

之に對して我等は先づ答へ得べし。此の議論全體の基く所は、歷史的過程なるものは、機械的に齊一（ユニフォーム）なりとの觀念にして、此の觀念を暗默の中に假定すれども、確たる證據を以て之を立てしにあらず。信仰を要求し又た之を受くるに價する超越的人格の出現は、歷史の『法則』と兩立し難きものとして、初より眼中に置かず。此の題目たるや、なか〳〵複雜にして、爰に細論する能はざれども、少くとも、一言すべきことは、斯る急進的神學者の採用せる方針は、事實の媒介を經て與へられ得る新し

き啓示は、何によらず之を受け容ると云ふにあらで、寧ろ人性及び其の經驗の到るべき結論を、豫め限定するものなり。されど若し超越的人格が出現することありとせば、彼が爾か認めらるゝことは必要なり。一定の標準に合はざる結果は、之を受くる能はずとの默認を持ちて、人々が此の高大なる問題に接するは、是れ即ち先天的教義に囚はれて無能となるものにして、たゞに非正統的なるのみならず、又た有害たらずんばあらず。前以てどれだけのことを信じ得るかといふことを示さるゝは、常に人を阻喪せしむるものにして、剩さへ斯る隱約的態度は、基督教に於ける最大事を取扱ふに當り、之れに必要なる同情と、理解とを以てなすべしとの希望を起さしむるものにあらず。さはれ神の唯一子として基督を信ずる歴史的信仰は、人性の慰安と更新とに於て、効果を擧ぐるものとなりたり。果して然りとせば、此は、又た其の背後に、斯る長久なる記録を留めざる學說の手に渡りても、相當に謹嚴なる待遇を要求する理由あるなり。

又た玆に注意すべきことは、所謂『耶蘇の宗教』を主張する人々が、齊一と相對との根本主義を用ひて、彼の無二なる卓越を否認しながら、尙ほ是等の主義とは、同樣に兩立し難き、他の重要なる眞理を肯定せること是なり。一例を擧げて、此の事を明にせん。宗教は神との交通と定義し得べきものなるが、此の交通は、祈禱なき所に實在を有せず。扨今、我等の批評しつゝある著者等の見解によれば、耶蘇は最早超自然的の人格にあらず。超自然といふ如きことは、總て排斥せられたり。然るに彼等が忠實に執着する如く、宗教の活ける呼吸ともいふべき、祈禱てふことは、全く超自然のことたるや明がにして、宇宙は機械的因果律の組織にして、破り難きものなりとする一元的宇宙觀念を破壞するものなり。語を換へて言へば、若し世界が豫め定められたる方法によりて働き、又た反動する勢力、即ち嚴密に決定せられたる勢力の連結して成るものならば、祈禱は何等の意義を有せず。我等が祈る時に、暗默の中、我等の信仰を宣言す。即ち宇宙的勢力の網細工は、畢竟愛ある意志の器にして、此の意志は宇宙的勢力によりて拘束せられず、又た其の勢力の効果盡きたるにあらず。主權的にして且つ恩惠的なる目的の爲めに、之を利用することを得べきものなるを宣言するなり。信仰深き人の心は、現實が超越的の要素を含むことを假定し、我等が祈る時、神は自由に我等と交通し、又た我等を導きて彼と交通せしむ。宇宙は創造的、獨創的の事件の存立するを許すが如き筋合に造られたるなり（ヴェンドランドの『希蹟と基督教』第七章）。故に實驗として祈禱の光に照して見れば、不變にして且つ破り難き世界の過程なるものありて、總てのものを齊一なる相對の同一水平に均らせるとなし、就中罪人の信じ得る、新しく且つ無限にして、先例なき人格を賜ふことを除外せる、世界的過程を語ることは無益なり。此の如きは誤りたる概念にして、人格的宗教は之と和合し得ず。されど眞實の祈禱のあり得べき宇宙は、優に超越的救主を容るべき餘地を有せり。

尙ほ又た此の一群の思想家の信條に於ても、罪の赦してふことは、中心的地位を有す。神が罪人を

受くることは、彼等の疑はざる所にして、斯くも熱烈にして、人を動かす刺戟力を以て語ること、此の題目の如きはあらず。ブーセは曰く、『我等は罪を赦す神として神を受け、且つ考ふる時に、此れこそ神に對する我等の信仰に於て、最高究極の點なることを認むるに躊躇すべからず』（『プロテスタントの信仰』一〇一頁）。福音を急進的に觀る、此の見解に含れたる要素に就て、二個の觀察をなし得べし。

先づ、赦してふことも、超越的なる超自然の現實なり。之を成就するものは、超越的の神なり。自然も、人間も、之に當るに足らず。赦されたる人の靈魂に起る變化は、その人の能く知る如くに、內在せる心理的勢力の働のみによりては、說明し難きものなり。罪は我等のものにして、又た永久我等のものたるべしと脅しつゝ、我等に附き纏ふものなるに、其の罪の重荷が取り去られて、我等は天父の胸に愛を以て引き歸さる。永久に我等の前に鎖されたりと見えし、義の門こゝに再び開かる。赦すものは神にして、神の外何人も赦すこと能はず。此の創造的の業に於て、神が、その前より我等を驅逐せんとする罪の力を除き去るに當り、現象的實在の順當なる過程は、其の働の器となり得べくも、其の以上のものたるを得ず。此の如き働のうちには、たゞ變らざる連續の宇宙的關係よりも、限りなく勝れるものを含むなり。神自身は直接なる（媒介なきに非ず）道に於て、人の生活に入り、神と其の生命とが、今後相互に連り得る、新しき關係を始む。神が其の至高の愛を以て、我等に與ふる赦は、科學と歷史とが、我等を閉ぢ込むる惡の必然と運命とより救ひ出すことなり。此は我等が眞に人格となる經驗なり。物に非ず、又た鎖の一環にあらず、自由なる人となる經驗なり。疑もなく、今日の人は、眞面目に赦の可能を疑ふ方に誘はれんとす。殊に、現代人の心を襲ふ憂鬱なる自然主義的厭世觀は、罪人に向つて、出來得るだけ、ストイックの如く、默して勇しく、其の運命を堪へ忍べと敎ふるが爲め、其の感化を受けたる人は、別けても然るなり。然れども無數の人の生活に於て、是等の疑念は、耶蘇基督の前に出る時消散せり。定命論者の論理は如何にあるとも、事實之よりも更に强きことを證明せり。眞に赦を實驗したる人は、宇宙的法則の中に、又た其の上に天父あり、我等は聲なき非人格的傾向に對するにあらず、活ける神、即ちその手を延べて我等を迎へ、我等の手を握り、赦によりて、新しき善の世界に我等を導く所の神自身に對することを知る。されば、此處に亦た實驗せる最深の事實は、器械的に定められたる法則の組織の觀念をば、『科學的に有用なる假定』として用ゐらるゝ時の外棄てざるを得ざらしむ。祈の場合に於ても然りし如く、赦に於ても、我等は勢力の働きのみに限りたる、一個の圓圈として解釋し難き宇宙、即ちその變化は總て充分有力なる心によりて預め籌算され得べき宇宙に接觸することを見出すなり。此の宇宙は、一見鐵の如き齊一と見ゆるも、是は寧ろ全體の一斷片に過ぎず。神は自由なる靈にして、機械的の嚴正を以て働く、一切有限の勢力を超越する事件を生ぜしめ、抑へ充たしたる自己の神的活動を現象世界に放ち得る靈なり。現實は豐富にして、彈力に富み、想像し難きほどの潛勢力に充てり。又よく新機軸を容るゝに堪へ、之に對する神の優先

的行爲は、實際に起れる初めての事件として、其の運動に影響す。果して然りとせば、是が我等の議論に關係する所は明なり。歴史が、創始的にして、比類なき事件の生ずる舞臺なりとして、人が動物に勝る如く、遙に通常人に勝れる超自然的救主の姿を現し得ることは不可能なり、と斷言すべき先天的の根據あらざることを含めり。實際此の如き人格が存在するや否は、結局心靈的確信によりて決せらるべき問題にして、哲學的理論の考察によるべきものにあらず。彼果して現實に存し、神彼に於て、我等に觸れ、彼自身と交通せしむることを知るならば、基督はこれによりて正確なる意義に於ける宗教的信仰の對象とせられしなり。蓋は基督を『信』ずといふは、是れ單に我等が彼に於て神を見出すことを告白することなればなり。

しかのみならず、今批評しつゝある意味の『耶蘇の宗教』は、天父と曇りなき交通を說く宗教なり。されど、若し此の交通關係は、耶蘇を媒として生じたりとの豫想を取り去るならば、罪ある人は如何にして之に達し得べきかは、此の上もなく重大なる問題となる。[四] 我等は耶蘇の曇りなき子たる意識を、容易に授り得べきにあらずやなどゝいふは、言語を弄するに過ぎず。如何にして我等は自分の爲に彼の如く、神と一なるを感ずるを得べきや。如何にして我等は彼の如く、『父は我等に萬物を與へ賜へり』と云ふを得んや。是れ不可能のことなり。此の點に於ける混雜は、蓋し宗教的の人は、神との契合に達せんとして、望みこがる、てふ事實を誤解したるによるならん。彼の最も深き渴望は曇りなき子たる生活を得んとするにあり。併しながら、慕ふことは必ずしも有することにあらざるや明なり。願望のみにては、完全にして、確實なる成就に屆くこと能はず、事實に忠實なる以上、我等は耶蘇の子たる意識と、我等の子たる意識との間に、型の相違あることを認めざるを得ず。

我等の召されしは耶蘇を信ぜよとにあらで、耶蘇の有したる信仰に與るべしとの要求なりと云ふならば、我等の答は是なり。此は我等自身滿足し得ざる要求なりと。其の見地は宗教的たるよりも、寧ろ感情的なり。感情主義は飽迄活ける事實に目を閉づる氣分なり。茲に活ける事實の、爭ひ難きものあり。其の一をいへば、耶蘇と神との交通は、彼の心にのみ藏めたる祕密なりき。たゞ此の祕密を外に現したるだけにても、到底我等の模倣し難きものたるを見る。彼と父との關係は、直接にてありき。我等と神との關係は、彼が教へし如く、たゞ彼により、又た彼に於てあることを得るなり。且つ我等は罪の意識あるが爲めに、神に近くに當り、自己以外に、信賴すべき基礎を得んと欲するや切なり。我等若し罪なきものならんには、基督を信ずるにあらず、基督の如く信ぜよと勸むる、現代の意見に、多少の道理あるべくも、他の事は暫く措き、たゞ罪ありてふ一の性質が、宗教的に彼より獨立し、彼と併行し得べしとの假定を受くる能はざらしむ。此の故障は、我々の側よりしては、到底越え難きものにして、究極的なり。我等若し其の奥の院に達せんとせば、彼自ら父と完全にして亂れざる一致を有する者、愛を以て父の目的を罪ある世界に示し、且つ印する者によりて、導かれざるべから

ず。その神を現すや、我等の恐怖を歡喜なる信頼に代ふべきほどに、之を信じ得べく、又た知り得べきものとして示すことを必要なりとす。我等は我等の上に內的壓迫を加へ來り、神の救近しとの確證を道德的經驗に於て與ふるが如き程の啓示的事實を要す、これたゞ一の人格的生命にてあり得べきものなり。古今の人耶蘇に於て之を發見したればこそ、人によりて理解さるべき神として、彼を信じたる也。

『耶蘇の宗敎』が、基督敎の眞髓を代表せりとの意見は、是れ一個の印象派的なる、皮相の誤なりとして、棄て去ることを得るなり。信仰に要する所のものは、單に敎訓するのみならで、救ふものたるべきに、論者は此の點に就て極めて不充分なる觀念をその根抵に有せり、これ歷史的にも根抵なき思想なり。基督敎は、基督なる耶蘇を信ずる信仰として、歷史に現れ來りしことは、今日如何なる型の學者も、等しく認むる所の事實なり。今日我等が基督敎的敬虔と唱ふるものは、其の初め、耶蘇の心の特色として世界に現れしにあらず、彼の弟子の明白なる宗敎的態度として現はれしなり。彼は實に、信仰と活ける又た缺き難き關係を有したるが、其の關係の性質如何に就ては異論あるべしと思はれず。彼は信仰の創造者にして、其の說明者にてはあらざりき。彼は信仰を喚起したり。されど信仰の中、自ら罪を悔い、自ら棄つるてふ特別の性質を、身を以て證明せざりき。又た彼は弟子の心に、自ら有すると同じき子たる意識を、其のまゝに再現せしめんと勉めざりき。彼等は、耶蘇が特獨の子たる意味に於て、子にてある能はざりき。『子及び子の顯はすものゝ外に父を知る者なし』てふ言葉にしても、一度語られて、再び繰り返へさるゝ能はず。如何なる豫言者、使徒も、之を其の唇に上さんとせざりき。歷史旣にこの現代的假說を非認せりとせば、宗敎にとりては、尙ほ更に薄弱なり。此は罪ある人にとりては有るべからざる福音なり。耶蘇がなせし如く神に近づくこと、即ち彼の如く直接に且つ落着きたる感情を以て、然かも彼の媒を經ずして之をなすは、到底我等の力に及ばざる企圖なり。若し福音が耶蘇のそれの如き信仰を求むるものとなるならば、それは如何で新ユダヤ敎と異なる所あらんや。それは最早大なる神の賜物にあらずして、弱きと絕望とに沈みたる人の手の上に、更に重荷を增し加ふることなり。此の如き事業に着手せよと招くは、苟くも活ける良心を有し、耶蘇の前に於て自ら評價せざるを得ざる、其の評價を無視するを好まざる人をば、暗黑に沈むることなくなるなり。我等が此の望なき境遇より脫するを得るは、我等の目開いて耶蘇を受け、之れに賴りて救を得べきものなる彼を仰ぎ見る時のみなり。彼は神の啓示なり。ヘルマンのいへる如く、『あらゆる疑惑に勝つ啓示なり。一個の人格的生命に接せんとするの渴望、則ち我等とそれとの間を隔つる、すべてのものを融かして純然たる信賴となし、我等の心靈に故鄕を與ふる一個の人格的生命に接せんとする渴望は、是れ即ち活ける神を得んとする渴望なり。耶蘇を思へば、暗黑の淵に陷る恐を取り去られ、惡しき良心の混亂、疑惑より救はる瞬間に於て、我等は此の渴望が耶蘇によりて滿足せらるゝを見出すなり』（『神との交通』英譯一四一、二頁）。

註(一)　ハルナックは公言して『耶蘇の宣傳したる福音は、ただ父にのみ關係し子に關せず』と云へり。『基督教の眞髓』(英譯『基督教とは何ぞ　四四頁)。然れども彼は他の側面を敍べにも、寡しく力を用ひたり。彼は曰へ、『福音は信仰を以て基督の人格に自身を與ふるものにて、之を捉へ又固守することを得。神に對する關係は、皆同時に耶蘇基督との關係なり』。『教義史』英譯第三卷六九頁以下)。此の二の立場は、果して兩立し得べきか、これ別問題に屬す。

(二)　新約聖書に於ては、二重なる信仰の對象あらず。耶蘇は其父と並び立てる者、或は之に代るものなりとの觀念は、新宗教の內部的團結力の爲にも、又多神教と戰ふ爲にも、不利なりしならん。然るに第二世紀の半に至り、耶蘇を第二の神として、父の傍に置くやうなる、不用意なる言語、通俗に用ひらるるやうになり、アノテシス派の內にては、是の如き傾向が、放膽なる形式にて背景したり。新約聖書との此對照は教訓と成るべし。

(三)　基督教の意味に於ける信仰は、唯だ徒に價値を認め、或は上より輕々しく我等に與へられたるものとして、之を感覺的に認識する意味のものにあらずして、却りて一切の力の信れる者が、我等に强ひて得たるものにして、我等の力之に抗拒し難き底のものなりとの、ことを絕えず注意するの必要あり。耶蘇の人格は、完全に我等を支配することを經驗し、此の經驗我等の生活を貫通す。我等は最り難き靈的勢力の掌中にあるを感ず。言ひ換ふれば、信仰は服從なり、降服なり、從順なり。時に於て躊躇せる態度として見れば、忠義心なり。基督に捧げたる是の如き信仰が、自然の傾向と相反せることは驚くべく、又意味深き事實なり。我等の最初の衝動は、服從するにあらず、基督の現在によりて、我等の罪に加へられたる宣告に銳く反抗し、彼は我等よりも高しとの思想を、忌まゝしとして拒絕せんとす。且つ信仰は倫理的なり、『神の賜もの』なれども、人格の强大なる感化と、彼の傳ふる眞理の響とを通じて來る。此の全題目については、ヘルマンの貴重なる書『神との交通』を參照せよ。

(四)　近頃淡泊に此の見解を發表せしものは、『歷史及び現在に於ける宗教』(Die Religion in Geschichte und Gegenwart)第三卷三七五頁以下に收めたる、ハイトミッヤルの『耶蘇基督』に在り。其の極端なる形は、ヒイ、ダブル、シュミイデルが、『耶蘇曾て存在せざりし事が、證明せられたりとも、己が宗教的生活には、格別重大なる損失なからん』と云へるは、解し難き斷言なり(『現代の思想と照らす耶蘇の人格』一九〇六年)。

(五)　ダアイキルの議論によれば、耶蘇は自ら仲保者の職務を果せるものと思はざりき、そは彼は仲保者を要せざりしことを知れば なり(『第十九世紀に於ける耶蘇』二九四頁以下)。基督に關するトレルチの同一の見解を簡短に記述せるものは『自由基督教第五世界大會講演書』三七頁以下』を見るべし。

本章に關する參考書。

デニイ『耶蘇と福音』(一九〇八年)。
Denney, Jesus and the Gosqel.

ヘルマン『神との交通』(一九〇六年)。
Herrmann, Commnnion with God.

ホッグ『神の國に關する基督の使命』(一九一一年)。
Hogg, Christ's Message of the Kingdom

ヴアン・ダイク『疑惑の時代に對する福音』(一八九六年)。
Van Dyke, The Gospel for an age of Doubt·

カヒレル『應用したる教義』(一九〇八年)。
Kähler, Angewandten Dogmen

ハルナック『基督教の眞髓』(一九〇一年)
Harnack, What is Christianity. (譯者曰へ、和田熊藤氏の譯あり)。

アダムス・ブラウン『基督教教義』(一九〇六年)。

Adams Brown, Christian Theology in Outline（譯者曰く、ギユリツキ、今泉眞幸二氏の譯あり）。
ブツセ『耶蘇』（一九〇六年）。
Bousset, Jesus
フオーレスト『基督の權威』（一九〇六年）。
Forrest, The Authority of Christ.
オール『基督教神觀及世界觀』（一八九三年）。
Orr, Christian View of God and the world.（田中達氏の譯あり）。
ゼエベルヒ『基督教の根本眞理』（一九〇三年）。
Seeberg, Grundwahrheiten der christlichen Religion,

第五章　昇天せる主

前章に於て、我等は基督に關する信仰の直接の表白を稍や細に點檢し初め、彼自身、信賴して救を得る對象なりとの根本的確信を見たり。父として神を信ずる信仰は、子として基督を會得する信仰に堅く根を下せり。今や一層精細に此の結果を說明するを要す。斯く會得したる基督は、實に超越的なる昇天せる主たるなり。

新約聖書の中に於て、本來信仰の對象たるものは、歷史的基督にあらで、活きて祝福し支配する主なりとの結論は、種々なる點より我等に强請せられたり。固より此の成熟したる信仰は、一躍して之に達すること能はず。之に導く豫備的の階段あれども、それ等は要するに、たゞ一時的、序論的なるに過ぎず。弟子の信仰は、使徒の信仰と異なる所多し。十字架以前の耶蘇に隨ひし人々の態度は、革新的意義を有せるに係らず、未だ基督者が其の主に對する特別なる態度とは同じからざりき。新しき紀元は、復活とともに開かれたり。復活せる基督は、確かに前の如き同一人格なり。然らざれば、使徒の福音は、歷史上何の支持點なきものとなり、剴切の力なきものとならん、何となれば、何人も偉大なる『不可識者』を說教し、或は一の公式に忠義を盡すべしと說き得ざればなり。之と同時に、基督は今舊き記述の言葉が不十分となれるほど新しくして一切を變ずる光の裡に置かれて觀らる。此の『悲

みの人』はあらゆる名に勝る名を有す。彼は最初にして又最後なり。神の充ち足れる德は、彼に宿れり。斯く云ふは、彼が『彼に接して善くなりし人の生活なり』離れずして、死後なほ聖者の感化を有する意味にあらず。復活の力は、現在して且つ普遍なる活動力として、人の之に賴り、之に祈る現實として啓示せられる。彼は心靈の裡に神的生命を附與し、且つ之を維持す。教理に同意するにあらで、彼と契合すること、これ贖ひなり。新約聖書に現はれたる、基督に對する基督者特有の態度は、是の如きものなり。苟くも此の記錄に價値なしとせずば、そは復活せる主の顯現と、之に續いて生じたる聖靈の表現とによりて、信者の心に喚び起されたる一個の評價と行爲の方法とを表示す。

且つ此の態度は、教會に於て永續せられたり。正統主義に同情乏しきヴェントは云へり、『復活せりとして基督を信ずる信仰は、四個條の明なる命題を含めり、第一、彼が活くると云ふは、たゞ弟子の記憶に活くるにあらで、眞實に活くることなり。第二に、彼はたゞ結局的の要素に還元せる實體として存するにあらで、人格的に存することなり。第三に、彼は天に於て活けるにて、亡者の國に活けるにあらず。最後に、彼は祝福と力とを充分に具へて活けるなり』（『基督教教理系統』三九九頁）。其信仰ここに至らざる者にても、印象的なる宗教の型を有するものなきにあらず、然れども基督教特有の精神は、人類に對する使命を果し得て勝利を博せんが爲に、教會は慈愛あり、且つ全能にして永久なる主の現在に依ることを常に感じたり、信仰の對象は、現在此處に在らざるべからず。過去の事件は、傍觀者には多大の意味ありしものなるべきも、過ぎ去らざる現實、我等が直接に（媒介者はなきにあらずとするも）關係し得る現實にあらずんば、現代の人心に取りては、久しき前破產したる銀行の手形と一樣ならん。故に基督の連續せる現在を信ずる信仰は、議論を以て辨護し得べきも、議論の結果にあらず。そは基督教的心靈の本能にして、其の深さと澄明とに於て、屢々外界の現實を信ずる心と比すべきものなり。且つ是が幻象にありたることは、最も高尙なる品性を有せる人にもこれあり得べきことにより、又耶蘇の思想と約束とに調和せることによりても、之を證することを得べし。彼は死に就く前夜、弟子をして未來を望ましめたるが、其の未來は、廢頽貧弱の未來にあらずして、充分なる勝利の世なり、見えずと雖も彼現在して指揮するが故に勝を得らるべく、彼の生時よりも勝れる功業を成し得べし。福音書の著者が、歷史上の耶蘇の事を記述するに當り、知識と力とに制限ありしを錄して平然たる所以は、彼等が深く、地上の宣教は、終に世界的榮光と支配とに再現すべき行路の第一章なりとの事實を確認したればなり。其の結末を見れば、彼等は全く公平なりと見らるることを得べし。

基督との契合の觀念は、是等の印象を綜合して一となし、其の意義を明にす。此の觀念によれば、あらゆる信者は、生命の靈的親交によりて基督に連るものにして、其の結合たるや、儀式禮典の外的媒介を借らず、自己を捨てゝ活ける人格に信賴することによりて生ぜられ又た支へらる。此は孰も神學にあらずして、宗教なるが、時間、空間の制限以上に上りたる、救主の實在を含むものとして見るに

あらずば、何等の意義を有せず。人は曾てあり今あらざる生命と、此の如き親密なる一致をなす能はず。在らずなりし事實は、神との連鎖を作るを得ず。故に若し、基督論が基督教の確實性を其の儘に再現せんとせば、耶蘇を信ずる信仰は、活き且つ超越したる主として彼を信ずることなり、と定義を下さざるべからず。斯くして前章の結果を補足し得可し。

或人々にとりては、此は反動的に、且つ執拗に、正統的傳說を固守することゝ思はるゝならん。されど玆に傳說は、比較的僅かなる關係を有す。正統說なるものは、大部分たゞ專門的神學者の係はる問題にして、彼等を外にしては、正統說の何たるか、精密に知る人なし。されど普通の信者は、亦た一定の信仰を有す。此の信仰を最も簡單明瞭に言ひ現はしたるものは、最善の基督教の讃美歌に見るを得べし。『テ・デウム』の如き昔の讃美歌や、或は『我魂を愛する耶蘇よ』といへる如き近代の讃美歌に含れたる教理を解剖する勞を厭はざる人は、教會が基督の永久存在を斷定する源は、一に教理を尊敬するが爲めなりと思ふことの基礎なきことを知るならん。信仰の慕ふ所、又た確に之を有すと思ふ所は、人間生活の道を經來りて、今天に在りと雖も、信者の要求を思ひ得ざるにあらざる基督が、我等に與ふる光耀と指導と力と慰となり。基督教の歷史を作りたる男女は、昇天したる主は、超越世界にて有する無限の資力をば、最も微小なる聖徒の用に供し賜ふとの信仰により勵まされたり。彼若し同情を以て、彼等の苦痛を別つとせば、彼等は亦た神とともに活くる彼の生活の祝福に參與す。

最も自然に且つ最も明白に此の確信を示す徵候は、直接基督に祈禱を捧ぐることなり。初より『信者』といふと、『我等の主耶蘇基督の名を呼ぶ者』（哥前一の二）といふとは、同一義の語なりき。或は耶蘇の名に於て神に祈る祈禱、唯これのみが正當に基督者の祈なりとの理由を以て、此の習慣を嫌惡する人多し。されど新約聖書は、其の大主義に贊成すれども、彼等が推論して得たる結論を是認するとは思はれず。此の事に就て、使徒等は自ら制する所あり、且つ又心靈的思慮といふべきものを有したりしも、而も彼等が、基督に祈りしことと、また彼等が斯くする所以とは、基督が神よりも自に近く又た憐み深しと思ひしが爲めにあらずして、基督と神とは全然一なりしが故なることは、吾等の能く認め得る所なり。如何なる祈禱も、歸する所は、『父なる神の榮の爲めなり』。此の含意の如何に大切なるかは、ヘルマンが能く示したる所なり。彼は曰く、『基督に祈ることは、甚だ微妙（デリケート）なることにして、亂用せられ易し。之を用ふるは、特に信仰が熟し或は明になれる徵候なりといふにあらず。そは基督者が祈る時、耶蘇の人格と唯一の人格的の神との差別が無くなりし時に眞實となる祈禱なり。眞によく祈る者は、此の唯一の靈を離れては神なしと思はる、唯一の人格的の靈に、心の內より引き上げらるゝことにあらずば、之は基督者のことを意識せざるべからず。基督に祈ることが、此の神に引き上げらるゝことにあらずば、之は基督者の祈にあらず』[二]。即ち基督は我等を救はん爲めに來りたる神を信仰に示す。祈禱に於て彼に語ることは、知識を越ゆる愛と力とを以て我等に知らしめられたる者と、崇敬的信賴を以て交通することなり。最後

昇天せる主

の實在と接觸するは、信仰の本性なり。信仰にとりては、耶蘇も神も一にして分ち難きが故に、信仰の活ける表現たる祈禱は、單一にして分ち難き崇敬の行爲と活動との中に兩者を捉へざるべからず。

耶蘇に關する現代の文學に通ぜる人は、其の主要なる點に於て、以上說きし所と相反せる觀念を示すこと多きことを知らん。眞實の意味に於て、我等と神との關係は、基督によりて媒介せられたることを否定せされども、其の基督が人に及ぼしたる直接の感化は、死したる時に止みし基督なり。彼が數人の心に留めたる印象は、非常に深かりし故に、我等は傳說と制度とを經て、今尙ほ彼に觸れ得べく、彼の姿は今尙ほ無數の靈魂に刻まる。彼が活くるは、他の人の如く、彼が成就したる業に在りて活くるなり。彼は己が靈的生活の內容を人に附與したり。されど彼は、目に見えざる境界より我等に働きかくるにあらず。信仰の自然的詩に於ては、彼が然かなす如くいひ得べきも、そは詩なり、事實にあらず。我等は彼の言葉に籠れる精神を飲み、間接に彼の心と交通し得べきも、彼自身は既に世を去りたり。特に基督敎的なる生活を營む爲めに、是丈にて充分なる基礎を供し得べきか。

試に、耶蘇の直接なる感化は、十字架にて終りたり、との斷言を取らんに、是は何の意味なるぞ。其の意味は、少くとも彼に親炙せし弟子が受けし印象は、今日の人の受け得るよりも、一層深く且つ個人的强烈を有したりといふことゝなるなり。彼死するや、其の感化は減少して、又た償ふべからず。彼自身の思よりいへば、一度世を去りて、後ち靈となりて再び來り、其の直接なる個人的活動によりて人に觸れ、人を活す力を以て其の心を改造し得れば便利なりと思ひしこと、蓋し疑ふべくもあらず。されど是等の事に關して、記錄されたる彼の言葉は、熱心には相違なけれども、畢竟宗敎的創造より出でたる根據なき言葉なりとは、是れ論者の意見なり。此の如き議論に對して確答すべきことは、生命はたゞ活ける人格によりてのみ與へ得らるゝと云ふこと是なり。基督の言葉さへも、基督彼自身を離れては、人を一變する力なし。且つ又耶蘇が世を去りて、其の民と接觸し難きものとなれると知らば、基督を併びなく偉大なりと見る我等の印象は、一方ならず變ぜざるを得ず。彼にして若し他の人と同じく死の離別力を認めざるを得ずして、事業の將來をば、薄らぎ行く追懷の力にのみ托することゝならば、其の勝利は如何で覺束なく且つ部分的とならずして濟むべきぞ！公平に考へて、是だけにて基督が人を更生せしめ、變貌せしむる力を說明し得るか。先例なき度合を以て、今日世界に働きつゝあることは、獻身的なる宣敎使等の實驗する所なるが、其の道德的救濟力の有効なることは、此の如くにして說明し得らるべきか。新約聖書の著者が、耶蘇死して後、神の啓示の方法は、曾てありしと同じ本質を持續せりと我等に語る時、確に一層力あり。耶蘇は肉體にある時、己が人性を透して神を知らしめ、其の後神の啓示は人間的媒介と離れ難くなれり。此の同じ耶蘇は、彼

の感化の普遍的にせられたる世界に在りて父を示し、個人的印象の方法によりて更生せる生命を與ふ。我等は依然として、信仰によりて彼に結合し得べし。斯く見來れば、神の働は、各段連續の性質を有し、耶蘇の活ける人格は、終始一貫、基督教の最後の力なり。基督教が、彼との直接なる交通より切り離され、書籍或は傳說に保存せられたる、一片の敎訓が、現在せる主の生命を與ふる感化に代へらるる時、其の眞の內容も力も消散するものと知るべし。

然らば基督の連續的活動を信ずる信仰は、困難なるにせよ、之を否定することは、基督者にとりて一層重大なる困難に纏はるることとなるなり、神が基督の記憶を新鮮に且つ活潑に保ちたるのみならず、基督は擧げられて、主とせられ救主とせられたり。斯く見るにあらずんば、基督は彼の事業の將來に關しては、全く暗澹たらざるを得ず、何となれば、彼は世の終まで信者とともに現在すべきを豫期したればなり。此の目に見えざる交通の約束は、不變的に基督教の使命の一部分をなせり。聖徒の經驗に於て優に成就せられたる彼の此の豫想を誤れりとするは、之が考察を重ぬるに從ふて、益々信じ難くなるなり。誤謬は斯くまで豐富なる勝利の土壤たるを得ず。たゞ活ける者のみ勝ち得べし。此の世界の進路が、神の攝理に支配せらるゝことを否定する能はざる人は、神の力を以て敎へ且つ行ひたる彼が、死して沈默不動の狀態に入り、彼が地上に始めたる事業の進步に就て無關心ならずとしても、徒らに之を傍觀する者となりたることを證明するには、從來提出されたるよりも一層有力なる論據を要することを感ずるならん（『耶蘇の內的生活の研究』四五九頁）。

されば基督者の意識にとりては、耶蘇は常に現在し、又た全能なる者として崇めらるる者、新約聖書の意味深き語を用ふれば、『主』にてあるなり。彼はたゞ一時の挿話として、此の世界に入りしにあらず、其の超越性により、神と人との關係に於て、永久にして一切を定むる要素となれり。之を理解することは、即ち使徒が、『主』と呼ぶ時何を意味するかを根本的に知ることなり。使徒ペテロは、『汝等が十字架につけし此の耶蘇を立てゝ、神は主となし基督となし給へり』（使徒行傳二〇三六）と公言せしが、是れ明に彼を恩寵と自然界との領域に於て主たるを示せり。玆に注意すべきは、彼が先づ恩寵の世界の主たり、隨ふて又た自然界の主たることなり。眞理が信仰に傳達せられ、靈的の勢力を帶ぶるに至る正眞の順序は、此の如し。我等は先づ個人的なる人格的生活の範圍內に『主』として基督を認め、其の後此の第一着步の確信を擴めて、普遍絕對の領分に及ぼすなり。贖ひの目的の爲めにのみ用ひられたる、昇天せる基督の力と、神の形而上學的全能とを區別すべく企てられたれども、此の區別は、維持し難し。宇宙が既に一にして分ち難きものとせば、基督の支配權が、敎會のみを含みて、全宇宙に及ばずと見るは、徒らなり。此の如き勢力の分割は、考へ得べからず。其の支配する領分より實在の一片だに取り除くは、結局一種の二元論にして、信仰理性ともに之を容れ難からん。同時に彼の主宰權は、敎會を組織する信者が、彼の完全なる意志を意識し、之に反應する度に應じて特に敎會に及ぶものな

るが、彼の最高の目的は、彼等が彼の用を爲すことによりて實現せらるるなり。彼の目的は、唐突なる命令によりて行はるゝにあらで、救はれたる人によりて傳達せらる。

基督の復活は、此の主宰權が初めて有効にせられし點を劃せり。其の結果として、活動の範圍大に擴張せられたるが爲めに、基督は今、神自身との契合を意味せる救を人間生活に實現し得る力を有せる意味に於て、子は父と區別し難くなれり。傳說的神學は、基督の人格の成立に於ける一轉機(クライシス)として復活を見る、其の方面を消し去れり。此種の神學は、基督の人格には最初より神人兩性を相並べて完備したるものと觀たることを思へば、斯の如きは敢て怪しむに足らず。されど我等若し復活をば、基督の全發達に於ける最高段階となし、彼の靈的偉大と調和せる存在の形を彼に與へたる、其の過渡期を輕視するならば、新約聖書の思想に於ける特有の要素は失ふこととなるなり。一朝彼の生涯の全光景を離れて立つ時に、我等が今日崇むる如き者となり得る力を有したる彼は、地に於て住める中に、充分主として彼自身を顯現し得ざりしことを見るべし。彼が超越的の天地に上りしまでは、其の祕密を現すこと能はざりき。若し我等が、使徒的直覺の導きに任すとせば、彼は復活の後ち前よりは兎に角偉大なる者となれり。彼は人間の信仰に於て、新しき地位に立ちたり。人は今天父を崇むる如く、子を崇むるなり。此の如くにして、人間的にいふも、人となりしことは、何の益もなかりしにあらず。人の子に寄する神的同情の中に、地上の生活が貢獻したる深さと親みとあり、且つ父より來りたろ子が、永久の獲物を時の世界より取り歸ることは、基督者の思想の最も貴重なる確信の一なり。故に我等に流れ來る恩寵は、基督の經驗せし一切の事によりて富まされたり。神と人とは一なり、されど其の一致は、形式的に抽象的性質を並べたるより生ぜずして、互に持たれ結ばるゝ、靈的に貴き經驗より生ずるなり。今や此の人格に於て、人間生活の焦點が、存在の最後の實在と一に合して解くべからず。故に復活せる基督に於ては、人の心と神の心と一の脈膊を以て鼓動し、救はんとし且つ祝福せんとする一の分ち難き熱情を作る。

又た復活によりて、基督が榮に入りしことは、彼の地上の使命を結ぶ花々しき結論にあらず。之に反して、そは父の榮を充分に現はす一部分なり。さなくば、基督の傳達したる啓示は、無限の愛たりとも、之に勝り得ざる、神の與ふる恩寵の最後の言葉なることは、明にせらるゝ能はず。基督の意味は、完全なる愛として父を示すことなりしが、此の愛は、絶對的の威力と、又た人に訴ふる道德的の美と、二つながら現れ來るにあらずんば、完全と認めらるゝこと能はざることは、屢々看過されたる所なり。啓示者の經驗に全能なる愛が現されしにあらずんば、啓示の內容は、必ずや斷片的にして曖昧なるものとなりたるに相違なし。されば復活は、總ての實在の之に服從する絶對的の力として、且つ人の罪又た自然の獨立なる法則も打ち勝ち得ざる絶對的の力として、神の愛の表明を完成したるなり。たゞ同じ神的の愛が、罪ある人のために惱みたるを示す、十字架の事實あるによりて、半異教的に誤

解せらるゝ危險を脱す。耶蘇天に上りし時、そは恰も其の苦の結果と成績とを己の内に有することゝなれり。彼の光榮は、常に磔死者の光榮なり。此の正しき人の苦痛は、世界の明星とはなれり。

我等が語りたる總ての事は、耶蘇は主なり、との最初の基督教の信條の言語の中に含蓄せらる（コリント前十二〇三、ピリピ二〇十一）。此の大なる言葉を正しく讀んとせば、二度に之を讀むを要す、即ち一度は賓辭に重きを置き、次には主辭に重きを置きて讀むべし。耶蘇は主なり—彼は今神の榮光の中に活き、其の贖ひの愛に於て、能はざる所なく、在らざる所なし。されど此の主は、又た耶蘇なり——總ての事に於て、兄弟の如くせられ、遂に恥辱と苦悶と死との中に、自己を屈したる人の子なり。自己を棄てたる愛によりて、世界の王位に坐し、其の受難によりて王たる基督なり——使徒の信仰の精髄は、實に此處にあり。而して此信仰を有したる人々、或は寧ろ之に有せられたる人々が、其の喜ばしき希望と靜穩とに於て、新約聖書を世界の文學中の無比なるものとなしたることは驚くべきことなりや。

此の革新的信仰はまた、教會が今既に基督の主權を認るならば、他日萬人の之を認むるに至るべきことを含めり。彼は初めて世に現れし時に劣らず、驚くべき樣式を以て現るゝならん。彼の事業は、完成の域に達し、全く實を結ぶ時あるべしとの直覺的確信は、常に教會を刺戟して、其の主に適する觀念を構成せしむる主なる勢力にてありき。新約聖書の著者が、遙に眼を將來に着けし時、彼等は耶蘇基督が、歴史の最後の舞臺に於て、中央の位置を占め、而して彼の人格の偉大は、人を壓して默然たる畏怖に終らしむるにあらで、之によりて、彼等の想像は鋭くされ、其の理性は擴張され、其の明るき心は高められて、基督が神及び人に對する關係に關する、未だ曾て夢みられざりし、新しき思想を得るに至るべきを視たり。創造的なる宗教的經驗は、常に之を適當に言ひ現はすべき言語を供給するならん。

昇天したる基督が、其の弟子に對して有する關係を記述する爲めに、使徒時代の著者は、二つの觀念を用ひたり。此の觀念は、信仰の二個の重要なる利害を代表するものと感ぜられたり。此は靈を與ふる者、又た父に對する仲保者として基督を觀たるものなり。

余は思ふに、今日傳統的正統説を嚴守する者も、或は現代の自由なる新教主義（プロテスタンチズム）も、齊しく聖靈の觀念を適當に遇せず。一方に於ては、或教理的理論の體系を掲げて、之を信仰することに熱中する者あれば、他の一方に於ては、ナザレの大工、第一世紀の英雄的人物を我等に指定する者あり。孰にしても、現在せる主との交通を中心としたるものにあらず。是に於て新約聖書に於て、靈の觀念に附したる價値を思ふて、感一層深からざるを得ず。靈即ち基督自身と一なる靈が來りて、主の靈的現在を永久に傳へ、彼の事業の未だ終結せざる意義に光を投ずるにより、唯之によりて、吾等は生命なき教理にせよ、遠ざかり行く過去の歴史的に確められたる事件にせよ、非人格的にして、外部的なるものより

解放さるゝなり。我等はたゞ靈によりて、活ける基督と接觸するとを得べし。此の博大にして豐富なる觀念は、特に第四福音書の文中に示さるゝ所なり。

されど靈の來ることは、基督世にあらざる爲めに之を償ひ或は之に代ると考ふべきにあらで、此は耶基督蘇が現在せる高尚なる樣式なり。『我汝に來らん』といひ、『慰むる者來る時』といへる二語は、交互的に用ひらるゝ所なるが、之を止み難き困難と見る三一の敎理は、斯く見る限り、三神論の譏りを免れず。人の心に於ては、靈と基督との間に實驗的の差別あらず。一は他に對して方式なり。聖靈は新しく且つ一段高き啓示の時期を開き、以て歷史的基督を壓する如きことは、使徒の心に到底上り得ざりし觀念なり。スコットのいへる如く、『基督の心を宣明し、彼が地上の生活に於て成就したる事業を永く持續するは、是れ聖靈の職分なり……聖靈は新しき啓示の發する恒久の源なるが、此の新しき啓示は、旣に耶蘇の生活に於て附與せられし所のものをば、一層博大に且つ明瞭に開き示すのみなり。神と神の眞理とに關する我等の知識は、總て結局歷史的の顯現より得來るものにして、時代の移り變る每に、其の使命は異なれども、之を無用に歸せしむること能はず』(『第四福音書』三五一頁)。榮光に入りたる救主は、地上に往來したる耶蘇に外ならず。而して神の力新に加はり、博大なる天地の中に再現さるゝ事業も、畢竟耶蘇の地上にてなせし事業の繼續にして、前者は後者に照して解釋せざるべからず。我等もし何故に聖靈の與へらるゝ前に、基督の地上の生活が終らざるべからざりしかを簡單に尋ぬるならば、基督の昇天に對する我等の理解は、大に助けらるゝならん。

(イ)人が耶蘇の贖主たることを信ずるに至りしは、聖靈によれり。されど十字架前、彼の贖主たることは、充分に顯現せられたりき。彼が罪人の爲めに死にしことより離れて、基督の救主たることは、充分に知られず。何となれば、救は耶蘇を見て神と和合することによりて得らるべく、又一方、十字架前には、彼の衷なる本體を構成する、聖なる愛は、充分に啓示せられざりければなり。實を結ばんがために、穀物は先づ地に落ちて死なざるべからず。其の如く、基督其の職分を果さんが爲めに、萬人の爲めに死を味ひしまで、彼の望みたる全幅の信仰を喚起するだけの充分なる對照は、未だ現實にせられざりき。弟子の心には、此の大なる賜物を受くる用意未だ整はざりき。『其の血により て新約を固むる前に於ても、信仰を以て此の特權に與らんとする人には、靈の賜物は與へられんとして用意せられたり。されど我等の主が、其の事業を「終りし」までは、聖靈が充分に注がるゝだけに、受容の條件整頓せざりき』(ホッゾ『神の國に關する基督の使命』二一三頁)。

(ロ)されど福音の責命の爲めに必須なるは、基督の死と等しく其の復活なり。彼が復活したる後、初めて此の使命の全般は宣傳し得らるべければなり。復活を離れて、基督に於ける神の愛の啓示は、微弱にして且つ不決定のものたるは明なり。若し其の愛が、喜に充ちたる全幅の信念を喚び起すべしとすれば、たゞ死を忍ぶのみならず、併せて又た死に勝てることを示さゞるべからず。是はヘーリング

の示す所、知言と云ふべきなり。玆に勝つとは、最も充實せる意味にて云ふなり……即ち最後の苦惱に於て耶蘇を支へ、終まで打ち勝ち難き信頼を充たしめしのみならず、死を滅ぼし、彼の爲めに賠償的活動の新しき道を開くことによりて救ひ得る主權を帶びしめたるを云ふなり。カルバリーを見る時に、我等は、此の愛こそは勝利を得るの價あるなれといひ、復活したる主を見る時に、我等は更に加へて、事實上果して勝利を得たりといふなり。此は我等が知り得る、最も高尚なる力にてあるのみならず、又た最も强き力――思想上に於ける如く、現實に於ても、最も有力なる力にてありき。『愛は總てのものに勝つ』といへることあるが、基督の復活するまで、此の諺の果して眞實なるや否や、之を疑ふの餘地ありしならんも、其事ありてより以後、彼を其の裡に宿せる者は、何人も之を疑ふを得ず。故に聖靈來ると共に、福音は完全に現はさるゝことゝなり、神の恩寵は慈愛に富めるのみならず、又た大能を帶ぶることを聲明したり。

（六）聖靈の來ることは、基督が目に見えずして然も恒久なる現在として歸り來りしことゝ同一義なり。されど耶蘇地上に活きし間には、此の一段親密なる交通を實にし得ざりき。地上にある間、彼は一個の人間として現され、肉體の必要にて限られ、其の弟子と偕に在らん爲には、彼等と離れざるを得ざりき。『汝等の爲めに、我彼處にあらざりしを喜ぶ』といひしものが、『我世の終まで汝等とゝもに在るなり』といひ得るまでに、存在の樣式に於て、大なる變化起らざるべからず。此の過渡の點を爲し、彼を新しき境遇の中に置き、之によりて、彼が教會に宿る生命となりしは、死と復活となり。フォーレストは記して曰く、『內外兩面に向ふ、此の普遍的なる働は、「肉と血」とに包まれて限らるゝ限り、神的なるものに屬する能はず。そが之に達する前に、是等の束縛を免れざるべからず。人となりしものが、其の榮に入る前に、此の外部的の要素は消失せざるべからず』（『基督の權威』三五〇頁）。此の如く、復活の後に於てのみ、基督の靈或は靈としての基督は、廣く行はるゝ實際の經驗として注がるべかりき。

復活したる主が、依りて以て信者と活動的關係を維持するものとして、新約聖書に示さるゝ第二の樣式は執成（インターセッション）の樣式なり。此の觀念は、吾々現代人が、夫が關鍵を失ひたるものにあらざるや、と思はしむることもなきにあらず。又た基督が、天上にてなす執成しをいひ現はせる文章に、象徵的の分子多きことは充分に認むる所なり。されど象徵にしても、又たさだかなる意義あり、又た實にいひ難く貴重なる意義を有せり。基督の執成しも、亦た此の如し。デニーがいへる如く、『使徒等が、此の神聖なる職分を記載するや、新約聖書に於てさへも、全く特殊といふべき、一種の畏敬の態度を以てす。是れ實に想像し難き賠償の不思議にして、其の愛には、我等の求め又た考へ得る、一切のものに越ゆる或物あり、と彼等に思はしめたる如し。靈感を受けたる思想も、此事に觸るゝや、此上登り難き絕頂に達せる如き感を以て立つなり』（『神學の研究』一六二頁）。

我等が、基督の執成しは、特に如何なる働より成り立つかを説明せんと企つる時、人力の制限に拒否せらるゝや疑ひなし。例へば、言語を以てする歎願として、之を考ふるは、無意義なり。言語は距離を暗示し、且つ基督と天父との間に存する生命の一致と適合せざる、一種の二元性をも意味す。其の一致は、言語を要せざるものなり。さればとて、其の執成しを一切人格的の意義なきものと見るも等しく誤なり。我等は以下の如く想像するも誤らざるべし、即ちそは少なくとも基督が、我等各を知りて之を憐み、いつも仲保者的に神の前に現在する事――彼の榮光に入れる人格は、地上に於て成就したる贖の事實に對する、不斷に有效なる訴へをなす事にして、又た基督の如く、誘惑せられ試煉せらるゝ人間の斷えざる要求をば、强烈に思回らす事實を含むなり。此の如く、基督の執成しは、少なくとも、眞實なる同情を以て、彼の敎會の經驗に與り、此の同情をば、天父との交通にまで推し及ぼし、之を其の眞實にして活ける要素となす意味を含めり。此の神的交通に於て、一度高價を拂ふて買はれしものは、決して忘れられず。『愛と限りなき思慕を以て』、生にも死にも、人類と一になりし彼は、今尙ほ其の兄弟と意識的に一體となる。此の大仲保者の精神と目的とは、第四福音書に於ける彼の訣別の際の祈禱に徵すべし。基督の大なる精神は、彼が目に見ゆる奉仕をなす間、神の國の新生活の第一歩に於ける、弟子の依りて立つ處なりければ、今日も敎會の信仰、是あるがために祈る其の祈禱、其の負へる責任は、依然として此の大なる精神により支へらるゝならん』（ホッグ『神の國に關する基督の使命』二一八頁）。

是れ實に偉大なる宗敎的觀念なり。此の觀念は、最善なる基督敎の說敎に調子と實質とを注入せり。此の觀念は、又た堅實にして壯嚴なる基督敎生活を營む爲めに、有力なる動機を供給したり。義の兵卒に取りては、救の將軍の爲めに盡し、之に隨ふに當り、賴るべき力の源なり。最も謙遜なる信者にとりては、其の我等の爲めに忠實に謀ることが、時や地位の變化に影響せられざる、目に見えざる友の愛に安んずることが、一切にして、他に何物をも要せざるなり。我等の主は、今神に於て活き、神又た彼に於て活き、彼の思想と力とは、常に總ての信者に向けられ、此の最も現實なる人との關係に於て、彼は云はば、神自身の本體中より出でし如く働けり。且又働くべき彼の權利と力量とは、其の犧牲の永存する價値に於て、道德的の基礎を有せり。此の犧牲に於て、我等の利害と彼の利害とは、完全に且つ結局的に一致す。我等の祈によりて與へらるゝ救の愛は、我等の祈によりて造らるゝにあらず。寧ろ其の妥當性が、我等が今受くる總ての最も確實なる背景にして又た勢力なり。

昇天せる基督を信ずる信仰に、久しく暗影を投じたる危險は、放縱にして檢束なき神祕思想なり。彼が人生に入りたることに關して、彼の知られたる性質と、何等關係を有せざる思想、世に行れたり。榮光の中にある救主と歷史的耶蘇とを別なるものとし、又た從ふて一個人の靈魂をば、敎會てふ有機團體より孤立せしめたり。媒介なしに基督と交通し得る權利を主張して、基督の一生の歷史的記

錄をば、『嬰兒に飲ましむる乳』に過ぎざるものと見る、各時代の宗教的悟道者に對して、リッチルは、猛烈なる砲火を浴せたり（『神學と形而上學』二五頁以下）。此の如き態度が、如何なる妄信的の極端に馳するに至りしかは、人の能く知る所なり。淺薄にして不健全なる想像に加ふるに、屢々病的なる慈愛の情を以てし、新約聖書の宗教とは、全く似もつかぬ感情と信念との一型を生じたり。之と反對して、然も亦た相近き見地よりせる思辯は、歴史の事實に代ふるに、本體的基督或は基督本義（クライストブリシプン）の觀念を以てし、教會の狹き信仰を擴張して、人類の爲めの宗教となさんとせり。地上に活きし耶蘇は、空間と時間との制限に拘束せられ、たゞ死によりて、一段高く且つ際限なき生活に入りたりてふ事情は、改變せられて、基督教に存する眞理は、夫自身絶對的にして永遠、其の內容は、理性に基づきて、事實に基づくことなく、時間の連續の一時的にして非論理的なる要素より全く獨立せるものとなれり。されば耶蘇の事業の一段大なる意義を知らんとせば、世々相繼いで、基督者の心に眞理を表明せる聖靈を見るべきにあらで、『意のまゝに彷徨して、始終新しき信念に格らんとする空理的想像』に求めざるべからず。此の如くんば、昇天せる基督は、感傷主義或は超驗主義（ダイアレクティシュ）の霧中に消失す。活ける人格は顧られず、之に代へて、我等は熱情の夢或は命なき哲學的の主義を提供せらる。此の如き觀念の維持し難く、又そが純正に基督教的として伍せんとする要求の容れ難きを指摘したることは、リッチルの大切なる功勞といはざるべからず。彼は耶蘇の人格を神祕的或は純理的なる準人格的要素に分解せんとする企を强く論駁し、基督に關する基督者の穩當なる見解は、二つの特徴を有することを指摘せり。其一は、歴史的救主に現在したる人格的性質をば、復活せる主にも屬せしむることなり。第二は、彼の命令に從ふべき根本的義務を主張すること是なり。彼の榮光に關する觀念にして、此の二つの道の孰れにても缺がば、之を眞なりとするを得ず。

されどリッチルが、一點基督の現在せる主權を重んずる解釋は、不適當なり。彼の主張する所によれば、若し此の主權が、我等の精神に對して確實なる意味を有すべくば、我等は其の特徴の一切を耶蘇の地上生活に求めざるべからず（『義とすること和らぐこと』四五四頁以下）。さて歴史的耶蘇は、事物の上に無二なる道德的勢力を及ぼすことによりて、即ち境遇を支配し、人の心靈を支配し、障害に勝ち、苦に逢ふて忍耐し、死に至るまで忠實なりしことによりて、其の主たる所以を現せり。リッチルは說いて曰く、是等のみが、主權の特徴にして、耶蘇は世界の憎惡をば、其の最も嫌ふべき結果の中にさへ忍びて世に勝ち、永久に世の力を破りたるが、是れ即ち、基督教の使命なりと。此の如き見解に大なる眞理の分量を含むことは總ての人の認むる所なり。且又屢々基督の尊嚴を描くに、我等が新約聖書にて讀み慣れたる聖なる贖ひの愛よりも、野蠻なる酋長等が、用ひて以て探見者を威さんとする誇示に似たる、全く俗にして倫理的ならざる形を以てせり。耶蘇が善を以て惡に勝ちたる、其の倫理的勢力より出立せず、又其の周圍に廻轉せざる觀念は、正しとなすべからず。されど是は果して、全般の眞理なるべ

きか。

我等若し平明なる自然的の意味を以て、信仰的意識の表現を讀むならば、決して全般の眞理にあらずと思はる。信仰ある人が、單純に又た制限なく、耶蘇を主と呼ぶ時に、そは確にたゞ、彼が必勝の善によりて、世界に勝ちたりといふ意味なるのみならず、天地に於ける一切の權力彼のものなることを含めり。彼の全能なるは、神の全能なり。其の生と死と勝利とによりて始めたる事業を繼續し、之を盛ならしむべき絶對の力は、彼に屬せり。加之我等若し此の觀念を分解し、其の無意識なる論理を明にするならば、それに含まれたる論理は、略々次の如きものとなるを發見す。即ち基督がたゞに全き善なるのみならず、全き善に答へて、之れを有効なる顯現に至らしむる存在の樣式なること是なり。いひ換ふれば、神との契合は、耶蘇にとりては、善を勝たしめ得る超越的の威力に眞實參與することを意味す。此力は、云はゞ外部的の相に於て、神性を構成せるものなり。

リッチルの與へたる解釋は、充分なる基督敎の信仰の寫しとしては缺點あれども、基督と我等との關係は、直接とはいひながらも、媒介者なきにあらずとの必要なる敎訓を主張す。直接にして媒介者を要すといふも、是は決して矛盾にあらず。余は余の友人と直接交通すれども、余が彼に就て知る所即ち過ぎ去りし談話や、會合や、相互の奉仕等一切の事は、其の交の中に現在して、今日あるを致せり。是れ即ち現在が、過去によりて媒介せらるゝことなり。之と同じく、基督者が基督に對する關係は、人格的なるが故に直接なり。而も直接なるが爲めに、歷史上の事實によること少なしと云ふべきにあらず。彼の一生の記錄に基かずして、彼と交通すといふも、そは無意味のことなり。この基礎なくして、基督敎を其の原型に忠實ならしむるものあらず。されば、此の交りに於て、我等は徹頭徹尾、意識的に歷史上の耶蘇を經ざるべからずといふにはあらず。我等が友人と交る時にも、一々過去に迂回する必要なし。却りて態々過去の記憶に歸らんとするは、純粹なる親交の未だ成立するに至らざる證據たらずんばあらず。

榮光の中に擧げられて、又た現在せる主を信ずる信仰は、明に新約聖書の宗敎に於て、死活的の要素をなせり。羅馬敎の神學は、此の大なる福音的事實を曲げて、聖餐式の化體したる原素に基督の肉體存在すとの敎理に代へたり。我等は今此の敎理を點檢するに遑あらず。此は要するに、極めて客觀的に靈的なる事實をば、物質的にして人を誤り易き敎理に飜譯せんとしたるものなり。されど是は、兎に角一個の積極的敎理にして、眞實の渴望に答ふるものなり。されば單なる否定を以て、之に代ふるは確に當らず。基督者の心には、救主と實際の結合をなさんとする願——罪を赦す上に、聖ならんことを熱切に追ひ求めて、悶えつゝある靈魂を助くる者と直接の交をなさんとする願切實なるものあり。デールが能く云ひし如く、化體說及び肉體的現在の敎理の眞の力は、『若し彼等が、聖餐式の嚴肅なる祕義を信ずる信仰を棄つるならば、基督は最早彼等に近きものと思はれずと感ずる多數の人

の印象中に存せり。若し彼が超自然的方法を以て、祭壇の上に現在するにあらずば、彼等は全く彼を失はざるべからずと思ひ、且つ彼等は我等の聖餐式を單に「不在なる主の記念」に過ぎずといふを常とせり』（デール『論文と演説』）。歴史的批評によりて亂されたる人の心は、却りて羅馬教會の排他的要求に誘はるゝこと多き今日の時代に於て、我等が靈魂の要求に應ぜんとせば、既に久しく世を去りし英雄の偉大を宣言したるのみにては足らず。世界は其人の現在せる恩寵の中に、罪人の安んじ得べき活ける人格を要求せり。

今我等の點檢しつゝある教理の中、常に明に爲し得ざる側面の多きことは、附言する必要もなきほどなり。目に見えざる世界の狀態は、我等の知識の圈外に屬して、之には論ずるの要なき、多くの細微にして捕捉し難き問題を含めり。如何にして、基督は人格にして又た且つ遍在し得るか、彼の玉座は何處に設けられあるか、昇天したる彼の身體の性質は如何——此の如き事に關しては、或種類の人々（小兒の如き）は、之を知んことを求む。されど知り得ざる所のことを何故知ると稱するや、此の如き穿鑿に對して我等は答へざるべからず、親しく主なる基督を知んとする渴望は、未來記的の幻により て、或は時代後れの論理の感情的努力によりて滿足せらるべきにあらで、たゞ福音書に載せたる彼の言葉と行爲との物語によるの外なし。『隱微たる事は我等の神エホバに屬する者なり。また顯露されたる事は、我等と我等の子孫に屬せり』（『申命記』二十九〇二十九）。使徒の描きたる基督は、今尙ほ我等と偕に現在し、極力救はんが爲めに現在す。此の如き性質を帶び、此の如き條件の下にある彼の人格は、福音書中に掲げられたる大なる對象なり。之を會得する爲めに要するものは、あざやかなる歴史的想像にあらず、まして訓練せられたる論理の力にもあらずして、誠實と、謙遜と、從順とより出たる信頼あるのみ。

（註一）一八九二年の『神學及教會の思潮大觀』三四二頁以下に於ける、『基督の復活に關する福音的信仰』てふ、ロプスタインの名論を參照せよ。

（二）是はヘルマンが、『使徒職に關する論爭』一二頁に於て論ずる所、モズレイ之を其の著、『リッチル主義』一九〇頁に引用せり。またヴァイスの『基督の弟子』一五六——五八頁及ティームが、『基督の神性論』五二——六五頁に掲げたる、思想充實して好く平均せる敍述を參照せよ。

此章に關する參考書

スウィート『使徒の信條』一八九四年
Swete, The Apostle's Creed.

カフタン『教義論』一九〇九年
Kaftan, Dogmatik

ミリガン『我等の主の昇天と天上祭司の地位』一八九二年
Milligan, Ascension and Heavenly Priesthood of our Lord

昇天せる主

フォン・ドブシュツツ『復活祭と聖靈降臨日』一九〇三年
von Dobschütz, Ostern und Pfingsten
マイヤル『基督の復活』一九〇五年
Meyer, Die Auferstehung Christi
『神學及び教會評論』一八九七——九八
Zeitschrift für Theologie und Kirche
ヴェンド『基督教教理の體系』一九〇七年
Wendt, System der christlichen Lehre.
シラッテル『基督教教義』一九一一年
Schlatter, Das christliche Dogma
ガーヴィー『耶蘇の內的生活研究』一九〇七年
Garvie, Studies in the Inner Life of Jesus
ヨット・ヴァイス『基督の後繼』一八九五年
J. Weiss, Die Nachfolge Christi

第六章　基督の完全なる人性

信仰的意識を分解し來りて、我等が到達する明瞭的確なる事實は、信仰の目を以て耶蘇基督を仰ぐ時、彼の現在の榮光は地上の生活と連續して、其の人性は、完全にして比類なきを見ることなり。耶蘇は卓越したる人なり。されど此の一論に於て、我等は辯證者として彼の人性を論ずるよりも、寧ろ其の人物の研究者たらんとす。言ひ換ゆれば、我等は孤立して比類なく、且つ人を贖ふ爲めに活ける意味ありといひ得らるる、其の性質を證明するよりも、寧ろ抽出さんとするなり。

舊約聖書が、神の存在を證明せんと試みざる如く、新約聖書は、耶蘇の人性を證明せんと試みず。使徒にとりては、耶蘇は、其の氣質、其の情緒、其の態度に於て、徹頭徹尾人間的なり。されば彼の人格の秘義は如何にあるとも、彼の人性に關する眞理は、兎も角も疑を要せざるほど明瞭なりと思はれん。然るに歷史は、其の然らざることを示せり。假現說（ドケチズム）は今日に於てさへ、多くの方面に流行せるものなるが、是れ實に基督論に關する最初の異端にてありき。使徒時代に於てさへ、其の感化の跡を見出すことを得べし。ヨハネ第一書の中にも、間接に假現論者の事をいへる所ありて、此の書翰の著者は、その爭論的文句に於て、基督が眞實肉體となりしてふ確實なる眞理を主張し、之れを神的基督が始の顯現として——彌久的に實質なき體を以て地上を歩めりといふ如き幻想的の議論に對照して、之

に反對し、その肉體說を再び肯定するの機會となせり。斯く最初の弟子が尙ほ世に在りし間に、基督が人たりしことを信じ難しとなし、彼の身體は似て非なるものなりと明言する基督者ありき。之れと等しく、我等の主は、人間生活の物質的側面には、眞に參與する所なかりきといふ說は、第二世紀のグノオシス說の敎理にして、彼は時を異にし人を異にするに隨ひ、異りたる形を以て現はれたりといへり。後世に至り、往々耶蘇が我等と人性を同じくすることを否定し、或は樣々之を制限することゝなりしは、是れ畢竟此の如くにして基督の高尙なる實在に一段深き尊敬を拂ひ得るものと誤想せるが故なり。斯くて日常の言語に於ても、其人性を記述するに人格的にあらざる文字を以てせんとする傾向儼然として存せり。其人々の考によれば、此は身體なり、殿堂なり、火と混じたる鑛物なり、神の焰之を燒くことなくして其の中に宿れる棘なり。

我等は敢て嚴しく是等の誤謬を非難せんとするものにあらず。この誤謬の原始的の表現に對しては別けて然りとす。昔は肉體は根本的に惡にして、濟度し難きものてふ信仰廣く行はれたり。肉體は、罪の宿れる處、或はそれを育つる所にてあるのみならず、又た之を生み出す原因にてありき。此の思想を敎會に移したる人は、耶蘇の身體が其本質に於て、我等と同一なりとの主張に、同意し難しとせるならん。或人は彼の身體の現實なるを疑ひ、人が彼を見又は彼に觸れしは、夢中他人に觸るる如きものなりと云ひ、他の人は又た彼の肉體の現實なるを認むるも、人となれる神が、完全なる人の心靈を有せりと信ずる能はざりき。此の如き場合に於て、彼等は朧氣ながら神秘なる基督、即ち別々なる個人の範圍內に限られず、自己の生命と力とを無數の心靈に及ぼす所の人格的救拯の生命の觀念を搜りつゝありと云ひ得べし。それにしても、敎會は一律に露骨なる假現說を拒絕する方針を執りて動かざりき。主の知識の制限を論じ、或は彼が苦しく鋭き誘惑に遇ひ得べきことなどを論じたる、長き論戰の間には、知らず〳〵の間、假現說の種類に屬する議論をしば〳〵用ひしことの事實はあれども、假現說其のものは之を採用せざりしと明言し得べし。基督者は、福音書の耶蘇を抽象的幻影に過ぎざるものと見るは、救拯の意義を奪ひ去るものと常に思ひたり。純然たる假現論者の云ふ如きものならば、救主は歷史を有せざるものとなる。

世界に及ぼしたる耶蘇の救拯的勢力、即ち總べて人々をして耶蘇を主と呼び救主と呼ばしむる勢力は、個人的にも、社會的にも、彼の人性に負ふ所多く、其の人性の完全なるが爲めに、其の感化も完全なりとの事實の重要なることを過算すること能はず。彼が歷史的の脈絡に於て地位を占むるは、人たるが爲めなり。固より耶蘇の感化は、歷史的以上にして、超歷史的と稱し得べく、又一方には、時間を超越して永久なるものなり。されど時間を超越して、あらゆる時代の人の同時代者となり、あらゆる國土に於ける罪ある人の心に觸れ、信ずる者に神の生命を傳達する其の性質が、此の世界に立脚地を得たる所以は、完全なる恩寵の媒介たることを地上に實現し、時間の連續に於ける眞實の要素となれるに因れ

り。若し耶蘇の人性にして假設的であり或は省略せるものならば、人類を救ふべき救拯の力彼より出る能はずして、神は依然として人類より遠く離れたるならん。

先づ第一の基礎として我等か擧げ得る眞理は、耶蘇が人格的個性を有したりとの眞理なり。彼はたゞ人にてありしのみならず、一個の人なりき。此は明に福音書の物語に記されたる事實に含蓄せらる。四福音書を讀む者は、其の中心人物は明に一個の人たりとの印象に到着する外なしと云ふも過言にあらず。彼はたゞ人にてありしのみならず、第一世紀のユダヤ人にてありき。之に反對せる見解が、外より注入せらるゝにあらずば、斯く思はざるを得ず。然るに、我等の知れる如く、傳說的の正統說は、之と別なる決定を見るに至れり。固より、徐ろに、又た少しづゝ斯くなりしものにして、オリゲネスや、テルツリアヌスの時代までも、耶蘇が人なりしことは、敎會の敎師が公然敎へたる所にてありき。レオがフラヴィアンに送りたる書翰の中にある『人』(homo) といへる一語にしても、眞面目に之を解すれば、明に個人的人性を證明するものなり。然るに、少くとも、アレキサンドリアのキリルの時代より、東方の敎會に於ては、此の個性の感次第に朧になり來れり。斯かる方向に向ひ來りたるは、アポリナリスの遺せし、面白からぬ遺產の一なりと見るも、怖らく誤にあらざるべし。『エヌポスタトス』(enupostatos) といへる形容詞は、ビザンチウムのレオンチウスが、初めて公然作りたる語にして、獨立してそれ自らに人格的にあらざれども、神のロゴスの中にありて人格を見出した

る、人間性の觀念を現はさんとせり。されど時の經つに從ひ、レオンチウスの細心なる區別は、半ば忘れられ、半ば棄てられて、東西ともに晩期の思想は、レオンチウスの提出したる「エンヒポスタシヤ」よりも「アンヒポスタシヤ」anhypostasia (人格なき義) の說に接近するに至れり。アルクインの有名なる一句、『神の子なる一の人格に附屬したる人性』(acessit humanitas unitatem personae filii dei) といへるは、此の見地を示すものなり。斯くて、今日も神學の敎科書には、基督の的確なる屬性として、普通に用ひらるゝ『非人格なる人性』((an impersonal humanity) てふ不適當なる用語を生ずるに至れり。ディン、ストロングは、此の一語を用ひて後、嚴しく之を批評して、『此語は初め領有せられざる人間ありて、神的人格之を養子とせりといふ如き抽象的なる思想を暗示せるものにして、不適當に專門的なる種類のスコラスチシズムに門戶を開くこと明なり』(『神學提要』第二版一三〇頁)といひしは、正當なる見解なり。我等の主の人性は獨立せる人格を有せずてふ眞理に對して防戰せん爲め、即ちネストリウス說の再燃を防がん爲めに此の句を作りたるなりといふ人ありて、其れが爲に、歷史的の地位を與へらるゝことは疑はずと雖も、此の語を以て標識する立場が、果して、基督者の思想の安住し得べき所なるやは別問題なり。

さりながら人にして一個の人にあらずといふ此の觀念は、有力なる諸學者にして、今尙ほ之を持する者あり。近頃の例をとれば、デウ・ボース博士は、處女降誕の爲めに强く論ずるに當り、『人と人との自然

なる結合より生れしものは一個の人格なり。然るに耶蘇基督が教會に對し、又た人類に對して是れある所、即ち彼の普遍と充足と遍在との光に照らせば、彼かたゞ一個の個人なりしと信ずることは不可能なり』と云へり（『福音書に於ける福音』二一二頁）。後年の作に於て、彼は一層直接に此の問題と格闘し、一人の反對論者を設けて立論したるが、其が反對者の主張、甚だ公平なるのみならず、余の見る所によれば當り難き力を有す。曰く、『人或はいはん、君は我等の主が一個の人にあらずして、人なり（Our Lord was not a man, but man）との見解に重を置く、されど余は思ふに、此は困難なる觀念なり。その人性てふものは、人的なる個々の人格を離れて具體的の實在を有し、此の普遍的なるものが、基督に於て見るべきものとなれりといふ意味なるか。果して然らば、今日は一般に受け入れられざる形而上學の領分に我等を導くにあらざるか』と。之に對するヂウ・ボースの答は、信仰は普遍的なる基督を要すといふ正しき假定に基けり。曰く『我等の主の人性の普遍なることは、其の人格が神的人格なりとの事實によりてのみ說明せられ得べし――耶蘇基督に見出され得る人性の具體的なる普遍は、人性としてにあらず、人性に於ける神として之に屬す。我等の主の特別なる人性、彼の聖きこと、義なること、及び其の生命を總ての人の益となり、又た有効なるものとなすは人性に於ける神なり。此の如くにして、人々基督に於ける自己を見出し得べく、又基督に於て自己を見出し得べし』（『パウロによれる福音』二九七頁）と。モオバリイ博士も、同一の地位を占むる者の如し。『基督は人の中のたゞ一個の人にてあり得べかりしも、彼はしかあらざりき。彼の人類に對する關係は、彼が自己以外のあらゆる人より、異なりたる他の模型なりしことにあらず。彼と人類との關係は、差別的にあらずして、彼に至りて絕頂に達したる關係なり。彼は種類に於ける人にあらずして包括的に人なり』。而して彼の結論は、略〻ヂウ・ボース博士の說と同じく、耶蘇基督の人類に於ける關係は、『一個の靈的財產なるが、然も甚だ尊く、又た超越的にして、たゞ人性の財產たり得べく。其人性たるや、有限者の人性なるのみならずして、無限なる神の人性といひ得るほどのものなり』と斷定す（『贖罪と人格』八六、八九頁）。是等の例を見れば、近來此の觀念を提出する人の深き確信を證明するに足れり。此の觀念の要素は、簡單にいへば稍々次の如きものたらんか。即ち基督は人として、人類の爲めに普遍的にして且つ有機的の意義を有するが故に、彼が一個人（インヂヴィヂュアル）たることはあり得べからずと。

されど、我等若し福音書の物語の光に照して、此の問題を考ふれば、之と正反對なる言葉を以て眞理と思はるゝことをいふを避くる能はず。即ち基督は、普遍的にして、且つ中心的なるが故に、彼も亦た一個人（インヂヴィヂュアル）なり。要するに、中心的個人なることが、彼を他と異ならしむるものなり。されと、注意すべきことは、基督を一個人なりといふは、彼が『特別の恩寵を受け、最も秀でたる天稟を有せる人の子の中の一人に過ぎず』と見る立場とは同じからざることなり。されど斯る假定は、議論に害あること多し。前に擧げたる學者の如きも、基督は一個の人にあらずして、包括的なる人性を有すといふか、或

は彼は單に一個の善き人、人類の一員にして、甲の人と、乙の人との關係の如く、我等に相關せりと見るか、二者其の一を選ばさるべからずと想像す。されど、此の二者擇一は全く眞實にあらず。基督を一個人と呼ぶは、彼が人として、或はペテロ、或はトマスより、明に區別し得らるゝてふ事實をいへるに外ならず。彼の無比なるを明にする爲めに、彼が一個の人たることを否定する特種の哲學は、確に此の事實と相容れざるものなり。

實をいはゞ、それ自ら眞實にして具體的なる普遍的人性（humanitas）あり、とのスコラ哲學的觀念は、最早人の心に滿足を與ふる能ず。現實の領域に於てヒューマニタス即ち『一般的なる人』といふ如きものが、獨立して存在すべしと思はれず。何人も『一般的なる人』といふことを考へ、或は心に描き出すと能はざれば、爾か云ふも、妥當なる知識には觸れざるなり。何人も『人』てふ階級に屬する全員に共通なる性質にてある一個人を心頭に浮ぶること能はず。固より個々の存在者が、一つの共通なる性質に與かるといふことは事實なるも、此の共通の性質は心にて作り出したるものにあらずして、寧ろ個人個人が罪人にてありながら猶ほ同一の名を有する所以を說明す。即ち斯く個人個人が或屬性又は特性を共通に有することを示すなり。されど此は具體的實例を以て例證さるゝ通り、眞に現實の一側面一作用なれども、其ものは純然たる描象にして、獨立して存在を有せず、又た有する能はず。眞實の人間世界は、共通の特性又は性格を有する個人個人より成立するものなり。其他の光に照して人間を見るは、これ全く謎の如き實在に過ぎず。之を我等の問題に適用すれば、人類は眞實なる意味に於て一にてあり、一體たる性質を有す。神も亦此一なることによりて贖ひを傳達したりといふ意味なれど、さればとて、基督が此の一なり、此一體の化身なりといふべき道理なし。たゞ斯く一なりしが爲めに、即ち生命と生命との間に互に包有の繫りあればこそ、眞實の個人なる耶蘇基督が、萬民を救ふ力を揮ひ得ると信ずるなり。要するに一個人は普遍てふことの反對にあらず。樣々の程度に於て、普遍なるものを具體的の形になしたるものなり。斯くて基督は個人たるを失はずして、有機體なる人類の普遍的、焦點的なる一員たるを得べし。此の二者の間に何等の矛盾あることなし。却りて人が偉大にあればあるほど、人間的環境と多くの接觸を有し、多くの影響を及ぼし、然もより多く、具體的なる個人性を具へて自ら持することは、普通に知れる事柄にあらずや。主耶蘇基督は、此の結合の理想的限界を示し、其神的の溢るゝ愛に於ては、萬人に繫り、然も常に自立せる生命の主たりと考ふる外なし。監督ダーシーの言ひ現はせるが如く、『我等の主の人格は我等が知れる最も鮮明にして最も具體的なるものなり……描象的教理を解し易く見えしむる爲めに、自我に鮮明を附與する限界を曖昧になすは、確に危險なる誤謬なり。我等の主は眞實人にして、彼の自我はあらゆる人間の心靈に、個人的鮮明を與ふるあらゆる自持と自覺とを有す（ヘスチンゲス『聖書解典』第二卷三一神の項）。

故に余はデウ・ボース博士の有力なる立論に於て批評を促す要點は、個人に關する彼の見解なりとい

はんと欲す。個人は普遍の反對なりと單純に定義せらる能はず（リンゼイ『ベルグソン』の哲學』一八九頁參照）。我等は、彼が『我等の主の特別なる人性、彼の聖きこと、彼の義なること、及び其の生命を總ての人の益となし又た有効なるものとなすは、人性に於ける神なり』といへる言葉は、割引なく承認する所なれど、たゞ『我等の主の特別なる人性』てふ言葉の中に、我等の得んと欲する一切を許すことを指摘せんとす。要するに、基督の人性は個別的（パーソナル）なり、或は更に適したる語を用ふれば個人的（インディヴィデュアル）なり、而して又た且つ普遍的なり、此の事實は、何等の異義あらずと雖も、たゞ說の別るゝ所は、普遍てふ哲學的觀念、舊くして然も永く堪ふる此の觀念なり。若し我等が福音書にて讀む基督が、個人なりとの直覺的觀念を信ぜずとすれば、如何なる觀念をか信用すべき。（三）我等彼の一生に追隨する時に、誤り得べき人間の論理が如何に之を否定するとも、其の人間的個人性に就ては益々確實になるなり。

新しき側面に眼を轉じ、我等は以上斷定したる普遍性に論理的以上の意義を附與し得るかを調べんとす。我等は人間的、具體的、可知的として、之れを示す道德的、靈的意義を充し得るか。一部分之をなし得ると余は思ふなり。例へば他人に於ては單に相反對し衝突するが如き性質が、耶蘇に於ては完全に調和せるが爲めに彼を個人と社會と、双方の救主たらしむる性質が、基督に於て驚くべき調和をなせることを、我等は誤なく指示し得るなり。彼は人の心を掘動さするほど威嚴を備へ、人の夢みざる要請をなし、審判を以て人を脅し、罪惡を暴露して憚らざりき。然るに、彼は又た、人に與ふるに愛の新しき觀念を以てし、罪人を受くる盡きざる哀憫の記憶によりて人の心靈に活き、彼等の心の盲せるを悲しんで泣き、遂に人を贖はん爲め苦んで死するに至れり。罪を怒ると、人を憐むと、此の二者の間に定めなく動搖するとなく、氣分によりて變ずる如きことなく、寧ろ一は他の支柱となり、內容となり、基礎となりたり。彼は地上の事物の力以上に生活すれども、而も之を輕んぜず。禁慾者にてあらざりしは勿論、さりとて快樂に捕はるゝとなく、然も人生の各要素は、彼にとりて神聖ならざるはなかりき。枕を置くべき所なかりし彼は、結婚の無邪氣なる喜に與ることを得たり。彼は人として人といもに飲食し、彼等には日々のパンの爲めに祈るべきことを敎へ、幼兒の思ひ煩ひなき幸福を示して模範とせり。されど彼の召命の下る時、人は神の國と其義とに較ぶれば、何等價値なき者として、家庭も財產も名譽も一切を棄てゝ立たざるべからず。最も高尙なる自意識と、最も低き謙遜とは、彼に於て相合せり。彼はソロモンよりも、神殿よりも、以上のものにてありき。弟子の主、神の子にてありき。されど彼は、ヨハネの手にてバプテスマを受け、仕へらるゝ爲めにあらず、仕ふる爲めに來り、人の與へ得る榮を棄てたり。彼の敬虔に於ては、熱心なる忘我と、靜なる信仰と相纏りて、孰が主なるかをいふは、不可能ならずとも困難なり。他の人に對する關係に於ても、狹き交友を好むかと見れば、又た大なる群衆の爲めに意を用ひ、今又た孤立の人となる。然もあらゆる場合に於て、彼は常に彼自身なり。フォンゾーデンの言ひ現はせる如く、「耶蘇の性に於て、對照なきにしもあらず。然も斯く對照せる者は、常に彼の人物の驚くべき

完全と調和とに於て融け去れり。反對は常に平均を得たり。故に彼の人格は、多方面なれども混雜せず。結局多くの獨立せる特性を兼ね有せるにあらず。嚴密に語れば、彼の人性と其の周圍の働とによりて、是等の性質は、彼の心靈の金剛石の中に生ずる七色の光線の如し』(『耶蘇の生涯に於ける最大問題』八八頁)。斯く興味或は特性が、比類なく多方面なるに、總て單一鮮明なる品性に順ひて相融和し、一の味又は一の薫の如くなれる所、是れ我等が耶蘇の人性の普遍性といへるものゝ一部分なり。人間の眞の屬性は、彼に於て相合す。然も斯く個人的生活の中に合する人性は、人類の各員に延び、其の本然の中心及び集合點をなす。此の倫理的普遍性ある爲めに、耶蘇は各時代の人にとりて、友人と友人との關係よりも、一層現實に、確實に、又た相近し。基督敎の傳道は之を證明す。彼は一民族、一時代の中に置かれたりと雖も、其の人間性の豐なるが爲めに、あらゆる時代の人となり、あらゆる人の兄となれり。

我等更に彼の成就したる畢生の事業を觀察すれば、此事は一層明白となるなり。個人と、普遍との完全なる一致は、此處にも見らるゝを得べし。一面に於て、天父が彼に與へたる職分は、截然として限定せらる。宗敎生活は、何人も、之を有すべき責任あることなるが、耶蘇にとりては、そは念他を顧みる遑なき事業となれり。時々は此事を曖昧にし、漠然と、彼は完全なる理想の人なりと賞讃し、斯る普遍的叙述の下に、彼はあらゆる人間の才能を有せる如く解かれたることあり。或人はいへり、『哲學者として、彼はソクラテスを越え、雄辯家としては、デモセネスを凌ぎ得たるならん。』若し此言葉の意味が、哲學に於ける耶蘇の才能は、ソクラテスに勝り、雄辯に於ては、デモセネスに勝れりといふ意味ならば、又等しく、數學に於ては、ニュートンに勝り、繪畫に於ては、ヴェラスクェの上に出でたりといはざるを得ずして、證據のある限りに於て、此は根據なき言葉といはざるべからず。科學藝術の天地に於て、耶蘇は第一位を占めざりき。是等の事は、神之を人類に委ねて自ら勉むるに任せたり。彼にして若し是等の專門の道に入りたらんには、それだけ普遍性を犧牲にしたるべきは明なり。何となれば、宗敎なるものは、人と神との關係に關はるものなるが故に、人事の中最も包括的にして、又た多方面なり。之に較ぶれば、他の人事は、部分的なり。されば、耶蘇が一層特殊なる領分に自ら限るは、一階級の人となりて、其の中心的地位を失はざるを得す。彼の一生の事業は、商人、政治家、神學者の如く、一の部門に力を集むるにあらず、萬人に於て、最も深きものに係りたる意味に於て、無二なり。『數々の事にあらずして多くの事なり』といへるは、彼の生涯の特徴にして、彼の生涯の計畫に、是れ以上のものを加ふるは、事實限りなく之れを減ずることにてありしならん。彼は世界的なる公同敎會の首石を据ゑん爲めに、イスラエルの家の内にのみ勤勞せしと同じく、彼は全人類に對する神の目的を成就し得んが爲めに、其の畢生の事業を神人の仲保者職の勤勞に限りたり。

されど中心的絶對的なるものにのみ限局せられたる此世の生活に於て、彼の意識は、何等の脱したる所、完成せざる頁を見出さゞりき。最善の人物にしても、一生の終に於て、なされ得ることは、總て

なされしかを自ら問ふ時、何となく悔恨を催すものなるに、耶蘇には更に斯る痕跡なし。彼の一生は、上より下まで、縫目なく織られたる衣の如き一體なり。ゲッセマネに於て、一時彼の心を被ひし疑念さへも、彼が天父に從はざるべからざるかにあらずして、こは寧ろ天父の意何處にあるか、また今彼が唇に當てたる杯は、之を飲ましめんとする目的を以て其所に置かれしかと尋ねたる順從的疑問なり。されば終に『汝の我に委ねし所の業は我之を成せり』とて、心安んずる所ありしは、特に斯く思ふべき著しき理由ありたるなり。彼に委ねられたるは、漠然たる一般的の任務にあらず、さればとて、或一定の種類以外、何をもなし得ざるほど拘束せられあるものにもあらず、神の國を建設し、人を神と和合せしむるてふ、分明にして根本的なる普遍的事業なり。

我等が見し如く、耶蘇の普遍性は、其の復活に於て、最も善く説明せられ、又た啓示せらる。人の一生の終に復活あることは、全然比類なきことなるが、復活すといはれたる耶蘇は、前に例なく後に倣ふものなきものと定めらる。固より彼が死に勝ちしことは、彼にある我等も、亦た勝ち得べきことを豫言すれども、尚ほ彼の無比なることは、彼等の最後の勝利を傳達することによりて、今尚ほ保證せらる。彼が死より復活したるが爲めに、最初より權利上彼に屬したる生命と、人に訴ふる力と、救拯力の普遍とは、事實上其の眞實の性質に屬する存在の樣式をとれり。空間と時間との制限は超越せられたり。從前とても、其の中心の意義は、世界大なれども、たゞ特別の場合に運用せられたるものが、今や遂に全世界の爲めに用ひ得べく、又た有効なるものとなれり。今までは肉體の制限によりて隔てられ、其友ラザロの死にし時も、ベタニヤを距ること遠く、『主よ此處に在ませしならば』といはしめしが、今後は、到る處常に、見るべからざる現在として知られ、又た感ぜられたり。斯くて歴史上の耶蘇は、實驗の基督となれり、是れ彼を信ぜし者の想像の中に變化を生じたるにあらず、彼の力が客觀的に普遍化せられたるによる。

此の個人的にして然も普遍的なる生命は、又た最も充實せる意義に於て、眞實と圓滿とを備へたり。我等が基督に於て見るは、毀損せられたる人性にあらず。是が直覺的に認識せられしことを證するものは、無數の信者が、彼等の必要と苦痛と歡喜とに對する基督の全き同情を、深く感覺したることを告白せる事實なり。然のみならず、彼等も亦た、彼に深き同情を捧ぐることを意識したり。我等が、彼の生涯と、其の行動と、其の苦難と、之を動したる向上心と、之を圍みたる罪なき弱さとを思ふ時、又た我等が、彼の聲を聞き、その力と慈悲の行とを見る時に、我等の心に觸れざるもの一としてあるなし。孰も我等が能く知れる媒介物の中に於て、形を取れり。我等は是等の汚れなき特性其物にあらで、その本質に就て斯くいひ得べし、『是等は我等の行爲なり、我等の思想なり、我等の感情なり、之が爲めに我等が動かさるゝ情緒と衝動となり。彼は我等の國語を語り、我等の苦痛を堪へ

我等の煩悶と窮乏とを、我等とともに、我等の負ふ如く負ふ。我等の骨の骨、我等の肉の肉にして、己を人の子といひし彼に人性にあるもの一としてこれなきものあらず。生に於ても、死に於ても、等しく然り。彼は終まで、我等の兄弟なり。』（ガストン・フロムメル『道德及び宗教の研究』五九頁以下）。

我等は耶蘇の人性の圓滿を例示することを得れども、論理を以て之を證明するを得ず。最初より自明なることを論理の證明を以て之を强くすることは不可なり。虛心にして福音書を讀む人には、耶蘇が完全に人たりしことは明白なり。若し我等にして、耶蘇は眞の人性のあらゆる部分を有せりとの確信と、彼が我等を救ん爲め肉體をとりて來りたる神の子たりといふ確信と、二者其の一を擇ばざるべからずといふことになりたりとせば（我等は斯かることに遭遇せざれども）、彼の人性を肯定し、彼の神性を棄つるは、我等の明なる義務ならん。事實上信仰より見れば、二つながら確實なれども、我等が彼のより高き性質の眞理に攀ぢ上るは、彼が人性に於て我等と一なりてふ原始的、根本的確實より之をするの外なし。彼は如何に人以上の者たるにせよ、兎に角完全なる人なり。

今茲に我等をして、人生の種々なる側面或は種々なる要素—肉體的、道德的、社會的、感情的、知識的、宗教的—に照して、簡單に之を例證せしめよ。人として耶蘇の生活の圓滿なることは、到る處に明白なり。彼の身體は、我等の身體と同じ肉又た血より成れり。苦痛と缺乏と疲勞とのあり得ること、其の涙と苦悶と涕泣と、死に臨んで躊躇せること、他人の接觸に感じ得ること、自然界の感化に感じ日の光と花とに對して喜ぶカ、是等のことは、すべて確實に人間的なり。耶蘇の身體は、常に此の世界との活ける可動的の關係によりて、其の意識の成長に仕へ又た之を養ひたり。其の道德的經驗も亦た、人間的にてありき。義務は彼にとりて高大嚴肅なる事實なるが、常に天父の意志として現はれ來れり。我等は心して讀み行く時、此の『子』にさへも、正しき道は、一片又た一片附與せられ、一生の進歩によりて示されたる、豫想せざる責任を徐々として受けしことを發見すべし。彼は己の道を選び、己の志を展ばし、己の性に忠ならざるべからず。其の一生の行路は、無責任なる冒險にあらざりき。一舉手一投足、道德上の價値を有し、透見と勇氣と忠實と忍耐とを要求せり。且つ彼の感情的生活も、亦た喜と苦痛と驚との交々往來するを示せり。彼の心靈の物語は、千篇一律の空白面にあらずして、變化に富める景色と見るべく、一種の雰圍氣ある鄕土とも見るべし。愛、怒、悲、憐等、明暗常なき感情は、縱横に動きたり。彼は總てのものを人間らしく感受し、冷然として感情の力の外椽に止ることなく、自然なる直裁を以て、其の中に入り込み得るなり。されど喜憂のために喜憂することなく、喜ぶも悲しむも、之によりて意識の焦點を蔽はるゝことを許さず。『一時も我とともに目を覺し能はざるか』との鋭き問を發せし時、或は又た、彼がラザロの墓に行く途中、此の世界の禍と己を愛する人々の哀傷とに（約翰傳十一〇三三）對して、彼の精神は反撥したるものの如く、須臾の間、不思議なる『憤り』を感じたる後、墓邊に於て涙を流したる時など、彼は全く同胞人類と一にてありしなり。臨終の際母

の爲めに慮りしこと、弟子の一人を特に愛したること、年若き宰又は今し彼を棄てたる弟子を振り返り見しことなど、斯かる特性は單純にして且つ活潑なる力を以て現はれ、且つそは證明を要する人性の、公式的外面的の證據にあらで、天眞爛漫たる人性其物の溢るゝ所にてありき。

耶蘇の知識的經驗を中心として、討論の盛なりし時代もありき。彼の時代と其の國とに於ける、尋常なる知識上の制限が、或る眞の意味に於て、耶蘇自身に及ぼされたりと考ふるは、危險にして又た革新的なりと感ぜられたりき。福音書によれば、耶蘇には、明に或範圍まで、人の思想と未來の出來事とを透見する非凡の力ありしとする事實によりても、此の困難は減ぜらるることなかりき。されど此の如き超自然的智識は、イザヤ、エレミヤ及び使徒パウロの生涯にも、多少其類あることにして、必ずしも全知と同一なりと思ふべからず。全知は詮する所、制限せられたる知識と相對するものなり。此の問題を決するには、事實に忠實なるの外なく、事實は斷定的なりといふも過言にあらず。例へば、ラザロの墓の所在に就き、或はパンの數に就き、或は鬼に憑れたるガダラ人の名に就きて、彼が尋ぬる所ありしことが記さるゝのみならず、明に知らざることあるを承認せし所一ヶ所あり。即ちメシヤの來臨に關して、『其日其時を知る者は、たゞ我父のみなり。天にある使者も子も誰も知る者なし』（馬可傳十三〇三二）といへり。若し多少救の事業に關係したことさへも、其の細目を知らずとせば、世俗のことに於ては、彼の知識は、當時の知識なりきといふ決論は避け難し。驚を感ずることも、彼には可能にてありたり。されど今日論戰の題目となれるは、之にあらず。保守的の學者も、記錄せられたる事實の明なる意義を認めるに躊躇せず。ダイクス博士のいへる如く、『我等の主の知識は、無學なる幼少より進み、他の人々が知識を得る普通の方法によりて進歩せり。彼が知り得たることも、何時も一樣に彼の心に現在したるにあらず。睡りて無意識なる時には、全く心意の中にあらざりき。是は唯單に、彼が人の心を有せしより生ずることなり。部分的に事を知り、思想に現在せざる多くのことを記憶に保存し、意識の起る瞬間毎に注意し得るは、たゞ甚た限りある印象と觀念とに止るは、是れ人間的なる所なり（『エキスポットリー・タイムス』一九〇六年一月號一五二—五三頁）。サンデイ博士も、其の近著に於て、同一問題に關して、最高の價値ある數頁を用ひたり。曰く、『我等は我等の主の意識の働方を略〻以下の如く自ら描くことを得べし。地上に於ける彼の生活は、其の外觀に於て、彼と時を同じくせるガリラヤ人の生活と何等異なる所なかりき。其の肉體の機關は、同じ普通の職分を果し、同じ普通の道によりて、心靈の生活に奉じたり。彼は喜樂と苦痛、困却と安心、渴望と滿足との同じ感覺を有したり。感覺を經て受けたる印象と、之によりて喚起されたる感情とを思起して之を蓄へ用ふるや、我等が依りて以て、個人的實驗の活ける容器となると同一の不思議なる過程によれり。彼の心は、斯く蓄積せられたる記憶の上に働き、之を篩で分ち、消化し、分析し、拔萃し、結合し、結び直せり。凡そ有形的、理性的、道德的、靈的なる樣々の要素より、一の品性は彼の內に作られたること、恰も我等の內に品性の成ると同

じく、たゞ世の常ならぬ用意と苦心とを以てせる相違あるのみ。斯く云へばとて、品性樹立の實際的過程は、我等に於けるよりも、彼に於ては、一層自覺的なりしと想像するの要ありと云ふにあらず。品性の樹立は、時々の判斷力の決定と意志の働とよりて生ずる無意識的、自動的の結果なり。良心は善惡を識別するが、彼の場合に於ては、そは必ず善を選び惡を棄てたり。されど、總て斯る道德的の決定と行爲との中より、また社交的關係の交互作用の中より、觀察と省察とに導かれながら、有意的目的の感、使命の自覺は徐々に成長し來り（『古今の基督論』一七九頁以下）。

近來基督の宗教的生活は、純然たる人間的特性を有することを特に注意し來れり。新約聖書の記述の鮮明に單純なることが、今更の如く感ぜられ、ヘブル書の著者の如く、人々は耶蘇の敬虔に重きを置きたり。實に此の一事が、彼の全經驗に如何ばかり色彩を加ふるかは、長く半ば忘れられたり。先づ他の者が、力と純潔とを取り來る、其の最も吸收力ある愛情、即ち天父に對する彼の愛を注意せよ。幾度か福音書を繙きて、然も單純なる意識として、此の愛の大なることを見落すことは容易なり。此の意識は、一の零圍氣をなし、其が中にあらゆる働がなされ、あらゆる感情が感ぜられ、天父と子との間に、絶對的なる意志の統一は、永遠に枯れざる美花と咲くなり。又た彼の祈禱及び信仰の習慣、求め且つ受くる習慣に注意せよ。基督が祈をなすを以て、不自然或は不可能なることとなす基督論は、眞の基督論にあらず。第四福音書は、始終彼の高等なる本體に重を置くに拘はらず、祈の姿勢と氣分との中に、彼を現はすこと、共觀福音書よりも遙に多きは顯著なることなり。基督は神の生命に參與する者なれども、又た神を要せり。ベブル書に於ても、ゲッセマネに於ける、恐るべき煩悶を叙するに當り、忌憚する所なき言葉を用ひて、『哀哭び淚を流して死より己を救得る者に祈り』たりといへり。是は決して、彼に宿りたる力と矛盾するものにあらず。祈禱は力のよりて出づる、唯一の源泉なればなり。彼は其の秘めたる交通によりて、人の中に斯くも偉大なり。神より離れて、彼は何等の思想、願望、意志を有せざりき。之とともに、弱き罪人のそれにあらずして、罪なき子の夫れなる信仰と受容力とが結び合へり。父てふ美しく且つ深き名の屢々用ひらるゝことは、彼の實在の秘訣を暴露せり。彼の心は、晏如として、神に休めり。物語りに於ては、聞かせらるゝと云ふよりも、寧ろ洩れ聞ける神との交通より生じたる、信賴の念あり。其の信賴たるや、昔の詩篇の言葉を借りて、內なる暗黑を最も好く現はし得る時に於ても、尙ほ熱心に、目に見るべからざる主及び友に縋りしほど、深く且つ動かざる信賴なりき。此の事に於ても、第四福音書は最も追懷に富み此の孝子的依屬の最も忠實なる記錄なり。『子は父の言ふ事を見て行ふの外は、何事をも行ふこと能はず』と云ひ、『我を遣せし者、我ともにあり、彼は我をひとり遺き給はず』と云ひ、又た、『我に居る父、其業をなせり』（約翰傳五〇一九、八〇二九、十四の十）と云ふが如き、是等は多くの中より選びたる代表的の言にして、我等は透明なる媒介物を透して見る如く、之を透して、彼の生涯及び意識の焦點は、たゞ彼自身にあ

らで、神との一致に存するを見る。此の如き道によりてのみ、彼は父を知らしめ得るなり。啓示は、そが理論的口舌の宣言以上のものならば、完全なる人の靈魂によりて、捉へられ、且つ投射されたる、天父の絶對的の反射を通して來らざるべからず。人は此の靈魂の深みに於て、此の啓示を讀み、且つ之を愛するなり。

然らば、耶蘇の人性は、其の本質に於て、我等と同一なる人性なり。彼の一生は、到然人間らしき現象にして、常に確實に人間的なる心と意志との一經路の内に動き、そが人性の中に神の啓示を成すや、『一部分は、其の内に、一部分は、其の外にあるか如きものにあらず。』されど、此點を明になしたる時、我等は正さしく、此の人間的生活が、全く他と異なる特性を有することを適當に確知するなり。耶蘇は理想的の人或は純正なる人なりといふことを得べし。されど、直ちに此の理想的の型に屬する人性は、歴史上にたゞ一度存在したることを加ふるにあらざれば、是等の形容詞は全く、誤りたる印象を生ずる虞れあり。彼は罪なきが爲に—其の生涯は、罪多き人類の中に生活したる、唯一の全く汚點なき生涯なるが故に無比なり。耶蘇が其の周圍の人へ與へたる、此の深くして消し難き印象は、之を空想として棄つる能はず。若し罪の意識が、微かながらにも存せしならば、彼の擧動に影響せざるを得ざるべく、また、彼に從ふ者は、良心に惡しき所ある痕を發見せしなるべく、且つまた、果して此の如き痕あらば、耶蘇に對する彼等の見解は、大に變じたるなるべし。然るに弟子が、耶蘇を罪なき者として示したることは、疑を入れざることにして、之よりも善く知る所ありながら、依然として此の信仰を持せしとは、道德的に考へ難きことなり。されど、一朝彼の罪なき事實を覺り得るや、我等は之を承認するに足る、强き基礎を提出し得べし。たゞ罪なき人にして、始めて神が罪を赦すことを保證し得べし。贖ひを成し遂ぐる爲めには、贖ふ者は道德的の罪を脱したる者にてあらざるべからず。必勝の靈的勢力の本源として、彼は自ら全く神の意志と一ならざるべからず。完全なる道德的の健康、汚れなき良心、そが之に達せしめんとて、徐ろに他人を向上せしめつゝありとせば、是等のものは、彼自身の生活に於て、絶對的に現在せざるべからず。彼が罪を贖はん爲めに血を流せしとせば、是れ彼が汚點なきが爲なり。一切の他事に於ては、其の同胞に同じと雖も、ひとり此の點に於ては、彼等と異なり。斯く異なればこそ、人類と全き親緣を保ち得るなれといふも、決して逆說にあらず。何となれば、若し罪あらば、彼はより多く人となるにあらずして、より少く人となりたるならん。罪は人を人らしくなきものとなし、從うて罪の入り來ることによりて、彼の活ける同情の完全は失はれて、恢復し難くなりしならん。

此處に正さしく、我等の問題は存す。聖書の記錄によれば、耶蘇は幾度か鋭き誘惑を受けたり。我等が苦鬪する時、彼の同情を期待して誤なしとせば、彼も亦た誘惑せられたる者にてあらざるべからず、とは我等の感ずる所なり。されど、罪なき人の誘惑は、眞實なるべきか。罪なき性質に於て、如

何なる戸が開けて、陋しき誘惑を迎へ得るか。惡に向ふ遺傳的の傾もなく、從前の犯罪によれる弱點もなきに、如何にして罪惡が反響を見出し得るか。

さて我等は、罪と誘惑との間に明かなる區別を立てざるべからず。低き目的と高き目的と相鬪ふと感ぜらるゝ時に、誘惑は現實なるものとなるなり。若し低き目的が、生れながらの本能に訴ふるものとして、其の時其の場所に於ては是認すべきものなりとせば、兩者が道德的意識の中を騷したりとしても、是れ未だ罪にあらず。又た之に次で生じ得る戰も、未だ罪にあらず。たゞより高きものを取る決心の失敗する時、或は其の決心が餘り除々として來る時、罪は現在す。さて耶蘇の性は、純正なる人性なるが故、高き目的の誘導も、又た低き目的の誘導も等しく、此の性を媒介として、彼の心を叩くなり。或種類の誘惑、例へば、我等が肉慾と稱する惡の形への誘惑は、事實上彼の心に存在せざりしと見るも可なるべし。果して然らば、肉慾の奴隷たる者を贖ふ力は、之によりて制限せられず。何となれば、贖ふ者として全き爲めに、彼が人の襲はれ得る個々の誘惑を一々受くることは必至の事にあらざればなり。根本的に必要なることは、彼が誘惑によりて『訓練され』、謙遜に神に信賴して、惡の攻め來るを擊退するは如何なるものなるかを味ひ且つ見ることなり。此は如何になるとも、少なくとも彼は、總て純當なる本能、情緒、欲求に於て傷を受くることを得べかりき。勝利を欲する熱望、捷徑を取りて權力を得んとする衝動、殆ど全く肉體的といふべき死の恐、罪と近接するを避くる念、凡そ是等の自然にして潔白なる傾向と之に類似せる傾向とは、眞實背反し得べき機會を供給したり。是等は、モウバリイが、『利己心を起す、外的の力、又た云はゞ、機械作用(マシネリイ)ともいふべきもの』といひし所を構成せり。是等は、意志を壓し來るが故に、固く之に抵抗するが爲に力を用ひ、又た眞實戰の苦痛を嘗めざるべからず。斯の如くして、聖なる彼は、服從を學びたり。何となれば、耶蘇の聖なるは、彼の存在する自動的必然にあらざればなり。絶えず新に穫得することによりて之を有したり。即ち我等の如く罪の意識には關係せずと雖も、間斷なく天父より生命と力とを得る必要を感じ、之に基きて自己を神に委ねることによりて之を有したり。誘惑に由れる此の現實なる戰が、如何なる風に罪なき人の心の中に起るか、精密に之を搜り難きは疑ひを容れず。我等の用ひ得る唯一の心理的類推は、我等の罪ある實驗に基けるものなるが故に、然もあるべき筈(七)なり。

我等は耶蘇の善は、全く光輝燦然必勝的にして、魅力に富める善なりしことを忘れて、其の戰を語り過ぐるの憂なしとせず。耶蘇の聖なるは、缺くる所なき完全に是れある、餘裕と優勝とを示せり。即ち『彼は最も驚くべきことをなすに、其外のことは考へ難きかの如く之をなせり』。されど又一方に於て、誘惑は前の罪より結果する弱點に訴へしことはなけれども、それが爲め、彼は苦痛ある努力を免れしかといふに然らず。罪なき者の受くる誘惑は、却りて最も强烈なることもありぬべし。飲酒家の習となれる嗜慾は、之に抵抗して自ら己の益となるべし。されど自然なる渴きの慾は、頑固に之に

滿足を與へざれば死に至るの外なからん。しかのみならず、惡人は容易に誘惑に從へども、善人は之に抵抗するに苦しまん。是等を思へば、我等の主は、自ら罪なしと雖も、鋭くも、又た殘酷なる戰爭を免れたるにあらず。彼ほど微妙なる誘惑を受けし人なく、從ふて之に勝つにも、大なる苦悶を經たり。斯くて人類の大祭司は、誘惑せられたる生活を内より觀ずるを得、人類の弱きことを思ひやることを得たり。

基督の奇蹟の中、彼の罪なき生活の奇蹟に匹敵するものはあらず。一切の思想と感情とに於て聖く、他人に對する義務を缺くことなく、神或は人に對する完全なる愛の法則を犯すことなく、過ぎたる所なく、及ばざる所あるなし—是れ想像の力に超越し、また殆んど信仰の力にも超越せる狀態なり。聖の上に聖なる世界に開けたる窓、此處にあり。

然れども我等は、耶蘇の罪なきことをば、解釋されざる、露骨の事實として、放棄せざることが緊要なり。此は決して自明のことにあらずして、一層深き說明と分解とを要求す。其の基礎或は道理は、神に對する我等の主の無二なる關係に求めざるべからざることは、我等の省察の證明する所なり。耶蘇の生涯の道德的卓越は、ひとり彼に現はれたる聖を以て聖しと見るべき天父との死活的にして且つ有機的なる結合に根ざし、之によりて養はれたりと考へずば、解し難し。彼は單に程度に於て他の人と異なりといふは虛妄にして、其の差違は、實に型の相違なり。我等は失敗するに、彼は何故一貫して罪に勝つかを問ふ時、其の答は、是れあるが爲め、彼が神と一なる、其の存在の原素に求めざるべからず（第七章に至りて詳說すべし）。言ひ換ふれば、基督には、我等が之に倣ひ、之を再現すべく求めらるゝ所にして、孝子的生活の模範として示さるる特性の充つる外に、吾等は、一層尊嚴なる性質即ち孤立にして絕高なる、人の模し難き特性あるを視るなり。此は靈的意識の中、孤立獨存の新型にして、父と一なる關係、他人の參與を許さゞる關係なり。完全なる人性の源泉たり、基礎たる神性は、茲に在るなり。

總て是等のものは、我等の個人的宗教上、如何なる位地を有するか。信仰は、耶蘇基督の完全にして然も全然比類なき人性に死活的關係を有するか。今は茲に、たゞ一部分の答を與ふるに止むべきが、耶蘇の眞の人性は、四樣の重大なる意義を有す。

（一）眞實なる成肉身は、之によりて保證せらる。若し基督の人性にして、何處にか眞ならざる點ありとせば、神は未だ全く降りて人と一にならぬ譯けなり。即ち神は、我等の求むるほど低く來り給はず、多少の保留と拒絕とありて、我等の重荷の幾分に觸れざる所あるなり。『引き取られざるものは、未だ癒されざるものなり』。其の場合には、基督は如何なる高き所より來りしにせよ、我等に達せずして、中道に止りたる者なり。『毫末の隔りも、全世界の隔りと等し！』。然れども、事は此の如くならざりき。正統なる信仰の中心は、神が基督に於て、道の端極まで來り給ひしことなり。『それ諸

子は偖に肉と血とを具ふれば、彼も同じく之を具ふ』（『ヘブル書』二〇十四）と云へるは即ち是なり。彼は我等が彼に寄り縋り、無限なる者を我等の有と感じ得ん爲めに、親しく我等に近づき來れり。此の一事こそは、最も多く人の心に觸れて、世界の頑なる心を打碎きたり。耶蘇に具はる人性の量は、神の愛の量なり。或人のいひし如く、『愛は充分に已を現はし得るまでは、充分に之を有せられたるにあらず』。基督は深所より深所へと渡り、人の經驗の一室より一室へと深く入り、遂に死に服せしことにより、是れ以上に大なる物は考へ得られぬほどの神的なる愛の證明を與へたり（マクレゴル『神の子耶蘇基督』二〇四頁）。近世の自由神學の如く、他の讀方を以て福音書を讀みても、神の愛に關して、相當に大なる見解を提供し得れども、我等の想像し得る最大のものにはあらず。我等が其の愛を見るは、たゞ眞に人と成りたる生命に於てするの外なし。故に人性の現實なることは、重大事なり。曾ては、豫言者の靈感は、豫言者の意識を沒して、殆んど之を消すほどなりと考へし時もありき。斯の如くんば、豫言者と成れば成るほど、彼は愈々人を遠ざかると云ふも可ならん。然るに此の如きは、實際非倫理的にして、道德的の人格に對して正しき取扱をなし得ざることを我等は學びたり。神が人生に入りしことを考ふるにも、淡泊に有限的人格性を取り去り、人の力は神の自我なき器に過ぎざるものとなす考方もあり。されど我等を贖ふ爲めに、神はたゞ自己を表現するのみにては足らず、我等のものたる經驗の道によりて、自己を表現せざるべからず。

（二）贖罪の本質的なる基礎は、之によりて供給せらる。贖罪に關する、眞に基督敎的なる觀念は、皆耶蘇が罪ある人と自己を一つにしたる側面として見ることを得べし。若し人の爲めに生き又た死にし彼が、たゞ外見的に或は部分的に人たりしならば、我等に代りての罪の赦は更に成し遂げられざりしならん。人の側より語り得る人にして、初めて人の爲めに神に對し得ればなり。基督我等と同じき者となり、從順と衝突と死とによりて、眞の人らしく活動したるにより、彼は殘りなく我等の境地に入り、我等の爲めに、神の手より、罪に對する神の審判を表はす苦難を受け得たるなり。耶蘇の人性は神人和合の隅の首石（かなめいし）なり。

（三）完全なる模範の現實なることは、之によりて確保されたり。耶蘇は信仰と祈禱とに於て、我等の模範なり。されど何はさて措き、先づ忠誠ならざる行爲が模範的となり得ざることは明に理解し得らるゝ所なり。人なる基督が祈りしは、弟子に模範を供せんが爲めにあらで、彼にとりて祈は、內的の必要又た義務なればなり。グッセマネに於ける彼の畏れは、深く且つ可憐にして、彼は人の子の如く、神の蔭に隱れ、恭しく神に任すことによりて、祈は聞れたり。我等誘惑せらるゝ時、彼も亦た誘惑せられたりと知るに勝りて、必要なる事はなし。罪なき人性なるが故に、時々は我等より離れ、同情もあり難く見ゆることあるも、今や彼の贖ふ力の泉とし力として、其の人性此處に現はるゝなり。何人も推測し得る如く、弱き男女が、直覺的に助を求め望を繼ぐは、曾て飲酒に耽り、肉慾に負

けたる人にあらずして、誘惑によりて同情を修業しながら、尙ほ純潔に德を守りたる人ならん。耶蘇の勝てることが、彼をして人類の爲めに得る勝利の源たらしむ。此の言方にして誤ならずんば、神の恩寵は、彼に於て人化せられ、罪人に益あるものとせらるゝなり。抽象的なる倫理上、宗教上の眞理は、意志を支ふる力を缺ぐこともあらん。さはれ、是が活ける形もて體現せらるゝ時、活けるもの又た活かすものとして我等を捉ふるなり。『言葉』が肉體と成れる人の子に於て、完全なる義は、信賴と愛との範圍内に置かるゝなり。靈の結ぶ實は、たゞ耶蘇の品性の諸相なり。

（四）我等の永遠なる運命は、之によりて示さる。人なる耶蘇が、墓より復活して、神と偕なる超越的生命に入りたる故に、我等も亦た希望を懷いて死に勝つを得るなり。使徒パウロが、我等の主の名を用ふるに、細心なる注意を以てしつゝ言へる如く、『我等若し耶蘇の死して蘇りしことを信ずるならば、耶蘇に於て既に睡れる者を神彼とともに携へ來らん』。我等の人としての伴侶又た保證なる耶蘇の復活は、試訴（テスト・ケース）なり。天父の愛と力とは、如何に總ての信者を處すべきかを啓示して、一の原則を立てたるものなり。基督の眞の人性の中心的意義は、此處に復た明なり。祝福せられたる靈魂不死を信ずる、信仰のいひ難き慰も、彼の人性の圓滿と完全とに依りて存す。

註（一）ヨハネ第一書五〇六―八。參照二〇二十一―二十三、四〇一―三、十五。ボルキット教授曰く、『我等の主の人性の眞に人間的なることを主張する神學上の必要なくば、我等の有する福音書は、決して教會の公式的文書とならざりしならん。

（二）されど、カトリック教會の神學に於ては、議論に不便なる時は、基督の人性の人格的ならざることを無視すること多し。例へば、彼の從順が贖となることを論ずる時の如し。言を換ふれば、基督が他人の爲めにする前に己の爲めにする必要ありしことを考へたる、眞の意味茲にあり。

（三）メーソン博士は、新約聖書に於て、一度ならず、基督を單にアンスロポスといはずして、アネールといひしことを指摘す。アネールは、判然たる個人性の意義を有すればなり（『地上に於ける我等の主の生況』四六―四七頁）。

（四）故チー・エッチ・グリーンは、麗しく此の事を言ひ現はして曰く、『耶蘇が限られたる狀態に於て、制限を受けざる生涯を送り、特殊なる境遇にありて、あらゆる境遇に適用すべき原理を宣傳したる故に、彼の生活と其の主義とは、絶對なりと稱して誤らず』（『全集』第三卷三九頁）。

（五）チーメは、『基督の神聖に就て』四一頁以下に於て、耶蘇の祈の習慣によりて、彼が神と一なるは、本質的の一致にあらずして、寧ろ代表的の一致なることを信ぜざるを得ずと詳論せり。

（六）既に主張せる如く、完全に理想的にして、又た完全に人間的なる品性は、考へ得られざるにあらず。されど此の觀念の、如何に困難なるかは、想像的文學に於て、之を描くに成功せざりし事實、能く之を示さん。テニスンのアーサー王及びジョージ・エリオットのダニエル・デロンダは、近世の文學に於て、能く知られたる失敗の例なり。『達し難かりしことは、此處に初めて事實となれり』てふことは、耶蘇に就てのみいはれ得べし。

（七）詰るところ、耶蘇が罪を犯さゞりしことの充分確實なる事は、彼の人格を信ずる我等の信仰によりて供給せらるゝと論じ得べし。何となれば、實際的に一事實の不可能なるを證し得べき道あらざればなり。

第六此章に關する參考書

基督の完全なる人性

ゼー・アール・シーリー『此の人を見よ』一八六五年
J. R. Seeley, Ecce Homo
サンデイ『基督傳』一九〇六年
Sanday, Outline of the Life of Christ
フオン・ソーデン『基督傳中の最も重要なる諸問題』一九〇四年
von Soden, Die wichtigsten Fragen im Leben Jesu
ウルマン『基督の無罪』一八五八年
Ullmann, Sinlessness of Jesus
ブーセ『耶蘇』一九〇六年
Bousset, Jesus
メーソン『地上に於ける我等の主の生況』一八九六年
Mason, The Conditions of our Lords' Life on Earth
フヰアーベルン『基督傳研究』一八八〇年
Fairbairn, Studies in the Life of Christ
ハー・ヴァイス『基督の人格に關する講演』一八六三年
H. Weiss, Vorträge über die Person Christi
イリングウオース『人と神との人格』一八九四年
Illingworth, Personality, Human and Divine
デウ・ボース『四福音書に於ける福音』一九〇六年
Du Bose, The Gospel in the Gospels
ドラモンド『基督教々理研究』一九〇八年
Drumond, Studies in Christian Doctrine

第七章　基督の神性

前の數章に於て、我等は信ずる者の心が、耶蘇の人格を會得することによりて達したる、直接なる事實を順序を追ふて明にすることを勉めたり。今までに確認したるは、三點なり。第一に、耶蘇に對する信者の特殊なる態度は、彼を信ずる態度なることとなり。第二に、彼を復活して天に擧げられ、空間、時間の一切の制限以上に超越せるものと見らるゝ所に、最も特色ある要素あることなり。第三に、彼は完全なる人として認めらるゝことなり。結局の所まで分析すれば、此の三點は、孰も緊要にして、各他のものを含み又た他のものに含まる。此の章に於て、我等は、信仰の直覺的肯定の研究を終らんとするに當り、我等の信仰は、自然に基督を人の形に於ける神の人格的表現と見るてふ眞理を明にせんと欲す。此の事實に對するあらゆる理論に先立ちて、彼が神的なることの靈的確信あり。此は新しく加ふる結論と云ふよりも、既に得たる結果を纏むる一の適當なる方法といふべきものにして、唯新しく之を力說するの差あるのみなり。

基督の神性に關する問題をば、一の教理的爭點として見る時に、之に近づき得る方面一にして足らざることは明なり。例へば、先驗的假定の道より、之に近づくことを得べし。神學者は、人は贖ひを要する事實より出立して、此の要求に滿足を與ふる爲めに、救主の人格は如何にあらざるべからざるやを尋ね、遂に神のみ救ひ得るが故に、基督は、神人兩性の合したる、神人にてあらざるべからず

との結論に到達し得べし。アンセルムスの『クル、デウス、ホモ』（譯者曰く、『如何にして神、人となりしや』といふ意なり）は、最も能く人に知られたる一例なるが、此の嚴密なる論理的立論法を以てしても、獨立して眞理の眞實なる證明を與へざることは明なり。神の存在を證する本體論的論證と同じく、此は純然たる概念的推論の一種にして、我等の思想に方向と期待とを與ふる點よりいへば益なきにあらざれど、それのみにては、現代の人心に之を信ぜしむる力なし。よし我等の出立點は、罪惡は限りなく重大なりとの一事にありとするも、論理によりて我等の基督觀を定むるは、基督論が常に實驗的にてあり、且つ適切なる實驗は、事實に觸れて燃ゆると云ふ根本的原理に不忠實なるものとせられざるべからず。眞正の基督は、意識の實驗室に於て構成せられずして、歴史に於て與へらる。

第二の方法は經驗的（エキスペリエンシアル）なり。即ち贖罪の必要を基礎とせずして、贖はれたる心靈の事實を基礎とす。シエライエルマッヘルの開きたる道をとり、人に及ぼしたる基督の感化より溯りて、感化の本源たる彼の人格の性質に論及するなり。神に遠ざかりたる人の爲めに神と交る道を開き、爾今以後善事をして誤りなき生涯の行路たらしめ、我等の上に神的の事業をなしたる此人に就て、我等は人格的神性を有せるものと彼を見るの外なし。贖主は贖ひの如し。基督に對して靈的觀念を有する爲めに、此の如き道をとることが、全く必要なることは我等が既に見たる所なり。其他の道によらば、たゞ歴史的の知識、或は固定したる教義に達するあるのみ。耶蘇の性質に一段高きものあることを信ずる眞の信仰は個人的告白なり。『神自身より以下のものにてあらずとそれ自ら宣言する現在と力とを』、彼に於て見出すことの結果なり。是れ以外に、彼の神性の教理に於て認むべき實在あらず。

されど我等は經驗によりて得たる見解は其まゝにて、主觀を超越せる事物の範圍に對照するを要せざる力を有して立てりといふことを、餘り早計に結論すべからず。要するに耶蘇に關する信仰の原始的にして、創造的なる源泉は、記錄せられたる事實なり。故に近頃彼の神性の問題は、主として四福音書に記されたる、其の自意識の方面より接近されたり。我等は耶蘇が、其の事業と、生涯と、言葉とに於て、確實に、其の內的存在を示せることを假定するも可なりとせらる。彼の高尙なる、本性に關する斷言とても、彼が自己に就て有する確信と交渉なきものならば、維持せらるべきにあらず。若し彼が終まで、神と超越的に一なることを、親しく意識せずに止みたりしならば、我等が如何に其ことを肯定するも、何等の印象を與へざるべし。故に上告すべき最後の法廷は、自己に對する耶蘇の證明、即ち信ずる者の心に反響せられ、又た獲得せらるゝ耶蘇の證明なり。信仰なる者は、彼の自己啓現に對する反應なり。我等は耶蘇が彼自ら斯かる者なりと稱せし其者なりと耶蘇を稱せざるべからず。彼の與ふる新しき生命は、彼の如何なる者なるかを證明す。

耶蘇は自ら啓示することによりて、又た彼等の生活に及ぼしたる贖罪的感化によりて、人をして自己の神性を主張せしむる事實に就ては、何等の疑問を提出し得べきにあらず。基督者の意識が、彼を神な

りと信ずることは、是なるにせよ、非なるにせよ、實際に彼を神なりと信じ居ることは爭ひ難きことなり。基督者の意識は、彼を最高超越にして唯崇めらるべき者なるを知れり。此の種類の考が、教會にて行はれたる基督論の無數の細目を庇保し又た之を辯護すといふ人はあらざるべし。されど當然基督論的信仰の中心にして實體たるべきもの、即ち基督は人となれる神なりとの眞理を指すことは、是れ又た牢乎たる確信たるや爭ひ難きことなり。教會は代々明に此事を承認したり。此の信仰が、實驗上より基督に最高の地位を捧ぐる時、その中に如何ばかりのことを包含せるかを常に知り盡したりといふにはあらず。人は强き壓力の下に在りてさへも、宗教上の實際より推論して、結局各歸着すべき筈なりといふ、其の知的結論を自ら好んで無視したることも屢々なり。道德的には基督の神性を受けながら、それを明に肯定することに同意することを辭むことは珍らしからぬ現象なり。此の如きは、一部分は、哲學上の不可知論によれるもあるべく、或は神を倫理的に見るよりも、本體論的に見るが故に、歷史的基督が其神と一にてあり得べしと認め難しと思ふにもよるべし。其の原因は如何にあるにせよ、少くとも、現今、誠實なる人が、眞に『神は基督に於て存せり』との信條的明言に出遇ふ時、迷惑し躊躇することは確實なり。其の贖ひの勢力の偉大なることを、微かながらに現はす象徵、或は譬喩として見れば、彼等は熱心に之を承認すべしと雖も、基督が最高なる者と人格的に一なりてふことを教理として提出する時に、彼等は此の教理を承認することに逡巡す。

されど、若し、我等は、何時までも宗教的確信と、知識的確信とを別々に保持して、其の間に何時衝突の起るかも知れぬ不安に滿足せずば、我等の生活に、耶蘇の勢力を感ずることより、當然生じ得べき、正しき結論を明言する義務あり。我等にとりて、彼が如何なるものにてあるかといふことは、彼が彼自身實に如何なるものにてあるかを啓示するものにして、此の啓示を表はすべき言葉あり得べく、又たあらざるべからず。我等が初に論述したる中に見出したる所によれば、我等には最早選擇の餘地を有せず。讀者の記憶せらるゝ如く、我等は、基督教の神學は、活ける缺くべからざる要素として、基督論を含まざるべからずとの結論に達したり。而して基督論は、人なる耶蘇が、如何なれば我等にとりて神たる價値と、現實とを有するかてふことを合理的に解說したるものに過ぎず。基督は信者が『神體』(ゴッド・ヘッド)といふものゝ一部分なり。我等は教理を立つるに當り、事實としては疑を容れざる此事實を、眞面目に參酌せざるべからず。又た基督者の良心に現はれたる基督の道德的權威は、絶對的最高の位を占むるものにして、其の無限なる中に神の無限性を帶ぶ。是れ亦教理的解釋を要求する一事實なり。即ち耶蘇の聲は、たゞ神のみ達し得べき我等の深き所にまで達すといふ意味なり。又た我等は、神が十字架上に惱み給ふとの直覺を有す。基督の苦難の前に立つ時、我等の罪を負ひ、我等の悲を運ぶものは、彼自身神なることを求めずして悟るなり。ガルバリー山に於ける惱は、確實に神的にして、惡に對する審判は、之によりて發表せられ、神的生命に參與せる基督が、此の生命を罪人の爲めに注ぎ出せるを

悟る。又た基督はその民の中に住み、彼の生命は、創造的にして、直接なる力を彼等の生命に充たしむ。然るに衷なる人に宿り、創作的の衝動を以て人生を燃す此力は、單なる人間的人格にあり得べしと思れざるものなり。若し彼にして神的なる心靈的勢力を附與するものにてあるならば、如何にして彼自身神的なりとの確信を免れ得るか。彼にして完全に父を示すならば、彼は當然彼が啓示する其性に與り得ざるか。最後に、我等は、特に基督敎的なる父なる神に於ける信仰は、子なる基督に對する信仰と結んで解き難しとの明なる立場に到着す。信仰によりて掴み得たる對象を多く多神敎の如く二重にすることなくして、信者は基督の憐の深き所に自己を投じ、靈魂の安息を彼に於て發見す。此の意味に於て、基督者は、たゞ神のみを信じ得るてふことよりも確實なることあらず。

勢力と卓越との此等屬性の宿れる、此の驚くべき人格、何人も彼に傳達したることなき生命を傳ふる此耶蘇を、我等は如何に記述せんとするか。我等が知れる最高の領分に於て、彼は最高なり。彼れ第一原因となりて、我等人類は大なる淵を源として流れ出づる、見るべからざる者の創造的流を受けたり。抑々孰が正しき屬性なるか。現在して我等の贖主となる彼を如何に名づくべきか。確に是れ神自身に外ならず。彼の場合に於ては、我等は最高の語を用ふるに當り、最高の意義を附せずんば、眞面目なる能はず。良心は是れ以下のものを以ては滿足する能はず、そは良心は徹頭徹尾一神的なればなり。デールのいひし如く、『基督に取りて最高なることは、我等の情緒にも、良心にも、亦た意志にも、眞に神なることなり。我生活を支配する最高權威として服從する彼、その罪の赦を得る爲めに我が信賴する彼、義しく生活する力を得ん爲に待ち望む彼、その彼を如何なる名を以て呼ぶとも彼は即ち我神なり。若し我他の人に其名を附するならば、我は基督に其名の示せる實を附す。我にとりて基督は永遠者と一なるにあらざれば、彼は實に永遠よりも以上に立ち、より神的なる特權を有し、より神的なる事業を成就す』（デール『基督敎の理』三一三頁）。我等は此の最高の地位より彼を遮ること能はず。人以上なれど、神以下なりとの假說は、人の思想にとりて一切の興味を失へり。此の問題は終局まで戰はれたることにして、再び開くべきにあらず。プロウス勝を得しならば、敎會は、多數の靈を信ずる異敎に墮落したるならんとは輿論の一致する所なり。信仰は其主が價値と事實とに於て等しく神なることを知れり、是れ天より訪問せる天使にあらず、又た聖者となり或は神となれる人にあらず、唯一なる神の歷史的成肉身なることを知れり。

今まで、我等は、我等の爲めに特別なる勞を執り、我等に對して特別なる關係を有する人に適すべき、正確なる記述の語を索めたり。我等の實驗を單純に寫し取りて、我等は、基督に眞の神性を附與す。是より以上のものはあり得べからず、是より以下のものは確實ならず。此の直接なる信仰の表明は、論じ來れば、我等の主の人間的實驗の或顯著なる特徵の唯一の認諾すべき解釋と調和し得べきことを發見す。其の無二なる人格は、我等が其の力的の基礎と充分なる道理とを求めざるべからざる筈の意味に

於て、之が說明を要求す。基督の事實の前に立ちて、啞者の如く、疑問を發せざることは、不可能なり。又た彼を、正則なる事物の進行に對する除外例、一種の變型、我等の狀態より譯なく免かれたる、不可思議且つ不可解の孤立者なりといふだけにては充分ならず。此は問題を再述するのみにして、之を解釋することゝならず。

余は基督の無二なる人性の三側面、即ち彼の神性に基き、神性を活ける條件とせるものと解して初めて知り得べき側面を擧げんとす。即ち彼の無罪、彼の特別に子たること、彼の超越せる復活の生命是れなり。

（イ）耶蘇が全く罪を離れたることは、明に道德的の遇然以上にして、前後に比類を見ず。最高の見地よりすれば、即ち人を救はんとする神の目的より見れば、彼が全く罪に勝てることは、たゞ生じたる事物にあらずして、生ぜざるべからざることなり。神の救の計畫は破壞せられ得べしと考ふる如き思想は、信仰の許し得ざる所なり。然るに、耶蘇が一度にても、誘惑に負けたらば、神の計畫は破壞せられたるならん。而して神的なる此の計畫の實現は、必然神にあらざるを得ず。我等は、彼が生涯を通じて罪に穢れざることを、神が基督に現在したることに歸せざるべからず。人類が其の特別なる一員を用ひて器となし、媒介となして、己の救を遂げたりといふにあらず。贖ひの全體又た其の各時期は、神自身之が施行者にてあり、各決定的の救の事業は彼によりてなさる。是れ即ち一切の事は、耶蘇が罪を犯さずして其職分を果したるに係る意味にして、之を果したることの結果が、人の救となるべくば、此は一個人が私に立てたる功勞にあらずして、むしろ神の生命が其の中に動きつゝありし一つの思想と、力との發現たらずんばあらず。

然のみならず、我等が無垢の生涯の歷史といひ得る所のもの——成人の意識にありし性質としてそれを媒介する所の一切の事を研究すれば、此事は人生の組織脉絡との關係が何等か特別の條件あるものにのみ、是れあり得ることを示す。何となれば、我等に於て、嬰兒の時期終りて兒童とならんとする時、遺傳的なる不完全の徵候既に歷然たり。罪は充分に意識せる意志の事象とならざる前、自然に宿れるもの、即ち其の先行條件と環境とに於て、根本的に社會性を帶ぶる性質のものといふを得べし。さて基督の一生涯の成熟期に於て、一切罪の痕跡を留めざることは、彼の場合に於て、心靈の此の根源的の異常又は疾病の全く是れなかりしことを意味し、精神覺醒の年に月を重ねて、常ならば晩年我等の內に間違なく發達する罪惡の强き萠芽が、彼には觸れざりしことを見る。換言すれば、彼に於ては腐敗せしむる境遇の感化に對して、全く有効の抵抗をなす所のもの初より存在して、其の完全なる精神的成長の妨害を除き、之に續く感情、意志の內なる泉を防ぎて、あらゆる穢に染まざらしめたり。斯くて、幼き基督が次第に明なる倫理的實驗に目覺めし時、其の本性染まず、汚れず。既に品性の土壤に於て芽を出せる罪惡の種子によりて、初より不利の地に立つことなかりき。他の人に於ては、最も早き自意識

の發動さへ、誤りたる道に行んとする遺傳的傾向の爲めに害せらるゝに、基督に於ては、此の傾向は存せざりき。蓋し、我等人間の境遇に於て、罪なき人格は罪ある幼稚によりて先行さるゝを得ざるなり。如何にして、此の全く例外なる一生の物語を解釋せんとするか。我等若し不可知論に滿足せず、或は此の例外を一の事實として確と認むるに滿足せず、或眞實に知り得べき基礎の上に据えて之を見んと欲せば、耶蘇が神に對する或內部的、必然的の關係を有せるが爲ならずんばあらず。此關係は活ける現實として彼の倫理的自決の豫件を作り、幼少未熟の時期に於ても遂には彼の救拯の事業を成就し得る能力を減ぜず、又た妨げられずして經過し得ることを、確實になし得る如き形成的衝動を起さしめたり。耶蘇と神との一致は、純然たる機械的自動ともいひ得る風に現れ來る自然的の一現象にはあらず。彼が元來神と一なることは、罪なき人格の可能性又た基礎によりてのみ立てり。此れ以下のものによりて立たず。無垢なる成人の生活を始むる無垢なる序文は、其物即ち神と本來活ける固有の一致を暗示す。ケーレルはいへり、『此は一個の奇蹟にして、此は單に腐敗せざる自然の基礎をなすといふのみにては說明せられ難し。此の小兒は、我等總てのものとは、異りたる人格的生活の內容を初より賦與せられて、地上の生活に入りたりと見て、初めて解し得べし。即ち、彼の心靈の生活のあらゆる形、あらゆる時期に於て、無條件に獨立なる意志が、自ら働きつゝありとなし、神の風寵と眞理は、彼に於て肉となりたりとなすならば、初めて解し得べし。』（『所謂歷史上の耶蘇』五四頁）。心理學上の用語を以ていへば、此は初より終まで基督の心に存する慾望、運動、觀念、決心は、一として彼に宿り彼の全生涯を作りつゝある神の意志の肯定實行にあらざるものなかりしとの意味なり。彼に於ける神の現在を制限するものとては、唯一つ、即ち有限てふ制限あるのみなりき。彼のあらゆる行爲に於て、『命を得んが爲めに命を棄てたる、其の自我の忍耐と邁進と犧牲とに於て』、我等は崇敬を以て神の人的生活を見る。

（ロ）福音書は耶蘇を父と特別に親密なる關係を以て生活せるものとして耶蘇を現はせり。此の關係を彼自ら子たる關係と稱したるが、然も他人の達し難きものを有する子たる關係なり。『父と呼ばれ得る唯一の人格ある如く、子と呼ばれ得る唯一の人格なり。』（『福音』二六八頁）。斯く神に屬すとの意識は、少くとも、バプテスマの時より始まる。基督の大なる言葉は、明に子と全人類との間に、此の越え難き差別を豫想するもの多し。且つ彼は、其の特に子たることは、神の贖ひの生命を世界に傳ふる媒介たることを何時でも疑ふ餘地を留めず。子たることは、彼が周圍の人類に同じきこと、即ち彼が彼等と同水平に立てること、彼の誘惑せらるべきこと、彼の謙遜、彼の知識の制限等の事を示し又た解釋するものにあらず。彼が彼等と異なる所、即ち其の比類なく超越せる尊嚴を示す所のものなり。彼は子たるが故に、苦難によりて從順を學びたりとは記されず、子たれども云々と示されたり。子なる語は、明に從屬を示せるが、且つ又た特に神と近き無二の地位を指ざし又た之に重きを置く。此地位によりて彼の人格は造られしなり。新約聖書に於ける最大の基督論的文章は、マタイ傳十一章二十五節乃至三十節にして、

耶蘇の自己に對する證明の絶頂なるが、此の文章に於て以上の事は浮び出づ。此の文章を書き改めんとする企、一にして足らざるが、それに係はらず、我等は、耶蘇の公言したる神の知識は、特別に彼の子たる意識といふものに與へらるゝものとして、考へらるといひ得る道理あり。彼は是に於て、如何にして、父が子を知るに至りしかを語らんとせざる如く、又た如何にして、子が父を知るに至りしかを語らんともせず。子たる資格に於て、子の有せる知識を語りつゝあり。前後の文脈より知り得べき如く、彼が父を知れりといふは、今までは不充分に啓示せられたる神、人を救はんとする目的、又た今、耶蘇に於て實現せられたる其目的の之を現す神の意志、及び性を知るを含めるなり。此の生命を與ふる眞理を受け得る所のものを、罪ある人に傳達せることに於て、耶蘇は神の完全なる器なり。其の完全の度合は、『父の外に子を知る者なし』との無制限なる驚くに堪えたる言葉の中に語らる。耶蘇に於ては、たゞ父のみ理解し得るほど偉大にして又た彼の使命に適し、斯くも無限なるものなるなり。

されば耶蘇が、神と完全なる相互の理解に於て活きしことは、何人も同意する所にして、記錄によれば、耶蘇自身の思想に於て、此の子たることは、神に對し又た人に對して無比にして、人に傳へ難き關係を意味せることも尚ほ亦た一致せる所なり。耶蘇の解釋の眞實なるを假定して、さて此の關係はどれだけ其の性質の理論を含めるか、此は單純なる事實にして一層深き探究を許さゞる事實なるか、こは承くべき事實にして說明し難き事なるか、子たることは、耶蘇の心的經驗に盡くるか、或は其の心的實驗は一の造られざる本體的現實の現象、徵候又た表現にてあるべきか。

此は困難なる論點なり。多くの著者は、基督が子たることを以て、歸する所、彼が神と一なることを感じたる、其の感情なりと定義し、又た彼は特別なる方法に於て神を知れる故に、即ち父との交通妨げられしことなかりし故に、彼は子なりと說明す。之に滿足せずして、他の人は、耶蘇の意志と思想との背後に、神的なる本質（サブスタンス）或は本性（ナチユアー）ありて、意志と思想とは、そが屬性にてあり、此の屬性を離れて實在せる本性なることを主張す。されど後說が敵として爭ふ立場の不滿足なる如く、此說も亦た滿足し難く、一個の範疇として本質といへば、主觀即ち知能あり、意識ある、意志よりも、一段高く且つ適當なることを、假定するにあらずんば、意義を有せず。カント以來の哲學の歷史は、此種の見解に反對して長く有力なる反抗を續け來りし歷史なり。範疇に就ての現代の批評より、何ものか學び得べしとせば、そは確に人格或は自意識よりも、更に高き範疇あり得ざることなり。されば子たる基督の實質的、本質的神性は、之を本質或は本性等の觀念とは別の觀念を用ひて構成せられざるべからざること、是れ我等にとりて正しき推論なりと思はる。即ち子たることの形而上學的側面を立てゝ、倫理的側面に反對する見解をとるべからざることなり。基督の子たることは、徹頭徹尾、倫理的なり（倫理的のみにあらずとするも）、我等は子たることの觀念に充たすに、愛、信賴、從順の如き生活を子らしくなす所のものを以てするにあらずば、子たることは我等の心には何の意義をも有せず。神學は此眞理を閑却したる爲め、過

去に於て、重大なる不信用を來せり。されど今や我等は、徐々として、此の誤解より脱しつゝあり。現代の危險は、蓋し新に倫理的なるものを見出し得たる喜の餘り、倫理的なるものは、且つ又た形而上學的にして、存在そのものに到る鍵なることを忘るゝにあり。事物の終局的、中心的の現實は、意志なり。さて子として基督の意志は、神の意志と一なり、部分的に、間歇的に、或は譬喩的に、然るにあらずして、眞に一體たり。我等も亦た漫然我等の意志を神の意志と一となすなど語ることあり。されど、我等の意志は、神の意志と調和し、或は之に服從し、或はいはゞ之と併行することあり得べしと雖も、眞に一なることは是れあらず。然るに我等が基督に附するものは、實に此の如き眞の一致なり。子の生活の自覺したる活動的原理は、父と完全なる一致結合なるに存せり。さればとて、愛、及び信賴の道德的關係以外まで、再び我等を携へ出だしたりといふにはあらず。斯くするは、復たしても、子を非倫理的になすなり。我等の本意は、是等の關係を單に譬喩と見るにあらず、純粹なる眞理を現はすものとして、全般の價値に就て解釋さるべきことゝなすにあり。此の如く見る時に、基督は本質に於て神と一なること明なり。即ち或明狀し難き本質（サブスタンス）なるが爲めに然るにあらず。人格の構成せらるゝ中心意志に於て然なりとの意なり。故に子てふ名は二つのことを表徵す。第一には、基督が眞に父に服從せることとなり、第二には、彼が本來父と人格的の一致を有せることとなり。彼が永遠との關係の神的に親密なることは、彼を完全なる聖者とのみ見るにあらず、其人の生活が明白に父の生命の中に明確に集中せるものとして、彼を現はす言葉を以て初めて解釋し得べしとなす。

（ハ）　復活せる生命。第三點として加ふる此事は、前二ヶ條と嚴密なる關係を有す。耶蘇が全く罪なきこと、其の子たることの無二なること、又た最後に、彼の復活したる生命は、彼の人格的神性を離れては正當に解し難き事實の連鎖を作れることとなり。是等は、相互に照し合ふ事實なり。復活は基督の偉大を啓示したる唯一の事件にはあらざりしも、兎に角之を啓示したり。彼は、之によりて、力を持てる神の子なりと公宣せられたり。最初の見證者にとりては、之に先立てる比類なき生涯の絶頂、又た解釋として此處に到着せし事に基きて之れが意義を生じたり。耶蘇が一切の罪を脱し、父との交通を前に比類なきほどに實驗したることは、深き疑問を起さしめたるが、復活は、此の疑問に答を與へたり。今まで弟子等はたゞ至つて微なる直覺によりて、彼の存在の超越的性質を觀じ來りしが、今や、彼が本來神と一なることが實現さるゝに及び、一切の事初めて落付く所を得たり。彼等は以後『榮光』の中に彼を見たり、即ち全世界を包み、魂の秘めたる各室に行き亘る賠贖的實効の道に進みたる彼を見たり。我等は此の信仰に參與し、全能にして普遍的なる愛を實行し得る地位に擧げられたることは、彼がたゞ造られたる者にあらずして、眞實に又た嚴正に解釋せんとせば、神的範疇の必要を示す、との彼等の立論をば、形式こそ變れ、我等も亦反復す。耶蘇の復活てふことは、唯蘇生に過ぎざらしめば、此の議論の價値なきことは明なり。然るに耶蘇の復活を想像し得べき他の類例と全く選を異にせしむるもの

は、之れに引き續きたることにして、復活は是が入口又た門戸となりたるものなり。彼が復活したる生命の至上權力は、彼に續くものあるべしと思はれざるものなり。斯くて『高擧』(Exaltation)なる一語を以て簡單に記述せられたる超越的活動は、耶蘇の無垢及び特別の子たることゝ同一方面を指ざすのみならず、彼等と和合せり。完全に子たる生活と其の生活の遂に合したる普遍的榮光との間には、內的に相互の關係あり。孰の場合に於ても、人の與り得ざる經驗は、人の與り得ざる神との一致を表明せり。故に、有限に對して無限の自由獨立を有せる彼にして、初めて、基督者の信仰が、今其主を据ふる地位を充し得るてふことは、事物の究極的眞理の一部分なり。

されど『神格』(ゴッドヘッド)なる言葉は、全く正しき語なるやとの問題を提出するを得べし。不信仰より此問を發するにあらず、信仰よりするなり。基督者の耶蘇觀に關するヘーリングの解說は、其の明快と忠實と、眞に稱讃に價ひするものあるが故に、彼の暗示したる一疑惑にも特別なる興味を帶びしむ(『ドグマチック』四二五、二六頁)。彼は『神格』なる語の歷史的地步を疑ふにはあらず。神を思ふ如く基督を思ふことは、第十八世紀の唯理論者仲間を除けば、代々基督敎の生活、及び神學の印章なりしことは、彼の指示する所なり。又た基督を神と稱することは、新約聖書の文書には稀なることは公平なる聖書解釋の認むる所なれど、さればとて、初代の敎會は、神てふ稱號を高に過ぎたりと感じたりとするは誤なるべし。神といはずとも、之と等しき樣々なる言ひ現はし方あり。基督は父なる神と並びて相等しきものとせられたり。舊約聖書に於て、エホバの神に保留せられたる稱號を、何等の懸念もなく、平然として基督に附せらる。基督者の考如何なりしかは、基督敎以外の世界に與へたる印象によりて示さる。世間は、萬神の堂に、又た一の新らしき神を加へたりとて少しも異存なかりしも、ひとり耶蘇基督を拜するに至りては、全然事態を異にするものにして、道德的態度に革新的變化を起すものなりと認めたり。敎會は異敎の地に於て、『神』てふ名は、漫然用ひらるゝことを知れる故、基督敎團體の中に於ても、誤解の虞あることを感じ、此稱を耶蘇の人格に附する時は、斯る漫然たる意味にあらず、全く新しき意義なることを明にせんとして、特に意を用ひしならんといふも、想像に過ぎたりといふべからず。かるが故に、ヘーリングは、新約聖書に此語の稀なる所以は、其の明瞭を缺くこと、誤解せられ易きこと、『第二の神』てふ多神敎的暗示を與へられ易き危險あることによるものなりと信ぜんとす。此の思想の方針を追ふて、彼は信仰が基督に就ていはんと欲する所のものは、『神格』てふ語を用ひずとも、神の子、主、或は單に耶蘇基督てふ名稱によりて、適當に又た明瞭にいはれ得ることを辯ず。耶蘇基督を告白することは總ての信者の一致する所なれども、彼の神格を斷定するに當り、我等現代人の生活する狀態に於ては、意見の分裂を來すこと必條なり。主、又た救主として、耶蘇を崇むる多くの人にも彼を神なりといふは、一の重荷、又た疑惑の元とならんといふ。

同じ方面に於て、一の典型的意見といふべきは、フアウトの意見なり（『シュライエルマツヘル以後の基督論』九七―九八）。彼は耶蘇の與ふる贖ひの絶對的性質を認め、從ふて又た仲保者の人格の絶對的性質を認れども、之を眞實神なりと斷定するの困難は除き難きことを思へり。彼の主張によれば、神格は最初に昇天したる主に歸せられたるが、それまで行くならば、論理上、更に溯りてナザレの耶蘇にも神格を附せざるを得ず。此處に至りて我等は躊躇す。歴史的基督は、究極的啓示の傳達者なりとするも、之を神といふは不適當なり、何となれば、そは彼の地上の生活の解釋を害するのみならず、耶蘇の一神教とも重大なる衝突を來せばなり。耶蘇に對する信仰と、耶蘇自身の信仰との間に反對を作るは、我等の敢てすべからざる所なり。全能なる父、唯一の神に信賴する信仰と扞格する教義的斷定によりて、福音の朗らかなる光輝を曇らす事は、抑々非福音的なりと論ず。

之に答ふる爲めに、先づいふべきことは、困難の存することが、或一つの見解に對する反對論として、究極的のものにてあり得ざることなり。如何なる見解にしても困難は多きものにて、事實は困難に充てり。與料（データ）を單純に爲過ぐるは、往々學術的研究を害す。目下の場合に於ても、其の與料は複雜多方面なるが故に、教理的に彼等を解釋する決心をなす曉には、複雜なる解釋にあらずば効力なきことあり。神格てふ思想は、人なる耶蘇の輪廓を不明ならしむるが故に、之れを耶蘇に附することの不適當なりとの感は、その觀念の抽象的なるによるものにして、余り論理的にのみ屬性を見るにあらずやといふことも又疑問となし得べし。勿論基督を神とする思想は、基督の眞の人性を、不鮮明に、或は實際疑しきものとする風に、解釋することあり得べきも、此は固より誤れり。斯くて論理學者の所謂『直接斷定』と『間接斷定』とを混じ、神は全知遍在せる者なれば、神なる基督も亦た然あらざるべからずと論ずることを得れども、此の問題は福音書の記錄に存する證據によりてのみ決せらるべきものにして、吾人は惟之によりてのみ、神格が人となりたるものゝ經驗に於て如何なるものを表はすかを學び得べく、又た、神の實在を、彼の意志、及び品性に置かずして、一種の知り難き非倫理的本質に置き、之に基きて、神性が基督に現在するは、たゞ彼の人性と相併びて置かるべく、質的の一致にあらず、量的の併立に歸すべきものと結論することを得べし。是亦我等が耶蘇なる個人を神的なるものと見るを害すべし。モオバリイの言葉を借れば、成肉身の非人間的なる範圍を解放するに至るべし。彼の人格に關する謙虛說の生命となりしものは、彼の眞の人性を經て、神性を讀んと欲する願に外ならざりき。彼等が陷りし或る思辯的末節に就ては如何に考へられ得るとも、又た必ずしも舊式の形式を用ひずとも、彼等の現はす原理に至りては、之を用ひて問題の困難を緩和し得べしと思はる。

困難は存するにせよ、神てふ名の示す事實は、基督者の實驗と有機的關係あるものにして、我等の意思に反してさへも、其の眞理を主張せざるを得ざらしむるものあり。我等はそれの指示する現實の向ふまで手を屈かしめ得ずとするも、其の現在を悟り、又た感ず。何となれば、基督教は要するに、眞空中

に於て活きず、現實の人間の世界に於て活くればなり。是は答へられんと欲する疑問を發する、鋭犀なる且つ獨立の思想ある人に說敎せらる。斯る人に向つて、基督は、總てのものゝ主、神の位に與れる者のゝ信仰と愛と望とを繫ぎ得る者、新生命の發する超越的本源、良心を捉へ、弱れる心を支ふる、見るべからざる現在なりと說きながら、汝の語る其の基督は、我等が神と名づくる究極的實在と一なるや否やとの、單純なる質問を喚び起さゞるを得るか。若し基督敎が道德哲學に對する一貢獻にあらずして、一の宗敎なりとせば、事物の範圍に於て、何處に彼を置くべきか、神の方にか、我等の方にか。一度斯かる疑問が提起せられたる上は、長く之を避くること能はず。基督論が眞實其の靈的生活の一部分なる質問者を抑ふるに、體よく目論見たる沈默策や、用意堅固なる命題の組合を以てするも無効なり。敎會が、信條の中に此問題を避けたりとするも、局外者が之を起したるならん。ヘーリングの如き學者等が、基督の『神格』を說くや、之によりて、我等が單に確實なる宗敎的なる信仰を表白する考なれば可なりとなすや明なるが、我等も確に其以上のことをなさんと思はず。此の語が價値を有するは、つまり簡單に福音を言明するが故なり。たゞ『神』なる語には、同義語を有せざる故に、全く之を用ひずして福音を現はし得ざることを辯ずるのみ。信者が主張せんと欲するは、基督が明に超人的にして、それだけ一部分神的なることにあらず、彼に於て動きたる人格的勢力なる彼の意志は、取も直さず、神の意志なること、是れ我等の主張せんと欲する所なり。さてそれを斷言する道は、結局一あるのみ。

ヘルマンはいへり、『基督が我等になす業に於て、我等は彼の人格の一見解を得べく、此の見解は、彼の神性を告白する中に於てのみ、正しく示し得べし』（『神との交通』英譯一四二頁）。信仰を扨げず、敎授せず、詭辯を用ひず、其の行くべき道に行かしめんか。其の求むる賓辭は是れなり。

若し其の言ふ所にして、信者の基督觀の中に神性は含まれ得べけれど、兎に角必ずしも意識せる含意にあらずといふにあらんか、そは容易に同意することを得べし。之と同時に、信仰の內容を完全なる意識に持ち來り、省察を經ざる經驗の中に含蓄せられたるものを、明瞭にして整頓せる言葉を以て宣明するは、神學の本分なり。故に長き迂回を經て、復た、我等の出發點に歸れり、即ち基督論は基督の神格を豫想するにあらずば意味を有せず、然も其の神格は、たゞ出鱈目の任意の想定にあらずして、彼が信仰の適當なる對象なりてふ確信の半面なりとの確信に歸るなり。『基督を經て神を拜せよ、神としてたゞ基督を拜せよ。』是れ神聖にして犯し難き格言なり。

基督の神格は、眞實なりと雖も、獲得せられたるものなりとの提議に於て、光を得る希望ありや。此の思想は、神話的に聞ゆることは確實なれど、近時の文學に、之を辯護せるもの、全く是れなしとせず。シュルツは、其の能く知られたる著書『基督の神性』に於て、耶蘇は或る點に於て、『基督となれるによりて神となれる』人なりといひ得たり。バイシュラーグも、畧々同樣の見解を提出したり。リッチル學派の內、若干の人も、亦た基督は我等にとりて神たる宗敎的價値を有すてふ一句を以て、寧ろ之

に類する意見を蔽ふことあり得べし。彼等は『實物なしに用は空し』てふ格言を忘れたるが如し。さて新約聖書に於て、適當なる神の觀念を發見せんとするは、絶望的企圖なり。何となれば、本來ユダヤ人の心は、創造の範疇を神に適用すること能はざりければなり。(二) 不變にあらざれども、永久なること――無の中より生れたるにあらず、又零(ゼロ)より實際の積極的の擴大に進むことなきは、神に屬する性なり。故に、信仰より見たる耶蘇は、恩寵によりて、單に聖者の達し得たるそれに比して、遙かに親密なる至高者との一致に登りたるにはあらで、彼の神人的人格の發展は、彼自身の本來有したる超越の範圍の内に生じたるものなり。彼が倫理的に得たる勝利より生じたる眞實の利得なきにあらず、人類の信念と、崇敬とに於て占むる普遍的の新らしき位置是れなり。されど、此の地位に適せしめ、其の職分を果す力を彼に與へたる存在の性質は、時間の創造としてそれ自らを現はさず、永遠の事實として現はせり。且つ基督の神格は、外より得たるものなりとの假定によれば、我等は一の大なる新約聖書の確信を放棄して、神に就て新しき思想を懷くことゝなる。其の確信とは、神が人間の範圍に入るべく基督にありてとりたる最初の歩みは、己を捨つることなりしといふにあり。愛即ち自己の生命を他に與ふる精神は、基督と神との内部的實在にして、彼の歴史的降生に於て超越的に表現せられたり。彼が愛の祭壇に供ふべき、いひ難き賜物を有したるは、一切の時間以前に、神性は彼に屬したるが故にてありき。且つ神性を獲得したりとの觀念は、一段低き倫理的の水平に立てるものにして、崇高の局面に別れたるものなり。(三)

此の如き議論に於て、無視せられ易き一點は現はれ來る。そは即ち、基督教の使命に於て成肉身の占むる最高の地位なり。若し教會の思想が、主の神性に於ける光輝あり又た防禦すべき信仰を維持すべくば、此の信仰は人を救ふ勝利の力に於て、何等の競爭者又は代理者を許さざるゝほど、其の强烈と廣袤とに於て、驚くべき者として自己を現はさゞるべからず。人をして以下のことを悟らしめよ。基督の前に立つ時、彼等の面前に、靈的存在、即ち意志と品性とに於て、神自身と一なる者立てり。彼に對する時、我等は永遠なる者に、少しも讓らざる者に接し、啓示は、是れ以上には進み得ざること直に明白となれり。換言すれば、此の啓示の範圍は、基督教の異りたる特徴を作れり。よし耶蘇基督を他人もなし得る程度の制限と傳受とを以て、神に似たる歴史的人格と見るとも、彼の審判と、彼の慈愛と、彼の罪に對する和し難き反對と、罪人に達し之を得んが爲めの倦まざる熱情とは、天父の現實的顯影を傳達し得ざることなし。ヘルマンはいへり、『基督が我等に對してなすことに於て、我等は、神が我等に對して彼の感情を現はす表現、或は我等の上に働きかくる人格的の靈として現はるゝ神自身を捉ふ。基督を經て神に和したる人々が、信條を採用することを辭むにせよ、必然的に彼の神性を告白する形式は、此の如し。』(『神との交通』一四三頁)。『さて信條を辭む』といふことは、時々、人間の要求に應ずる爲めには、制限せられたる

基督、人的の基督にて足れりといふ意味を有す。之に對して、我等の答は單純なり、曰く、我等は遙に光榮ある福音を思ひ得るものなりと。我等は、神自身現在して、癒し、且つ救ふべしとの思想を懷き得るなり。而して我等の利斷する所によれば、神に關する最も光榮ある思想は、常に最も眞實なり。愛の眞髓は、愛する者の爲めに苦しまんとする願望と意志となり。即ち彼の境遇に入り、其の重荷をとり、あらゆる特權を棄てることなり。たゞ同情ある消息を送るにあらず、或は使者によりて示すにあらず、障害や反對の道理に頓着せず、自ら來るなり。然らずんば、愛は愛として知られず。己の生命を救はんと思ふ者は、それを失はざるべからずてふことは、神に就ても眞實なり（『マクグレゴール『神の子耶蘇基督』一九八頁以下を參照すべし）。

古來人類は、若し神あるにせよ、其の神は愛に於て、實際、我等に近かるべきかの問題に對して、最後の疑惑を有せり。此は世界文學の深き底調に於て、並に低級の宗教に充てる祈願の極端の經驗に於て聞くことを得るなり。たゞ基督が、神と一なりとの消息に於て、此の問題に答を得たり。確に、我等は、前以て贖主は如何に作らるべきものなるかを指定するが如き、此の如き思想を、先驗的方法に於て用ふることを許されず。されど若し我等の思想が、耶蘇に關する我等の發見により教育せられ、また膨張せられたるならば、我等は以下のことを信ずる勇氣を有すべし、即ち彼に現はれたる愛は、其の目的を成就するに必要なる道德的可能より退縮せざることなり。斯くて此は一個の傳寄的なる近代の思想にあらずして、最初より使徒の說教の活ける眞髓にてありき。耶蘇が眞に神と一なりとの發見は、神の恩寵に關して、全く新しき思想を生出したり。ヨハネは記して曰く、『我等神を愛するにあらず、神我等を愛し、其子を遣したる、是れ即ち愛なり』と。此の消息は、世界の頑なる心を碎きたり。我等はなほ基督の人性の眞なるを主張せしが、此の主張は、決して今いふ所と矛盾するにあらず、まして之を否定するにあらず、何となれば、確實なる人間的經驗を受くることは、永遠の愛を限りなきものとして印することとなればなり。斯く、基督の神性に最も深き利害關係を有するものは、宗教にして、神學にあらず。是等は、要するに、唯一個の譬喩、念を入れ過ぎたる象徵、崇敬より出でたる誇張にして、之よりも健全なる省察の方法を以て、靜に告白せられざるべからずと考ふるに至らば、長き間彼等を動かしたる、人に訴ふる高き力は、乏しくせられて復た回復し難からん。神の愛の榮光は、朧なる光彩と薄らぎ終らん。而して此の言葉にあらずんば、解釋し得ざる問題と、之よりも少き賜物にては、滿足を與へ得ざる要求とは、依然として殘るべし。

註（一）ルルナックの『學術と生活より』（Aus Wissens chaft und Leben）第二卷七〇頁七二頁に於ける興味深き文章を參照すべし。此處に彼は『神人格』のみが、正しき言葉なりと述べたり。

（二）チチカスは、神てふ名は、新約書に於て、或流動性と不決定さを以て用ひらるが故に、之を受造物に適用することを得べしと辯ずれども、余は之に贊成する能はず。彼はコリント前八〇五、同後四〇四ヨハネ十〇三四以下を引照す（一九〇五年テオ

ロギンジュ・ルンドヤタ二六五頁)。

(三) 近頃ナーメの論によれば、我等は『神的』及び『神人的』なる形容詞を棄てゝ、之に代ふるに耶蘇を稱して『世界を支配する神の人的代表者』といふゝしこと既く(『基督の神性』六五頁)。此の如くすれば、彼は容易になるべきか。不思議にも、此は哲学的のスコラ觀念の復興なりゝルナン『耶蘇傳』(二五八頁)。

此章に関する參考書

レヴィル『耶蘇基督の神性に關する教義史』(一八七八年)

Réville, History of the Dogma of the Deity of Jesus Christ

デール『基督教ヤ理』(一八九四年)

Dale, Christian Doctrine

ヘルマン『神との交通』(一九〇六年)

Herrmann, Commuuion with God.

ゴアー『バムプトン講演集』(一八九一年)

Gore, Bampton Lectures

『眞理の論爭』(一九〇七年)

Contentio Veritatis.

ニツチュ『福音的教義論』(一八九六年)

Nitzsch, Evangelische Dogmatik

クンツエ『耶蘇基督の永遠的神性』(一九〇四年)

Knuze, Die ewige Gottheit Jesu Christi

フエアーベルン『近世神學に於ける基督』(一八九三年)

Fairbairn, Christ in Modern theology

リッドン『我等の主の神性』(一八六七年)

Liddon, Divinity of our Lord

エチベンバトリー・ダイクス所載のダイクス (Dykes) の文章(一九〇五年十月—一九〇六年一月)

チーメ『基督の神性に就て』(一九一一年)

Thieme, Von der Gottheit Christi

第三卷　信仰の超越的含意

第八章　成肉身に關する基督教的觀念

前篇に於て、我等は立論の方針を略記し、先づ基督に關する信仰の直接の表現を研究し、次に信仰に籠り得る、稍々遠き含意或は豫想を研究することゝせり。我等の事業の第一の部分は、既に之を果し終れり。我等は信仰の直覺的なる即ち素朴なる內容を分解辯護することを求めたり。而して信者の意識にとりて、基督が宗教的範圍に於ては、中心的にして他に與へ難き地位を占むること、彼が復活の至上なる榮光に於て、永へに君臨すること、彼が完全なる人にてあること、彼が本來神的なること、是等は明白にせられたり。教會は充分是等の立場を確信し、己の思想を點檢する時に、そが其所に現在せるを發見す。我等は今歩を轉じて、超越的の諸問題、即ち斯く信ぜられたる基督の人格が、建設的綜合と解釋との事業とに取りかゝる時、人の知力に提出する問題を講究せんとす。信仰の祕義は、理性の活動より引き離すこと能はず。人の心は、其の最高の對象に於てさへも、自己の統一を發見せんと勉めざるべからず。若し基督教が、基督を歴史の拱門（アーチ）の要石とし、神が人を救はん爲め時間の中に現在せる者として宣言するならば、神と人とに對する彼の究極的關係、其の人格に於ける神性と人性との一致に關して、含蓄せられたる問題を考へ、且つ之を考へ拔んとする計畫を避くべきにあらず。是等の問題の中、第一にして又た最も困難なるものは、成肉身の觀念なり。基督の神性を主張することにより、我等は彼が或正眞の意味に於て、肉と成れる神なりとの教理に己を繫ぎたり。今茲に、此の觀念の一般的の意義及び信じ得べき事に關して、質す所なかるべからず。

之に類したる信仰が、樣々の異教的宗教に存する事實を基礎として、基督の場合に於ける成肉身の實らしからざることを暗示したるもの多し。例へば、神はこれらの偉人に體現して現れたりとの確信は、希臘及び印度に於て、廣く行はれたり。基督の物語に類似せる多くの神話は、此の根絶し難き心的傾向より生じたり。此の一事は初より我等の教理の信用を減ぜしむ、と彼等は主張せり。其の時代に於ては、印象的なる人格に成肉身の思想形式を適用したればこそ、耶蘇も亦た人となれる神なりと思はれたり。此の觀念既に人の心に存し、又た之を用ふるを制限すべき、知的困難あることを嚴肅に感ぜざりき。

道德世界に於て、特別なる事件の起ることを期待せられたることが、其の事件の現實を疑はしむる論據とならざることを指摘するを得べし。活ける神を信ぜる人々にとりては、宗教的の渴仰と、不思議なる希望と、敬虔なる心に充ちたる無限の豫兆的曙光とに對して、其の神が、人格的に應酬すべきことは、常に豫め信じ得べきことゝ思はるべし。是等の事を思ふにしても、それが爲め、具體的の證

據を輕んずべき理由あらず。過去の記錄に於て、我等が紛ふ方なく、無二なる自覺を有し、且つ新しき神的生命を人に附與する力ありたる人に出遇ふことありとすれば、多くの『異教的基督』ありたり、との單なる理由により、其人を肉に現はれたる神と認むるを遲疑するを要せず。異教に現はれたる是等の救主を拜する方に人を導きたる、其の要求と憧憬とは、是れ神の靈威によるものにして、空しく空に向ふて延したる可憐なる手に、時來りて、彼は世界の願望の完全なる實現を授けんとせり。斯る經驗は、異教の人の豫備的福音となれるものにて、決して眞の成肉身の遂に來らざりしといふ證據とはならず。成肉身てふことは、それ自身不可能なりといふことを不正當に假定せずんば、之を然かなし得ず。最後の贖ひは忽然として與へらるるものにあらで、之を理解する幼稚なる觀念に伴ふて與へらるるものなる事は、吾等が神の攝理の働なりと知る事と符合する故に、斯る經驗は、我等の信仰の確證となるなり。『神の子によりて、救ははれざるべからざるやうに、我等が造られたりとせば、バタゴニヤ人（其外の者も）が、或種の神の子を夢見ることは不思議なるか』とはよくもいはれたり（チエスタートン『民主主義の宗教的疑惑』一八頁）。されば太古よりありし是等の豫兆は、福音の原因にあらざれども、福音の來りし時、之を認識せしむるものなり。

且つ最初の信者は、基督に關する彼等の最大思想を他より借り來らざりしことは、確實と見るを得べし。『主』及び『贖主』の如き用語の本源は、比較的重要ならず、しかも使徒等は、舊き聯想より是等の語を用ふるに至りたるにあらず。成語には版權あらざれば、新約聖書の中に、異教的用語の反響を留むることもやあらん。されど類似は、言現方にありて、意味にあらず。たゞ言葉の暗合ありたりとて、之に欺かるゝは不可なり。世間に行はれたる神、人となる事、或は人、神とせらるる事の考は、使徒パウロの如き人々に印象を與へざるは固より、彼等は之を憎むべき神を瀆す事として放棄したり。彼に聽きし異邦の聽衆は如何なりしにもせよ、ユダヤ人なる使徒が基督論を立つるに當り、異教的の神靈出現の物語に助けらるることあり得べからず。使徒パウロを導きて、教理の最高頂に登らしめしは、皇帝を『神の子』と名づくる習慣によるにあらずして、基督によれる彼の無比なる經驗なり。主なる耶蘇に於て與へられたる者に較ぶれば、他の『主』は、虛僞冒認の影法師なりとは、彼の感ずる所にてありき。

さはれ又た、基督教の成肉身の觀念は、純然たる倫理的性質によりて、總て他の觀念より峻別せらる。又一方に於て、ギリシヤの神話を卒讀する人にても明なることは、神的生命は有形世界の徑路の上に動けりと見ることなり。サー・ダブルユー・エム・ラムゼイの言葉を引用すれば、『人のあらゆる活動の標本にして原型たる神の性質は、樹木や、穀類などの生活の中に活き又た死せりと見られたり……自然物の生命は決して終らず、死にては復た生れ、異なれども又た同じ。人は死せる神を悼みて嘆けども、やがて神生れ復へりて、其の悲は喜となる』（ヘスチングス聖書辭典第五卷一二三、四頁。）神の根本觀念は、

充分に道德的とならず。アポロは、狠なる母の子として描かるゝを得べく、印度の物語に語らるる神ビシニウの化身にも、極めて汎神的なる世界觀の感化によりて低くせらるゝと思ふ樣々の性質あり。由來印度人の心は、歷史に對する觀念も缺きたるが、『我等が印度敎として知る祭禮や、習慣の百科辭典的集合』の中に、化身の觀念を見當ることありとも、それによりて、或現實なる人格に最高の意義を歸し、之を永刼の時の上に判然たる地位を有せる者と想像せぬやうに用心せざるべからず。印度思想よりいへば、歷史は夢幻の領分に屬し、ギリシャ思想にとりても、歷史の現實は、不變の存在の形と較ぶれば、之を好く見ても、第二義的なる、此の單一なる事實は、孰にありても根抵に横はる哲學の、基督敎の哲學と大に異なる所あるを證するに足れり。ギリシャの神話に於ても、又た印度の神話に於ても、神が人となるてふ思想は、其の環境の千態萬狀なること、また其の色彩も然ることに注意すべし。神の權現は、樣々の時代に、樣々の土地に於て見ることなり。神、人となると、人、神になると、二つのもの混じ合へり。何となれば、君主や、英雄やが、續々昇り行きて、此處に萬神の位成るといふ如き、神格の觀念なりとせば、神の顯現の多種多樣なるも、認め易きことなり。然るに、基督敎に於て、成肉身の觀念は、神に關する完全なる倫理的觀念に支配せらるゝが故に、直ちに一段高き平面に引き上げらる。此の觀念は、倫理的條件を有し、倫理的動機に支持せられ、倫理的の目標或は終局を指させり。耶蘇は心意と良心との訴ふる樣式を以て、靈的の贖ひを成し遂げんとて來り、人をして神を認めし特性は愛と聖と贖ふ力となり。彼によりて救はれたる人のみ、其の高尙なる本性を認め得べく、道德上の更生によりて、其の榮光を仰ぐことを得べし。現代の論述は、屢々之を無視し、基督の倫理的性質と、人に於ける有形的或は自然なる性質とを混じ、此の誤りたる思想に導かれて、漫然各人の裡に基督ありなどと語るなり。されど、新約聖書に支配されたる全宗敎にとりては、基督は單に神の一成肉身にして、他の者も又たそれ〴〵然りといふにあらず、彼は歷史に於ける、神の無二にして本質的なる顯現なり。同じもの二樣にありと思はれず。故に朧なる眞理の影は、異敎徒の心に往來したりとも、徹底せる且つ靈的なる基督敎の信仰を說明する能はず。此は神が己を人に現せしにあらで、人が神に就て考へしことの表現にして、時とゝもに移り行くものなり。

力强く現代人の心を捉ふる觀念の中、神の內在の觀念に及ぶものあらず。我等は今此の觀念と一段高き成肉身の觀念との關係如何を尋ねざるべからず。先づ基督者の主張して憚らぬ內在は、如何なる種類のものなるかに關して、我等の思想を明快にせざるべからず。基督者の內在觀念は、舊約聖書が之れを新約聖書の傳へたる、倫理的一神論と和合したるものにてあらざるべからず、例へば、スピノザは、唯物論者ならざれども、神は心にもあらず又た物質にもあらず、兩者の中に自己を啓示して、孰れ勝れりといふにあらずと說けるが、此の如き立場より解釋したる內在は、常に良心の要求に應ずる

こと能はず。又た神は極端に稀化せる物質の種類にして、空間に瀰漫せる者なりと見る見解（疑もなく無意識に斯く見る場合多かれど）も充分ならず。我等は内在と渾一（イムマヂンスアイデンチチー）とを混ずるを避くることも必要なり。神は世界に住み、之に充ち、之を動し、之が靈感力となる。此意味に於て、彼が世界に内在せるは、精神が身體に内在せるが如く、其の動的普遍性は各部分に直接なる活動的關係を有す。されど精神と肉體とは、一にあらず、是と等しく神も亦た世界と一にあらず。神の意志は、宇宙の力となり得ん爲めに、其の内住せるものに超越せざるべからず。罪人が悔い改めて自己と神との別なるを悟り、罪惡の觀念によりて、鋭くせられ銘刻さるる鮮かなる實感を以て、此の差別を知る時、其人ほど鋭く、神的内住の限界を悟れる者はあらざるべし。要するに、我等は倫理的差別を抹殺し、或は之に關心せざる内在觀念を取る能はず。されど空間と其の中にあるものとの關係より類推して造りたる内在觀念は、遂に此倫理的差別を立てざるものとなる。

さらば、道德的事實に忠實ならんとせば、根本原理として、神の内在は、本來程度の問題にして、其の程度は、道德的に制約せらるるてふ眞理を高調せざるを得ざらしむ。斯く云ふは、即ち成肉身の觀念を内在觀念と調和せしむるに當り、自然界に於ける神的内在の觀念、即ち人のよく云ふ所なる、物質に於ける神の增進的表限の觀念より、思ふほどの光又は助を得ざることを意味するなり。其の理由は主として、物質は神の特有の性質たる聖と愛とを同化し、或は反映する力なきに在り。非人格的なる者、無意識的なる者、或は單に感覺的なるものが、如何にして最高なる心意の機關となり住家となり得るか、是れ我等にとりては、常に不透明にして究め難き問題たらずんばあらず。形式と内容と相副はざること甚しく、そは永へに量り難かるべし。寧ろ良心の聲によりて示さるゝ、神、人に住む事實より多くの光を得べし。されど、我等は信仰によりて、神に合する人々に與へらるゝ、神子たる特權の絶大なるを思ふ時、我等は一段の高所に登るなり。何となれば、人が神的生活の正義と祝福と榮光とを自由に實現するは、斯る人に於て、其の新なる存在に於て見らるべければなり。基督者の實驗は、此の如くにして、神との契合の現實を證明す、但だ此の如く證明されたる契合は、自然的事實にあらずして、向上心と信仰と努力との目的なり。我等は今此の神的内住の事につき、基督を以て、其の超越的絶頂に達したるもの、之に先んじたる各段階に光を注ぎ得るものと視るを得べし。神の内在といはれ得る一切のものは、基督に於て、所を得又た完成されたり。何とならば、形式と内容とを相互に適合せしむる倫理的條件は、彼に於て初めて見ることを得べければなり。而して存在の下等なる樣式は、高等なる樣式によりて解釋し得らるゝとの、確實なる原則に基きて、茲に明知さるゝことは、内在の觀念を捉ふるに、宇宙全體に神が充つることを出發點とするよりも、基督の人格と彼に於ける神の絶對的現在とより出立すれば、一層意義あり且つ明瞭となることなり。基督に於ける神より降り來ることは、自然に於ける神より昇り行くことに比して、更に確實なり。我等が之に照して一層廣き

問題を讀み得る眞の光は、他にあらで、耶蘇にあるのみ。創造の鍵は、之を賠贖的成肉身に發見し得べし。フェアーベルンのいひし如く、『要するに、神、肉體に現はれたりとの觀念によりて起されたる問題、即ち一人格の統一に於ける神人兩性の關係に就き、また此の如き關係の歷史的起源、即ち時間に於ける起源に關し、或は限りなき神性の上に限りある、人性が働きかくる働に關して起さるゝ問題にして、等しく神と自然との交互關係によりて起されざるものあらず。何とならば、完全に現實なる意味に於て、創造は成肉身、自然は無限なる靈の身體にして、又神の思想が生命の呼吸を以て調べ又た充したる機關なればなり。さはれ、問題は類似すれども、解決の希望を有せしむる要素は、創造の場合に於てよりも、成肉身の場合に於て一層有力なり。何とならば、自然に於ては、神の觀念の表現に要するものは、有形的及び論理的範疇に過ぎざれども、基督に於ては、此の範疇は、合理的、倫理的、感情的となり、即ち單なる宇宙的の樣式や勢力やよりも、寧ろ人格的の特性と關係とを含有すればなり。斯く一段高き實在の程度と、又た一段高き存在の特性とを神に帶びしむることによりて、彼の屬性と關係とを總て一層現實になし、彼の行動と其の道とを一層知り得べく、又た現實なるものとなすなり』（『基督教哲學』四七九頁）。

されば、眞によく基督を記述する方法は、彼の人格は、神の絕對的內在を現はせりといふことなり（キルンの『教義學』二〇六頁、イリンワウオルス『神の內在』七七頁參照）。何となれば、神の內在は、人の受容力に應じて、特性と强度を異にせざるを得ず。其の深くなり行くに從ひて、時々一新時期を劃する性質を帶べる、新しき出發、轉機、危機を含まざるを得ず。耶蘇基督の一生は、其の最後にして又た最高なるものなり。彼は一の新しき秩序を開き、加ふるに、此の新しき秩序に於ても、彼は無比なるものと云はざる可らず。『內在』なる語を用ひることにより、我等は基督に於てさへも、神格の流注は、過去と關係なきにあらざる事實を示す。神は始より人に來りつゝありき。神の靈は特に豫言者に宿りて、力と透視力とを彼等に附與したり。それにしても、神の靈の現在は、たゞ間歇的にして部分的なりき。土の器と之に盛れる高き賜物との間の距離多く、斷續的にして變じ易く、又た不完全なりき。されば初より、神の愛の傾く所、又た其の動く所は、有限的意識の中に己を現して、信仰と希望と愛とを充分に喚起する如きものとなるにありき。我等はルウテルと共に、神は常に己が存在の形として、人類に向ひて憧れたりといふべし。我等の思想は、すべての點に於て、永遠に關係せる時間の神秘によりて妨げらるれど、夫れにも拘はらず、我等は、神が常に成肉身に到る途上にありて、創造と預言と賠贖とにより、自ら附與することを新に增し加へつゝ進行し、人格的契合を完備せんとして常に近づくを見る。我等の思想が、ロゴス即ち永久なる子の偉大なるヨハネ的觀念によりて導かるゝは、此の方向なり。何となれば、今耶蘇に現はれたるロゴスは、自己を現はしつゝ常に世界に來る獨りの神の別名に過ぎず。

又一面に於て、斯く神が自己を附與するに對し、人の方に眞の受容力は來れり。此の受容力は、深

く人の倫理的構成に根ざし、之を淨め且つ照す神の感化力により、果てしなき膨脹を遂ぐることを得るなり。神は人間の方に己を抜げ、耶蘇に於て、神人交流の理想的限界は實現せらる。自ら足れりとせざる人性は、其の眞の生命として神的なるものを要し、又た此の要求に答ふるに、聖なる力の中に活動する、際限なき愛あり。人性と其の狀態とを說明する、全く卑俗にしてまた機械的なる學說には成肉身の思想を入るゝ餘地あらず。此の思想は唯人を尊くする思想にのみ伴ふ。斯くて、自我を與へ然も其の之を受くる人格的生命を攝取する神格の特質と、此の如き無限の施與を要し又た之を感受し得る人性の特徵とは、結局相寄りて立てり。兩者自身に於て見れば、彼等は吾等をして、成肉身の事實にあらで、其の可能なるを斷言せしむと雖も、又た基督の神人的人格を解釋せんとする努力に於て理智の爲めに道を準備す。

されど我等は、絕對的內在に就て語れり。而して此の强き形容詞は、神の內在は、基督に於て頂點に達せる事實を證明す。此の頂點は、過去に屬せるものに類似し、然も之を超越して相異なることにより、此の連續の冠冕となるものなり。自我を與ふる神は、全く耶蘇に現在せり。此の行爲は、新しく且つ決定的なるが故に、之に較ぶべきものは、たゞ天地創造あるのみ。豫言者等は、其の本分を果す爲めに、神靈の感動を受けしが、今や此の同じ神的生命は、有機的の統一と全體とを以て、耶蘇に充ち、彼を人間の範圍に於ける神の究極的自現となせり。施與及び覺得ともに、之よりも以上に進むと能はず。施與なくば上より成る救なく、又神の方よりせらるゝ驚くべき犧牲なし。道德的行爲又た過程として此の覺得なくば、我等は尙ほ自然の平面上にあり。而して此の兩面に於て、耶蘇の事實は比類なし。彼に於て實現せられたるものは、彼の降臨より溯りたる、過去にありしものに越ゆるのみならず、又同じく、一切の來者以上のものなり。何とならば、救にてあり又た祝福にてある、神との契合は、彼によりて、今も永遠の後までも媒介せらるればなり。

基督敎の見解よりも、更に深き代用說として提供されたる、『人類に於ける成肉身』てふ、漫然として混亂せる思想が、具體的事實と一致せざることは、此の立場に在りて、明白となるなり。人を引く力を有する如く見ゆるも、此は實に道德的差別の疎放なる抹殺によるものにして、神と人との關係は、有形的にして論理的なる範疇を用ひて解釋し得らるべし、との誤りたる假定の上に立てるものなり。されど道德的條件を取り除きたる現實は、我等が活くる現實にあらず。耶蘇の神性を斷定し得る最深の基礎は、神格の根本的定義を構成すべき、愛と聖きと贖ふ力とが、彼の生活に現在せることなり。されど我等が、人間を全體として觀る時、或は個々別々に觀る時、此の斷定の基礎は明に缺乏せり。人に潛伏したる道德的能力に關して、其の眞相は如何あるにせよ、實際の所は不完全を極めたり。故に神は基督に現在するよりも、ユダに現在せる方不充分なれども、同じく現實なりとの意味を暗示する如き言語を用ふるは、無意義なる事なり。何時かは、我等も基督の如く神的になり得んといふも、

是亦た眞實ならず。我等は神にとりて基督がありし如きものとなれとは求められず。我等が彼がありしと同一意義に於て、神の子となることは、我等の理想又は我等が達せんとして渇仰するものたることを得ず。何處まで似たるものとなり得るとも、人格と使命との差は、終まで存せざるべからず。我等の生命は、何時までも彼の無比なる生命より誘導され、媒介せられ、我等の異なる關係を現はすに、『子たる事』との同一語を用ひ慣れたればとて、兩者の皮相的に一なることを以て、己を欺くべきにあらず。されば內在のことに就ても、最後の言葉は良心なり。總ての人の心は神の一部分なりといふことに對する最後の反對は、たゞ飽まで惡しき人が存するが爲めにあらずして、我等皆それ〳〵の程度に於て惡しき所あることなり。若し人が人たるが故に神の一部分にてあり、罪を犯す我經驗も、實證的に且つ稍や似たる意味に於て、神の經驗にてあらば、最早神の道德的たることは廢れたるなり。我等は、唯單に內在に程度あることを斷定するを理ありとするのみならず、此の程度は、倫理的に限定せらるゝことを斷言すべき理由ありとする者なり。所謂『普遍的成肉身』(ユニバーサル、インカルネーション)なるものは、此の明白なる事實を無視す。創造的人格が、神の爲めになす事業は、彼に內在せる神の現在或は神の力の尺度たる事は相違なけれども、斯くあり得る所以は、彼の成す事業が、神の事業にして、其の特性と目的とに於て、神に似たればこそ、此處に一段高き現在を認め得べきなり。

進化、即ち動的の用語を以て言現はせる內在は、世界の內に、生命の神的原理が發展することなり。

故に基督を考ふる樣式の一(最も意味ある樣式にはあらざるべきが)は、彼を進化の超越的冠冕と觀ることなり。進化の原理よりいへば、神が時間の中に、人格的に現出したるの故を以て、神の最後の啓示なりとする人格、且つ之に寄り添ふことを絕對的宗敎なりとする人格の現實を否定すべき筈なりとの論を立つる者もあり。進化哲學の或形式は、基督の究極性と兩立し難きことは事實にして、是等はあらゆる種類の無制限的價値の思想と兩立し難し。されど斯る思想の樣式が、基督の神性を拒む所以は、先づ神自身の神性を拒みたるが故なりといふを得べけん。神自身の神性とは、其の永久の人格、其の絕對的聖愛、人性に入り來る其の力をいふなり。此處は論者の哲學的主張を仔細に批評する場合にあらざれども、少なくとも、彼等は自然科學の餘りに貧弱なる觀念を自覺的生命に適用し、或は進化して現れ來るものは、先づ含有的潛在的形式に於て存したりと思ふべしとの本義を無視したる爲めに躓けりといふを得べし。されど是れ以外に、此の見點に於て提出せられたる反對論の多くの基礎となれる倫理的原理は、極めて疑はしきものなり。斯て或肉身の敎理、即ち神的生命が、單一なる有限の心靈に現在せりと說く敎理は、本來『不公平』(アンデヤスト)なりと非難する者あり。ストラウスの論によれば、『觀念』は、一切他のものを嫉みて、一つの例にのみ其の充實を注ぐことを欲せず』。此の奇妙なる誤解を幾分尤もらしく思はしむるものは、神的生命の流露を以て、全く耶蘇にのみ限られ、耶蘇のものとなりて他人之に浴し得ざるものゝ如く說く所に在り。されど其の實、神の愛が耶蘇に集中せる所以は、一に

全世界に充ち得んが爲めなり。『彼に充ちたる中より、我等は皆受け恩寵に恩寵を加へらる』、とは即ち之なり。

最後の指摘すべきことは、通常の一假定は假定にして、夫れ以上に出でざることなり。神人の絶對的契合は、精々の所、唯朧なる豫測或は遙なる先見に過ぎずして、進化的過程の完成は、事の性質上最後に到着すべきものなることは、屢々既定のことゝ認められたり。一片の印象としては、是亦た興味を有し得べきも、理性の斷言たる位置を占むることは、之を許すを得ず。精神的運動には、一種完全の域に達して、後世之に及び難き事例なきにあらず、ギリシヤの藝術の完璧といふべきものゝ如き是れなり。ヘラスの血は、其後再びフイヂアス、ソフオクレス、プラトーンを生ぜざりき。先驗的法則を立てゝ、世界の進行を律せんとするは徒らなり。宇宙の進行は、『或所に行けば、全く靜寂なる間より新らしき樂器の音を發する諧樂（シンフオニー）の如きものあり。且又全曲にとりて、最も大切なる、最も完全なる樂器が、最後に現はれざるべからずといふは、獨斷的の假定なり』（ジー、ビー、フオスター『基督教の究極性』）。人間の完成の目標たるのみならず、又た手段とも成るべき者は、歴史の進行中に現はれざるべからず。

されば、基督教の意味に於て解釋せられ、基督に於て、絶對無比の完成に達したりと見られたる神の內在は、たゞ大なる含意の光に照して解釋すべきものなることは明なり。此は人と神との對照を含むのみならず、また兩々相寄る親和をも示せり。神は其の像（かたち）に肖せて造られたる人と深き緣故あり、人はまた、神を感受し易きものなることを含めり。此の範圍に於て、結局的の二元論を假定するは、基督論は失敗すべきものと初より宣告することなり。若し神性と人性とに關する我等の觀念が、異類なる或は矛盾したる要素を含むとせば、同一人格の觀念の中に之を結合し得ざることは、我等が方形の圓、四邊を有する三角、或は直線なる弧線てふことを考へ得ざると同じからん』（ジョン、ケヤード基督教の根本觀念『第二卷一〇五頁）。さはれ、聖書の見解によれば、神人間の契合を考へ難きことゝなすほどの差別は、兩者の間にあることなし。使徒ヨハネは、基督に肖ることを以て、聖徒が將來受くべき賜物となせるが、此の事は、人類の本來の構造に根柢基礎を有せざるべからず。よしんば失はれたる子なりとするも、依然神の子として、神の生命に與るは、其の本然の運命なり。吾等の能く知る如く、人が永遠なる者と人格的に一になり得ざる者と思はるることあるも、其の人格は、基督に於て完全なる表現を見たることと、斯くして示されたる可能性は、歴史上に於て一度、ただ一度現れたるにも拘はらず、人間的なりといふことを思ひ起さるるなり。無限の靈も、有限の靈も、等しく倫理的自覺に參與す。我等は孰にも、智あり、意あり、情ありとするなり。人格的の神にあらずば、人の如き實在者に現るゝを得ず。人格的人性にあらずは、時間に於て神的生命の媒介者となるを得ず。

以上論ずる所に於て、基督に於ける神の成肉身は、其の目的の救治的なることを假定し來れり。そは世界を救はん爲めになされたる、愛の行動にてありき。贖罪の教理に關する、我等の理論的觀念は如何にあるとも、十字架が、神を驅りて親しく現はるゝに至らしめし、强要的の動機を我等に啓示せることは、前論にて假定したる所なり。我等は基督を觀るに、唯十字架の光に於てし、之を離れて、基督は一の抽象に過ぎずとする者なり。從ふて吾等は、基督論を有するの價値あらしむる、深厚痛切なる興味は、十字架あるが爲めなりとす。されど我等は、此事を否定し、若くは少くとも事實を狹く見たるものなり、と主張する議論を瞥見せざるべからず。此見解によれば、成肉身てふことは、罪なくとも是れありしならん。罪なき人類にても、發達の圓滿なる高所に達せんとせば、耶蘇に現はれた如き神の顯現を必要とし、又た之を受けるならん。宇宙の構造其物の中には、基督を含有せり、若し罪なかりせば、彼の一生は、異なりたる狀態を呈したるなるべく、別けて異なる結果に至りしなるきも、彼は尙ほ神の根源的にして又た不變不動なる目的を果さん爲めに來りしならん。諸大家の名を冠する此の見解につきて、我等は如何に之を見るべきか。[三]

新約聖書の明なる敎によりて、之を證明せんと要求する人あらざるべし。基督の使命を直接に罪の征服と結び付けて說ける聖句多かれども、反對の側に於て引用し得る例是れあることなし。『神、基督にありて世を己と和らがせ』と云ひ、『彼等を愛して、我等の罪の爲め、其子を遣して挽回の祭物とせり』と云ひ、又た、『それ諸子は偕に肉と血とを具ふれば、彼も同じく之を具ふ、是れ死をもて死の權威を有るもの即ち惡魔を滅し、かつ死を畏れて生涯つながるゝ者を放たん爲めなり』（コリント後五〇十九、ヨハネ壹書四〇十、ヘブル書二〇十四、十五）と云へる如きは、使徒パウロ、使徒ヨハネ及びヘブル書より引用したる句節なるが、是は他の多くの句節を代表するものなり。是等の明白なる言葉の背後に立ち入りて、使徒の思想には、一層廣き見解あり。其の見解によれば、罪との關係は偶然的にして、成肉身は神の世界的計畫に於ける他の制約を受けざる要素なりと說き得ざるにあらず。されど又た之に反對して、斯くては、新約聖書の遠近法は全く改めざるべからざることゝなるといひ得べし。即ち使徒等は、罪の問題より脫して、結局は純理的なる興味の中に隱るゝを厭はずといふことゝなれど、彼等には、少しも斯る徵候なし。彼等が救の經驗を離れて、神と人との關係を定めんとしたりとは思はれず。

たゝ是れのみならず、此の說には、純然たる假說的斷言に有り勝なる弱點あり。何となれば、我等は罪の現實なる宇宙を知れるのみなればなり。現實なりとても、勿論神ほどに現實なりといふにあらず、罪は不完全なる或は未だ發達せざる善の形なりとまでいはずとも、單に消極のものなりとして罪を解釋せんとする思索に眞理ありとせば、斯く云ふまでの事なり。然れど罪は神ほどに現實ならずとも、神が之に抵抗することなかりせば、我等を亡ぼさんとする程度の積極的現實を有せり。果して然らば、單に知的にのみ構成せらるべきほど假設的なる問題は、疑を挿みて之を見るは、智者のなすこ

となり。『若し基督者の經驗が、今あるものと全く異ならば、如何になすべきか』てふ問題は、全然意味なき問題なり。既に說ける如く、基督に關する我等の觀念は、彼の贖ひの事業と關係し、假りに贖ひの事業を拔き去るならば、判斷の材料は消滅し、『基督』なる語の內容は、際限もなく曖昧となるなり。實驗に基きたる神學は、想像に描ける局面と交涉する所なし。此の局面は、中世の論理學が、神の中間知識(scientia media)なる語によりて之を蔽はんと求めたる所なれど、其の頑固なるスコラ的工夫を用ふることが暗に許す如く、我等の知識とは何の關係する所あらず。

或人は答へて、成肉身の如き中心的事實は、其の現實にせらるゝと否とが、結局人の罪てふ偶然の事に懸る筈なしと云ふべきも、其は益なし。勿論人間の立場より見れば、罪は、必然或は絕對的存在を有せざる限り、偶然の要素なりと記述さるゝを得、又そが廢滅を考へ得べし。されど之を神の側面に移すこと能はず。罪は侵入せるものなるが故に、それは又た神の爲めには一個の驚にてあり、突發的にして侵害的の變事なるが故に、第二の用意をなさゞるを得ざりしと云ふことを論ずる能はず。神は我等が懸念として知れるものに似たる感情を以て、誘惑との人間最初の接觸の結果を待てりとは考ふること能はず。神が豫め世界を知るは、即ち又た道德的害惡を豫知せるなり。罪は初より彼の念頭にありて、其の贖ひの思想は、創造の夫の如く永久的なり。實際上贖ひと創造とは、有機的一致として我等に提供され、單一なる歷史的過程を取れり。此の一體を破壞し、或は論理によりて、此の過程の何物なるか、てふ觀念に生じたる根本的變化の結果を引き出さんとするは徒らなり。神の賠償的の愛は、初と云ふものあらで、彼が人に關する思想の眞髓を造れりとの確信に勝りて、基督者の意識の深き特色を示すもの、他にあるべしと思はれず。

此處に再び確言せざるべからざることは、基督論は最初より救拯論的の關係によりて、專ら支配せられ、又た鼓吹せられたることなり。而して賠償の一事は、今も總て我等の觀察を導く光にてあらざるべからず。若し成肉身の思想にして、我等の心を把持すべしとすれば、其の大なる存在の理由を、罪の實在によりて、神と人とに生じたる嚴肅なる問題に見出さゞるべからず。罪は人類を荒したる故に、人は神の前に生きんとせば、赦しを受けざるべからざる故に、神は人となりたり。されど此事は、我等の點檢しつゝある說にとりては、至大の困難となるなり。若し誠實なる人にして、一面罪の赦と之より生ずる言ひ難き祝福とを意識し、而も又一面信仰の困難なるを悟り、成肉身は、それ自身神と人との性に含蓄せらるゝ故に信ずべしといはんか、將た又罪人を救ふ爲めに大なる業を成就すべきが故に信ずべしといはんか、二者其一を選ぶべしとせば、選擇は單純なり。成肉身は贖罪の爲めなることを斷定せよ。然らば其の目的斯くも鮮かに、斯くも倫理的に、斯くも意味深きが故に、成肉身てふ事實は、如何に無比にして驚くべきにせよ、我等をして幾分か之を理解するを得しむ。罪に對する此の死活的關係を取り去るならば、我等が知れる如き基督は、基督敎の經驗に於ける最も死活的なる事

物に對して、純然たる哲學的關係を以て現はることゝなる。斯く耶蘇に於ける神の人格的現在をば、無限及び有限の本然の性質より生ずる副系として解釋する結果は、問題を歴史的、倫理的眞理の水平より、推理の水平に移し、罪はそれを滅す爲めには之にあらざれば足らざるほどに大きく又た恐しき事實なる所以を滅却し、赦されたる人が、神の愛の奇蹟を觀ずる崇敬驚嘆の感を害するごとゝならざるを得ず。[四]

註(一)　是等は現實の問題にして、神學は常に推理的思想によりて、之を解釋せんと勉むるならん。然れども、我等は理論よりも、一層我等の有せる事實を確實なりとなす者なり。基督と神と一なりとの事實は、信仰にとりては明確なれども、其事の解釋は、何時までも異同あるならん。されど解釋の形は樣々あれど、其の本に彼の超越性の印象あることを豫想す。

(二)　蓋し、思辯的思想を持てる人は、常に此の見地より、新約聖書の宇宙的基督論、例へば、コロサイ書と第四福音書の序論とに現はるゝ如き、基督論に近づかんとするならん。世界の發展が、遂に救はれたる人に於て完成に達する事實は、神の子たること即ち孝子的の生活を時間の上に次第に再現することゝして解釋せらる。即ち神の內的生活の特徴たる永遠に子たることを基礎とし之に則れるものと解釋せらる。有限性の現象を統一し、而して之を知り得べきものとなす理想的原理なば、我等は子たることに於て見出すなり。斯くして、一切の創造と歴史とを單一なる靈的觀念の光に照して見るを得るなり。併し此の觀念たるや、唯單に不完全なる人間的象徴にあらずして、神自身の內にある、人格的、創始的原理が、此の世界の中に成就せられたるを示す。フォーレスト博士の語を借りていへば、『一切の創造の最後の目的は、神的なるものの自現、即ち永久に神格の中に存在せる「子たること」を、神格の外に實現することにある故に、意識的の交に於て、愛を受くるのみならず又た之に酬ゆる、合理的にして靈的なる存在者に於てのみ歸着點を見出し得べし。我等に存する孝子的の意志は、單に神的意志に答ふるのみならず、實に神の本性に根ざしたるものなり』(『歴史上の基督』一八三頁)。人類の過去と未來、否、あらゆる種類の現實は、耶蘇基督に於て我等に來り、神的生活の中に、其の本源を有する恩寵の充滿によりて解釋せらるべきものなり。我等が、コロサイ書に在る如き暗示より得る所は、基督教の宇宙觀の一たるに止らず、結局的なる一の神觀なり。

(三)　ドルネルは、『基督教々理大系』に於て、強く此の見解を主張せり(第二卷二一八頁)。又たツエストコットが、ヨハネ[illegible]一書の註解に附載したる『創造の福音』と題する論文を參照すべし。

(四)　此處に余が『天文學的の威嚇』(アストロノミカル、インチミダーション)といひ得るものを用ふる、一個の反對論に關るゝを便利なりとす。其の異論は即ち是なり、曰く、果しなき天空に於て、たゞ一點に過ぎざる小き一遊星なば、神、人となるてふ驚くべき奇蹟の演ぜらるゝ舞臺となしたりとは信じ得べきことなるか。數知れぬ世界の中、此の一の世界に何故斯かる特殊の恩寵を加へたるか。我等が宇宙的に微小なることを思へば、斯かる觀念は、初より信じ難きものとせざるを得るかと。されど此の如きは、『一に創造を骨さんとする企に過ぎず』(シンプソン『基督の事實』一一六頁)。我等が神の愛と靈魂の偉大とを思ふ時に、此の反對論の尤もらしきことは消滅す。成肉身の爲めに、我等の地球を選びたりといふ思想に困難を見出すは、第一に、他の世界にも住める者あることを假定する(果して然るや我等の知り得ざる所なり)ことなり。第二に、よし他の世界に人類に似たる存在者ありとしても、人は之が爲めに、其の地位を減ずる譯けにあらず。彼等が存在せる爲めに、神來りて我等を贖ふことが考へ難くなると見るは、是れ神の力に制限を附するなり。然れども、空間或は時間に於ける分量てふ思想は、無限なる精神的問題を論ずるには、全く適せざることなり。神果して耶蘇の啓示したる父たらば、余り多く期待することが僭越にあらずして、少きに過ぐること却りて僭越なり。人となることは、神の尊嚴に適せずとの思想は、畢竟道德的の事が物理的の事に勝れたるを無視することにして、且是は無意識的にニイチエに同情せる人の心には入り易かるべきも、物質的偉大を立てゝ、此上なき價値の標準となすものなり。若しも立てられたる目的が、最高美にあらずば、人となることは、神の尊嚴を害することならん。成肉身を信ずる人にしても、そが所謂『常識』に反對せることは、之を否定せざるべし。されど常識とは、畢竟普通の出來事の粗大なる蓄積に過ぎず。成肉身は如何なる理論によるも、全く類なき事なり。是等の考は、大體昔ながらのものなるが故に廢れたるにあらず、其の力は、明に、救治的の目的によ